（八月廿六日月番三藩ゟ廻達書付五通の内）

社寺ニ而是迄菊御紋用來ル者不少候處今般御改正相成社ハ伊勢八幡上下加茂等寺ハ泉涌寺般舟院等之外ハ一切被差止候旨被　仰出候事

但格別由緒有之社寺ハ由緒書ヲ以テ可伺出事

八月　　太政官

従前諸寺院ニ掲示有之候下馬下乘等之札向後取拂候樣被　仰出候事

但格別由緒有之寺院ハ其所部之府藩縣ニ而取調可伺出候事

八月　　太政官

八月廿六日按察使官員等級は開拓使と同格なる旨を達せらる

〔東京ゟ之御用狀扣〕

（八月廿六日月番三藩ゟ廻達書付五通の内）

按察使諸官員等級之儀開拓使同樣被仰付候事

八月　　太政官

八月廿七日本藩鹿子木彌左衛門開墾局兼務を命せらる

〔復古帳〕

別紙壹通相達候也

八月廿七日　　民部省

葛飾縣

（別紙）

當官ヲ以開墾局兼勤申付候事

八月　　民部省

八月廿七日酒田縣權知事津田山三郎東京を發し赴任せむとするに臨み書を元田八右衛門に與へ酒田の狀勢と其抱負とを通報す

〔男爵元田家文書〕

一翰拜呈仕候秋冷相寡候處御全家被爲揃愈御安康奉欣賀候次小生儀碌々消光罷在候間乍憚御放念可被成下候爾後呈書も屆兼失敬御吃捨可被下候　君上ニ茂最早とく御着座被遊唯今比御變革向御筆立相始り一旦之大分紛擾ニ立至り可申歟と相像罷在候扨小弟儀先便得御意候酒田行之一條段々延引いたし來ル廿九日発元出發仕候筈ニ御座候今度奥羽新縣御取立之内酒田之儀ハ一旦酒井家轉封被　仰付其後七拾万金之献金候而復歸被　仰付候等之儀ニ付民心益不居合之由且春來酒田ニ出張之役員酒井家と申分も相生候抔余程混雜之場所ニ而御熟知通之微力ニてハ當惑之儀ハ申迄も無之事ニて迚茂其任ニ堪可申譯も無御座候へ共唯一赤心努力斃而止之決心而已ニ御座候此節ハ安場同行之含ニ而種々周旋仕候得共酒田縣之方ハ以前ニ大參事被　仰付人有之肥前藩西岡周頴少參事之余程下等ニ而安場ハ名も發居候譯ニ而膽澤縣之大參事ニ被命候右樣之譯ニて致方も無御座銘々共縣々ニ盡力可仕と申合邸内殘り人數之内より三五輩募り出其外烏合之衆二拾余人一同羽州へ下向平素蘊蓄之經綸を奥羽之二州へ布施し東北之僻地へ　王化を蒙らしめんと奮發勵精罷在申候御一笑可被下候爰元之事情之何そ相替儀も無御座蝦夷地へ近來魯夷相迫り候由ニ而外務邊少々混雜之模樣ニ御座候其他格別言上之筋も無御座候酒田着之上彼地之模樣之錄上可仕先右之段まて略呈仕候頓首百拜

八月廿七日　　鹿子木彌左衛門　民部省　津田山三郎

元田八右衛門様

八月廿八日北海道を諸藩に分割開拓せしめらる

（東京々之御用狀扣、由明治二年至三年 一新錄自筆狀、復古帳、時勢雜錄）

（八月廿八日津田中嬬より井上治部丞へ渡しの書付二通）

北海道開拓之儀ハ兼而被　仰出候即今之急務ニ付追々御手を被爲着候處何分全國之力を用スンハ成功無覺束依之今般別紙地所其藩に支配開拓被　仰付候間拮据經營實効相立候樣可致候事

八月

熊本藩

根室國之內

目梨郡

標津郡

右二郡其藩支配ニ被　仰付候事

八月　太政官

北見國之內

宗谷

禮文（利尻カ禮文カ）

枝幸

熊本藩

太政官

右金澤藩

十勝國之內

當緣

廣尾

河西

日高國之內

樣似

浦河

右鹿兒島藩

十勝國之內

十勝

下川

河東

上川

右靜岡藩

越路國之內

北見國之內にあり

斜里

網尻

右名古屋藩

北見國之內

紋別

右和歌山藩

根室國之內

目梨

標津

右熊本藩

北見國之內

常呂

網走

右廣島藩

後志國之內

久遠

奥尻

右福岡藩

石狩國之內

樺戸

雨龍

天鹽國之內

增毛

留萌

右山口藩

石狩國之內

夕張

膽振國之內

勇拂

千歲

右高知藩

越路國之内　厚岸　久摺　右佐賀藩　川上

〔明治元年辰正月より十二月迄一新錄探索報告〕

（九月七日附務侯才八報告鹿島藩三宅四郎吉ゟ借受寫取の内）

一辨官御役所ヨリ御呼出ニ而左之通御達

日高國之内　新冠郡　右郡共藩支配被仰付候事　太政官

八月某日鹿兒島北海道開拓の命を辭す

〔明治元年辰正月より十二月迄一新錄探索報告〕

（東京明石謙太郎下廻し之内拔翠とあるものゝ一節）

薩ハ中々するとき所之由先日北海道支配地開拓之儀諸家様同様被仰付候處右ハ冥加之至ニハ候得共余り過分之儀ニ付支配地ニ被仰付候儀ハ御斷申上度願書被差出右土地ハ東國窮民共ニ被下置候様有之度ゝ願出ニ相成候由未タ書付等ハ及見不申段話承り申候

八月廿八日本藩山田十郎外務大錄に任せられ樺太に出張を命せらる

〔復古帳〕

（八月廿八日加藤主馬渡しの書付二通）

山田十郎　右判授之事　己八月　外務省

（右一通）

任外務大錄

右本官を以唐太出張申付候事　山田十郎　八月　外務省

八月廿八日本藩笠亥熊出納大佑に任せらる

〔復古帳〕

（八月廿八日任命の旨本人より相達す）

任出納大佑　笠亥熊　右　宣下候事　八月　大藏省

八月廿八日本藩眞鍋市太左衛門監督少佑に任せらる

〔復古帳〕

八月廿八日ナリ

任監督少佑　眞鍋市太左衛門　右　宣下候事　八月　民部省

八月廿八日本藩荒尾式太職務を免せらる

〔復古帳〕

八月廿八日民部省御呼出ニ而富永又八を以御渡之　御書付寫

其藩荒尾式太儀是迄之職務差免候間此旨相達候事

八月　熊本藩　民部省

明治二年　一三七

八月廿八日我藩長崎留守居役を廢止せしを以て嘉悅市之進が多年の精勤に對し白銀を賞與す

〔御國東京往來狀扣〕

（九月十日附大參事權大參事ヨリ有吉將監中山源次右衛宛書簡の一節）

一白銀五枚　　嘉悅市之進

右者長崎御留守居方被差止候付當御役被遊御免數年出精相勤候付被下置旨

右之通先月（八月）八月廿八日申渡候

八月廿八日我藩昨年奥州出征中の功勞者古閑富次に賞品を與ふ

〔御國東京往來狀扣〕

（九月十日大參事權大參事等より在京中山源次右衛門及び在東京有吉將監へ通報の内）

一御紋附御袷一　　古閑富次

一白銀五枚

右之機密間根取之場ニ而奥州出張中内外ニ懸多端之御用向無御間拔格別出精相勤御役所並御勘定方御用を茂承諸事申談筋行屆戰爭之節之彈藥借受等之儀茂周旋ニおよひ始末非常之辛勞いたし候付被下置旨

右之通八月廿八日申渡候

八月廿九日節儉救恤の優詔を下し給ひしを以て諸官に於ても官祿の内を削減し救恤に充てむことを願ひ本年限り東西兩京の救荒に宛行ふへき旨を布達せらる

〔東京ゟ之御用狀扣〕

（八月廿九日手塚恭助渡し詧根藩より我藩外七藩へ廻達書四通の内）

朕登祚以降海内多難億兆未タ綏寧セス加之今歲淫雨晨ヲ害シ民爵ニ生ヲ遂ル所ナカラントス　朕深ク怵惕ス依テ躬カラ節儉スル所有テ以テ救恤ニ充ントス主者施行セヨ

明治二年己巳八月廿六日

右一通

詔書被　仰出候通兵馬之後庶民未タ安堵ニ至ラサル折柄當年諸道不作物價日增ニ騰貴無告之窮民ハ勿論一同之難澁差迫り殊更東京ハ近來衰微之砌人口ハ從前之通り莫大ニテ遊民最多ク漸次產業ニ基クヘキ御施法モ未タ行屆セラレサル中今日之姿ニ相成且又京都ニ於テハ即今御留守ト相成自然職業ヲ失ヒ困窮ニ立至り候者モ又不少全ク時勢之變遷無據次第トハ申ナカラ必至難澁彼是以テ深ク被爲憫　宸襟格別之御節儉被遊既ニ餙饌供給ヲモ御減少被爲在窮民御救助被遊候就テハ諸官ニ於テモ官祿之内ヲ以テ救恤ニ被充候樣願出之段神妙之儀ニ被　聞食候右者御不本意ニ被爲在候得共願之趣至誠貫通セサルモ御殘念ニ被　思食當年之所夫々減少返上之儀御許容相成兩京救荒ニ可宛行旨　御沙汰候事

但救荒ハ一時之變ニ處スル事ニ付總テ遊手徒食之者無之樣仕法立最可爲急務事

八月　　太政官

右一通

八月廿九日諸藩公議人は執政參政の任務なりしを以て今般改正の正權大參事に相當すへき旨示達せらる

〔東京ゟ之御用狀扣、復古帳〕

（八月廿九日官掌伊藤民之助渡し月番三藩より我藩外七藩へ廻達書四通の内）

公議人ハ執參中ゟ可相勤旨從前之御規則ニ有之今般御改正正權大參事即チ執參ニ相當候間此段爲心得相達候事

八月　　太政官

八月廿九日越後國に柏崎縣を置き岩代國巡察使を廢する旨を達せらる

〔東京々之御用狀扣、復古帳〕

（八月廿九日月番三藩より廻達四通の内）

越後國柏崎縣被取建候事

八月　　太政官

右被廢候事

岩代國巡察使

八月　　太政官

〃

八月某日河内豐崎二縣を廢し堺兵庫の兩縣に併合せしめらる

〔復古帳〕

河内豐崎二縣被廢候ニ付河内縣管轄之堺縣ニ豐崎縣管轄之兵府縣ニ合併被仰付候事

八月　　太政官

八月廿九日先きに府藩縣に貸與せられたる紙幣は東京大藏省へ返納すへき旨を達せらる

〔東京々之御用狀扣〕

（八月廿九日月番三藩より廻達四通の内）

先般府藩縣ニ石高ニ應シ御貸渡相成候楮幣返納之儀ハ東京大藏省ニ於テ取建相成候間同省ニ可相納候事

八月　　太政官

八月廿九日公用人廢止につき本藩宗村加兵衛を以て御用辨の爲め辨官事務所に出務せしむる旨を申告す

〔京都并東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

熊本藩　宗村加兵衛

右者爲御用辨差出置申候此段御屆仕候以上

八月廿九日　熊本藩知事

辨官御中

八月廿九日長岡護美熊本に歸着す

〔東京々之御用狀拓〕

長岡從四位儀八月廿九日着藩仕候段申付越候此段御屆申上候以上

十月三日　熊本藩

辨官御役所　井上治部丞

八月廿九日本藩津田山三郎僚屬を從へ東京を發して酒田縣に赴任す

〔復古帳〕

拙者並別紙附屬之面々共明日當地出立酒田縣ニ罷越申候此段相達申候以上

八月廿八日　津田山三郎（權知事）

參政衆中

覺

渡邊平之助（權大屬）　大森善之助（權大屬）

垣塚文吾（權大屬・令史）　他松士源太（小屬）　岡田八重吉

樋口五郎

以上　　八月

八月廿九日本藩安場一平等東京を發して膽澤縣に赴任す

〔復古帳〕

覺

膽澤縣御用ニ付今廿九日出立仕申候此段御達仕候以上

八月廿九日　　安場一平（大參事）　藤島逸彦（小屬）　祖父江政彦（右仝）

八月某日從來待詔院下局にて取扱ひたる事務は自今集議院にて裁判すへき旨達せらる

〔一新錄皇令〕

待詔院下局之儀ハ天下之才能ヲ待セラルヽ所ニシテ言路洞開上下壅塞之弊ナク卑葬卑賤ニ至ル迄各抱負ヲ盡サセ其所長ヲ御採用可被爲在御趣意ヲ以被設置候處今度御銓議ニヨリ集議院中ニ於テ是迄待詔院下局ニテ取扱候御用等裁判可致旨被　仰出候間其旨可相心得候事

八月　　太政官

八月某日官祿定則及ひ官祿渡方定則を發布せらる

〔明治二年集錄〕

官祿定則

第一等	現米千二百石	第三等	同七百石
第二等	同千石	第四等	同六百石
		第五等	同五百石
第六等	同四百二十石	第十三等	同五十石
第七等	同三百四十石	第十四等	同三十三石
第八等	同二百七十石	第十五等	同二十六石
第九等	同二百石	第十六等分三等	
第十等	同百三十石	一等	現米二十石
第十一等	同八十五石	二等	同十五石
第十二等	同六十七石	三等	同十二石

官祿渡方定則

一官祿ハ一ケ年ノ月數ニ割合隔月廿二日ヨリ三日ノ間ニ區分シ可渡事

但拜命被免共十五日前後ヲ以一ケ月半ケ月之分ヲ可定事

一等外之祿ハ十石ト七石二等ニ定ムヘシ

一官祿金渡シハ前月十日廿日晦日平均相場ヲ以可渡事

但米ヲ願フ者ハ渡シ日十日前ニ出納司ヘ可申出第一等ヨリ六等迄ハ四分ノ一第七等ヨリ十等迄ハ三分ノ一第十一等ヨリ以下半數淺草御藏ニ於テ賜ル最御米ノ都合ニ寄候テハ皆金ヲ以可賜事

一遠國在勤或府縣共金渡シハ前同樣其管轄場所ノ相場ヲ以可渡事

但遠國在勤或府縣共他之管轄ニ於テ請取之儀ハ共預ル所ノ證書於無之者一切不相渡譬右證書ヲ以一時取換ヲ請ト雖ル速ニ戻入可致事

一病氣引其處ニ於テ養生中職務被免無之間ハ官祿可賜事

但日數百日外ニ至候得者職務被免無之共官祿不賜事

一願濟タリ𪜈歸國或他行等之者ヘハ其日數官祿相省候事
一何レノ地ニテ職務拜命致スト雖𪜈其職ヲ奉セサル間ハ官祿不賜候事
一使部仕丁ハ第十六等ノ二等ヲ以テ可賜事
一准スルノ官祿ハ本官四分ノ三心得勤ハ三分之二試補ハ半數ヲ賜ル事
一出仕官祿ハ勅任官奏任官判任官共其下等ヲ以可賜事
一萬一請取過等有之節ハ速ニ返納可致若遲々ニ及候節ハ翌月渡リ官祿ノ内ヨリ引去可賜事
一役儀被免候テ御用有之間歸藩見合滯府可罷在旨御達之者ヘハ右滯府中之官祿ノ三分一ヲ可賜事
一官中之者病死候節ハ爲御手當三今月分之官祿可賜事
一官祿可賜場所ヨリハ定則日限ノ相場隔月當省ヘ可達事
右之通確定之事
己八月

大藏省

八月某日本藩鄕學校を設立す

宇野東風記錄

〔宇野家記錄〕

鄕學校の設立

明治二年八月、時習館中句讀習書二齋の授業を止め之を各鄕に分設して、其地方々々にて教養することに成つた。之を某鄕學と稱するのである。其學校六個所、其位地、區域、職名等左の通り。

山崎鄕學　元田八右衛門宅、八右衛門とは永孚氏の舊名、卽ち故元田男爵のことである。山崎新市街征清記念碑のある側、西南方に當る。

區域　南本山　東追廻　西新町本通より東限

職員　句讀習書齋長辛川幸太郎
句讀師、伊藤權右衛門、加賀山權內
習書師、石井角次郎
世話役、小堀市助、新美定

通町鄕學　佐田新兵衛宅、上通町筋、今熊本警察署前から西草葉町を經て、上通町へ出づる處、明治十年兵燹に罹る前は道路でなく、侍屋敷であつて、其處が佐田宅、卽ち鄕學校であつた。

區域　南本庄　西千葉城　北米屋町尻限、東北草葉町南側限

職員　句讀習書齋長山崎平之助
句讀師　二宮彈助　村上新九郎　赤尾嘉兵衛
習書師　隈部彥四郎
世話役

千反畑鄕學　增田十之助宅、今千反畑大四ッ角藤崎宮大鳥居の東南の地

區域　南草葉町　北建部一圓今黑髮町

職員　句讀習書齋長
句讀師　上妻三右衛門　瀨戸口丈助
習書師　山內忠次郎
世話役

內坪井鄕學　大河原典太宅、觀音橋から東へ行く道筋、北側の中央から少し東方

區域　東南上林限　東北ゴザ打丁　北寺原庚申橋限

職員　句讀習書齋長
　句讀師　明石鑑次郎　村上鹿之助
　習書師　堀内平助
　世話役　岩下才九郎　安岡文之允
宇土小路鄉學　藪田八郎左衛門宅、今京町なる縣立商業學校域内南方の所
區域　南仙勝院丁　東寺原庚申橋西限　西井芹　北池田
職員　句讀習書齋長宇野雲四郎
　句讀師　船津東平　木下重三（後轉役）　笠慎之助　永良慶次郎
　習書師　平野角左衛門
　世話役　安東俊林
古京町鄉學　今陸軍輜重兵營内、同兵營門前西方へ道路開けて、其路の南側に定府屋敷があつて、其處此鄉學が出來た
區域　南高麗門春日　西段山島崎牧崎
職員　句讀習書齋長
　句讀師　財津善之允　植野常備
　習書師
　世話役

八月某日贋金取換の爲め英國より資金借入の談判成立せる由を報するものあり

〔明治元辰年正月より十二月迄一新錄探索報告〕
（東京明石謙太郎下廻し之由拔翠とあるものゝ内）
己八月横濱評判之由
一政府ニ而英國之金を借る之對談整たる由若實ニ然ランニハ日本之安危殆ト累卵ニ近し滿清安南ノ覆轍立處ニ至らんと云々

〔仝　書〕
（九月七日附猪俣才八風聞書の一節）
一英國ゟ銀幣地金御借入速ニ鑄造贋金取換之由

八月某日露艦樺太に來り暴行する由を報するものあり

〔明治元辰年正月より十二月迄一新錄探索報告〕
（東京明石謙太郎下廻し之由拔翠とあるものゝ内）
己八月横濱評判之由
一箱館より急報ニ而北地騷論之事件を申來レリ其事秘して不洩と雖俄羅斯ノ軍艦カラフトニ來リ上陸シテ彼地在留之日本人を追出し不容易模樣ニ付函館在留ノ日本人官吏是を蝦夷地ノ總督たる鍋島閑叟（七月十三日鍋島直正開拓長官に任せらる）ニ告ント東京に來りし由云々

〔仝　書〕
（猪俣才八の報告書ならん）
一蝦夷地ニ魯西亞軍艦三艘と歟渡來　朝廷ニ茂殊之外　御心配之由右飫肥藩清二左衛門話

右件々九月六月集會席ニ而承候事

九月二日在東京我藩林九郎は政府より北海道の境堺談判の爲め丸山作樂を出張せしめらるゝにつき本藩管轄地内視察として島田辨左衛門を隨行せしむへき旨を在京都及ひ在藩の執政に通報す

〔一新錄自筆狀〕（明治二年至三年）

明治二年九月十五日着

以手紙啓達仕候然者先月廿八日辨官傳達所ゟ御呼出ニ付重役代として井上治部丞罷出候處別紙二通津田中辨殿を以御渡有之則寫進覽仕候右之實ニ意外之珍　命ニ付各藩之模樣等如何哉と承繕候處是又別紙書付之通大藩都合十一藩之由ニ御座候秋吉又助儀之當官之事ニ付樣子相尋候處勿論件々都而請込專ら取調居候趣にて同人茂彼地ニ罷越候筈ニ候得共其前一應奉願御國許ニ不遠中罷下候覺悟居候段申出候間熟知之人躰幸之儀ニ付其砌委細直と致言上候樣及示談置申候將又今度　廷撰を以蝦夷地境界談判として島原藩人丸山作樂カラフトに被差越御模樣ニ付當邸ニ相詰居候步御小姓島田辨左衛門事右作樂と兼而入熟之者ニ候間同人ゟ懸合見候處相違茂無之由ニ相聞候付其節辨左衛茂門一同ニ彼地に差越御支配所之樣躰等見聞致せ尤同人儀文筆ニ疎キ由且獨斷ニ而之萬端都合惡ク可有之外ニ今一兩人求出し被差越候樣有之度談合仕居候何茂差寄委敷相分兼申候條迚茂後道之運急ニ被行候事件共不被相考旁承出し候次第猶追々可相達先右之段態と急飛差立如是御座候以上

九月二日

小笠原美濃殿

林九八郎

執政衆中

副執政衆中

尙々御見合之爲蝦夷地圖一折相添差上申候再畢

九月某日本願寺光勝北海道の新道を開通せむことを願ふ

〔一新錄探索報告〕（明治元辰年正月より十二月迄）

（東京明石謙太郎ド廻し之内拔翠とあるものゝ内）

一本願寺ゟ今度開拓被　仰付管之北海道街道切開之儀同寺に被　仰付候樣左候而諸國之人民右土地居住望之儀ハ勝手次第御免ニ相成候ハヽ本願寺手より勸候而差出可申段願出候由（本文の前後には八月下旬及ひ九月上旬頃のことをのせたり）

（備考）

九月三日本願寺光勝北海道ノ新道ヲ創開シ人民ヲ教諭センコトヲ請フ（近世史料編纂綱例）

九月四日兵部大輔大村益次郎（永孚）京都木屋町旅宿に於て刺客に襲擊せらる

〔一新錄探索報告〕（明治元辰年正月より十二月迄）

野村三折より聞取書之覺

一昨四日晩野村三折儀愛甲謙益と相番ニて兵部省治療所へ止宿仕居候處四ツ比河田兵部大丞方ゟ醫局詰合中に書狀參り候付愛甲拔見仕候處木屋丁二條下に大村兵部大夫方下宿ニおゐて怪我人有之候間至急ニ罷越治療仕候樣との旨ニ付兩人共ニ急速罷越候段昨五日私御小屋ニ參り噂仕候付子細相尋候處大村方へ伏見練兵場詰之大隊長何某並ニ加州人（公用人）（人位）鰐と相見美服仕居候由　外ニ今一人都合四人夕方より咽居酒なと出居候處狼籍者五六人切入り大村六ケ所手負大隊長某并加州人ハ卽死外ニ今一人ハ深手數ケ所ニ而昨五日朝相果申候由大村之手水鉢邊ニ打臥居候を家來共介抱いたし愛甲列參候時分ハ外醫治療を施し居候由大隊長ト加州人ハ鴨川河原ニ俯死いたし居候由右下宿ハ河原ニ差臨居候由定而河原ニも狼藉

者待居申たると相見申候又外ニ壹人大村家來か余程相えたらき申たると相見所々手負居候由狼藉者一人ハ討留候由乍然右之者同類より首を打落し持歸申たると相見首無之由尤刀壹本取落有之候由新刀ニ而曲こほれ居候由打身ニて三尺計り柄一尺計之由直ニ長州兵隊伏見兵隊兵部省兵隊繰出右下宿警衛ニ相成申候由噂仕候狼藉者大略心當ニても有之樣子ニ候哉又如何なる意趣ニて候哉承り居候ハヽ申聞候樣尙相尋候へ共一切存不申候段返答ニおよひ申候此段及御聞野村咽之趣書付を以申上候樣被仰聞則聞取之儘相認差上申候猶承り候事も御座候ハヽ早速可奉言上候以上

横田太十郎隊中見締役　德永郡太

九月六日

立石亥藏樣

右大村宅ニ暴發いたし候趣意ハ東京起りえて此元ニて醸成候事とハ不被存益次郎兼々洋服着用いたし候者制方いたし自身ニも平日ハ着用いたし不申候へとも内實ハ充分洋癖家えて服等も類を盡相呼一統をも相誘候志を惡候邊之事より起り益次郎深意を不存者勤王激烈之面々同人跡を逐參暴動いたしたるえてハ有之間敷哉との見込

右ハ湯淺五郎兵衛聞取

聞取書

宿所木屋町二條下ル東側　大村兵部大輔

第二大隊司令試補　加州藩　靜間彦太郎

英學教授方　右同藩　達立孝之助

刀疵六ヶ所

即死

即死

深疵八ヶ所

深疵治療致候處六日朝死

九月四日暮六ツ時比表より二人案内乞萩原秋藏と申手札を差出し面會いたし度由申入ル取次之もの奥へ申入テ答ルニ御用ならハ明日局えて面會せんと云答ル强て面會いたし度間今一應申入呉とのことゆへ取次山田谷次郎當年十六才左樣ならハ今一應可申入由答奥ニ入候を尻ニ續テトヤヽ〳〵ト二人外三人都合五人通り候故取次谷次郎狼せきと大音えて云ズウト大村罷在候坐敷に五人の者踏込有無を云さす切付け候大村之刀の置所少しはなれあり候ゆへ取行レ候へとも初大刀の顏の疵口甚敷兩眼に血流を込目くるミ打倒を候其席ニ居合せ候靜間達立兩人支に候へとも不叶とや思ひけん裏の方へ逃去候を大村なりとおもひ如何なる事哉切入ルもの大村を見知り不申と相見に矢庭に兩人を追懸ケ候兩人ハ河原に五人計待伏居候ハヽ兩人飛逃候處を散々に切伏候追懸候もの取て歸し谷次郎外ニ壹人靜間達立之兩人歸りを待居大村ニ面會せんと罷在候則吉富也兩人戰しと相見へ手負候て打倒候よし河原表之方より仕止メの大聲を揚ケ候ゆへいつをも引取候よし

右等の始末彈正臺より檢使の節大村アラヽ〳〵答候よし深手ニ候得共養生叶らんトノコト如何ニ候哉

川端二條上ル所の死骸ハ賊の方えて此所迄立退倒レ候よし共徒呂顯(露カヽ)悼候哉首を切り七條迄持去候へとも立退の手間ものとや思ひ候哉七條川へ投込去候よし右之死骸ハ京都府より檢使のよしいつをの藩ニ候哉未タ不聞取申猶再聞可申上候得共不取敢荒方申上候以上

兵部省作事取締　吉田晉之助

何レ藩とも不聞

大村兵部大輔家來　山田谷次郎

九月七日

〔仝書〕

中村四郎左衛門

従京師來之書内書抜

以前軍務官副知事當時兵部省大村兵部大輔事長藩大村益次郎と申人也下宿高瀬川東脇木屋町ニ借宅當月四日ノ夜六半時頃萩原俊藏と相名乗り大村氏に面會いたし度段取次ヲ以申入候折ふし來客中殊ニ夜ニ入候間公用ニ候ハヽ明朝兵部省へ御申出私用ニ候ハヽ明後日又來り候へと返答ニ及ひ候取次大村家來山口善次郎也其節之外ニ兩人相見候由然處是非只今御面會御頼ミ申度儀有之候ニ付今一應申通呉ラレ候樣萩原申出ニ相成赤々善次郎可取次心得ニ而引取候跡ニ右三人隠し刀ニ而入込ミ善次郎ヲ切伏セ其儘奥に飛込初太刀大村眉間ヨリ切先肩ニ懸ケ切下二ケノ太刀腰下ヲ切リ候由探手とハ乍申命ハ無恙由ニ御座候其處へ居合候客ハ長藩靜間彦太郎當時第二大隊司令官試補右同人國元之親病氣之由申來介抱願相濟急出立ニ付大村方に暇乞ニ被參候由外ニ加州藩足立孝之介當時參り合居候足立靜間之兩士直ニ拔合セ候處敵ハ用意之切先此方ハ流行短刀何カハ以テ敵スヘキ危キ處に吉富高之介別間ゟ飛來り敵壹人之腕ヲ切落し此時明りヲ消し敵圍ひヲ越し川端ニ出候ニ付右之士引續キ追かけ候處此所ニ案外敵待請足立靜間之兩士ハ討ゑけり吉富ハ諸所深手ヲ負ひ退き候ニ付敵ハ大村討留メたりと聲ヲ揚ケ候由全ク足立靜間之兩士之内ヲ大村と心得候歟敵も壹人深手ニ而逃去兼候者萩原俊藏歟右之敵方ニ而首を打川ニ投込候處五條之川ニ流ゑ橋之柱ニ留り候由胴ハ其儘懐中ニ趣意書有之由敵之何方へ歟逃去未タ何國之者歟趣意も分り兼種々風説のミ後便實説相分り次第可申上候以上

九月十一日認メ

別紙

王政御復古ニ付人材御登用被爲在候　御旨趣ヲ恭ク按シ奉ルニ神州ノ元氣ヲ興張シ武威ヲ外夷ニ光輝賢愚各其所ヲ得

大村益次郎

万民悉ク安堵　列聖在天ノ威靈ヲ奉シ安ンラントノ　朝旨ニ候處此者任職以來内外本末ノ分ヲ不辨專ラ洋風ヲ模擬シ神州ノ國躰ヲ汚シ　朝憲ヲ蔑シ浸ク蠻夷ノ俗ヲ釀シ成ス故ニ人心日々浮薄廉耻地ヲ掃テ盡クノ終知有外夷不知有皇朝シムルノ極ニ至ル數之其罪條不勝枚舉依天神地祇其怒リニ不被爲勝手ヲ我等有志之徒ニ借り加天誅致梟首後鑑トナサシムル者也

〔川島淳著 明治四年 久留米藩難記〕

伊藤源助と云ふは先生(古松簡二)の友人で奥州征伐の時白河口より攻め行く進軍の參謀とやら云ふ幅の利た役を勤め(中略)後に同人が主謀となり大村益次郎が奥羽の戰爭も首尾よく濟んで錦衣故郷に凱旋するの途次伊勢大神宮に參神したとやら其邊の話しは詳に聞か無かつたが何さま維新改革の手始めに先づ第一に大神宮祠官等の祿を削り去り褫ぎ取らねばならぬとやら云ふ話で是れ又詳に聞かなかつたけれども事の主旨は是れ等の者に給する處の俸祿は猿の後手に握る丈けのものを與ふれは夫れで宜しい其の餘は悉く減することにせねば何事も改革は出來ぬ改革の手始めは伊勢にありと論じたと云ふ話が本となり伊藤等は之を名とし謀る所有りしに大村は京都に立寄り妓樓に上り酒宴を催し居る際此源助が他の人々を伴て斬り入り手傷を負はせた

九月某日京都大坂等警衛に從事せし我藩兵員數等を申告す

〔東京より之御用狀扣〕

京都大阪等を初諸港諸塞ニ至迄戍守相勤候兵員且辭令之月日共御屆仕候樣御達之趣奉畏取調候處京都表に御警衛として差出置候人數別紙之通御座候右之外戍守相勤不申候此段御屆申上候以上

熊本藩

井上治部丞

九月

明治二年

兵部省御役所

覺

御再幸ニ付　御留守中御警衛當二月十三日熊本藩知事ニ被仰付候付而兵隊左之通差出置候

隊長　都甲源藏
　　山移三次兵衛
　　仁田市之助
　　大塚貞之允
　　上野多源太
　　山田三郎八
　　横田太十郎

半隊長　安藤健太
　　道家榮太郎
　　立石熊彦
　　片野友雄
　　宮永匠作
　　清原安治
　　永山熊雄

分隊司令士　拾四人
兵隊轡導裨官
太鼓手共
　　三百七拾貳人

隊長以下兵員
合四百人

御留守中桂御所御警衛當六月十八日長岡從四位ニ被仰付候付而兵隊左之通差出置候

隊長　金津次郎右衛門

副隊長　鹽山騏三郎

司令士　貳人

兵隊轡導裨官
太鼓手共

五拾人

隊長　古原信次郎

副隊長　上月半下

司令士　貳人

兵隊轡導裨官
太鼓手共
　　五十人

隊長　水足勘助

副隊長　大木七右衛門

司令士　貳人

兵隊轡導裨官
太鼓手共
　　六拾六人

戰士　拾四人

隊長以下兵員
合百九拾貳人

右之通御座候以上

九月

（編者曰、本書日附不明なれとも先きに西京大坂等ヲ始諸港諸寨ニ至迄戍守相勤居候兵員且拜命ノ月日共巨細來月五日迄ニ可屆出候事と八月の達文あれはこゝに掲載したり）

九月七日澳太利國と條約を締結せし旨及ひ來十二日澳國公使參朝すへき旨を達せらる

〔復古帳〕

九月七日月番ヶ廻狀を以差廻來

今般澳太利亞國ト條約御取結相成候ニ付此旨相達候事

九月

明治二年　太政官

來十二日澳太利亞國公使參　朝候間此旨相達候事

九　月　　太　政　官

九月七日本藩公用人をして負傷せる兵部大輔大村益次郎を慰問せしめ鮮魚を贈る

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

九月七日

一大村兵部大輔元益次郎長藩之由東京事於旅寓狼籍者四日暮切入手負爲有之由ニ付見廻旁公用人被差越候付御仕出を以左之通被相贈

鯉　一折

九月八日開拓使御用にて本藩兼弘安之助佐々淳次郎を上京せしむへき旨を達せらる

〔復古帳〕

右之者御用之儀有之候條國許より呼登着之上正服着用出頭候樣可被申達候仍而此段相達候也

九月八日　　開　拓　使

熊　本　藩　　兼　弘　安　之　助

公　用　人　中　　佐　々　淳　次　郎

九月八日箱館降伏人淺田麟之助等廿五名を我藩に保管せしめらる

〔復古帳〕

九月八日兵部省ゟ御呼出ニ付御所使罷出候處少錄市川五郎を以御書付貳通御渡ニ相成候付淺田麟之助列芝增上寺ニ被差置一ノ宮藩ニ取締被仰付置候付明後十日彼藩ニ懸合受取候樣御達ニ相成候

御書付寫

別紙之者共於函館表ニ官軍ニ抗敵候處今般降伏候間其藩ニ御預申付候條國許ニ引取禁錮爲致置可申事

但禁錮中タリトモ見込ヲ以使役等可勝手事

九月　　兵　部　省

淺田麟之助　　山田一郎
小原弘藏　　幕內幡次郎
石崎益之助　　田中銀次郎
小宮山彥之丞　　蓮沼清三郎
青木由之助　　淺井陽
老海原鍵三郎　　杉浦多嘉吉
小竹銑之助　　關彌太郎
森川善之助　　小田部菊次
小坂三十郎　　大宮清吉
中村兼太郎　　亀谷丑太郎
武川勇次郎　　久保常吉
伊久間市之助　　土屋文次兵衛

小澤敎治

其身より申出候御預人名前

傳習隊
頭並格差圖役頭
左ノ肘焰焙二ヶ所　淺田麟之助　二十六才
衝鋒隊
頭並格改役
居間床下破裂之勢ニ氣絕其後身體不自由　淺井陽　二十四才
陸軍隊
差圖役頭取
刀疵右之足三ヶ所　山田八郎　三十四才
陸軍隊
差圖役頭取
左手腕より肘之間銃焙二ヶ所　小原弘藏　二十九才
傳習士官隊

差圖役頭取　森川善之助　二十三才
傳習士官隊
差圖役頭取　杉浦多嘉吉　二十七才
彰義隊
差圖役　小坂三十郎　二十九才
遊撃隊
差圖役　幕内幡次郎　二十一才
右之手ニ打貫
傳習隊
差圖役　石崎釜之助　二十才
右之肩ニ打貫
傳習隊
差圖役　小田部其九治　二十四才
砲兵隊
差圖役

海軍士官　海老原鑑三郎　二十一才
右之手銃疵二ヶ所
彰義隊
調役　田中銀次郎　十八才
無名指小指ハ打切左之脛ニ打破
彰義隊
繕導役　小宮山彦之丞　四十一才
額兵隊
繕導役　關彌太郎　二十六才
左之脛銃疵
遊撃隊隊士　青木由之助　二十二才
足大指爪ヲ蹴ハなし
砲兵隊
新兵取締　蓮沼清三郎　二十六才
小竹銃之助　四十三才

額兵隊隊士　大宮靜橘　三十才
元箱館裁判所附屬給事序イシヤリ詰
中村兼太郎　四十才
上同趨事序サル詰
亀谷丑太郎　四十二才
同趨事序
ユウフツ詰　武川勇次郎　四十五才
同同
ユウフツ詰タルヤイ出役
同同
シラヲイ詰　久保常吉　二十五才
同同
ホロイツミ詰　伊久間市之助　四十四才
同同
シヤコユ詰　土屋文次兵衛　三十三才
〃二十五人　小澤敬治　四十四才

九月九日彈正忠照幡列之助我藩の龍口邸に至り林藤次に朝命を傳ふ

〔武藤文書櫻園先生遺稿〕

東上日記

九月九日晴霽木（藤木武兵衛又名照幡列之助實櫻園門人なり）來傳　朝命（櫻園八月二十二日東京に至り神ノ口邸に滯在中なり）

九月九日大村兵部大輔を傷けたる嫌疑者齋藤周助等を兵部省の獄に下す

〔一新錄探索報告〕

右者去ル四日大村兵部大輔に手を負せ其後越前府中ニ止宿いたし居候處明石少屬より手筈いたし被召捕一昨九日京着兵部省おゐて入牢被仰付候子細柄并同黨有無之儀ゑ昨今御吟味中ニて委細相分兼候事

羽州久保田藩　　雲藤周助
佐藤猛虎
伊藤竹二郎
三井太郎

九月十一日　　河邊鐵之助

九月十日京都大學校改築につき皇漢學所を休止せらる

〔復古帳〕

明治二年九月十日漢學所ゑ御呼出ニ付後藤彈助罷出候處前紙御書付一通松宇石見を以御渡ニ相成首藤敬助に早々通達可致旨口達有之由宗村加兵衛ゑ相達

一京師大學校御建替ニ付　皇學所漢學所當分御廢止之事

一是迄之御用掛不殘被免候事

九月　　大政官

九月十一日本藩花岡山招魂社の祭日を定む

〔年々覺帳〕

九月十一日

一於花岡招魂祭之儀三月九月兩度共十三日ニ祭日を被定置候若强雨之節ゑ日送り之筈ニ候段少參事中より申來候趣通達有之候事

九月十二日降伏人淺田麟之助等を本藩龍口邸に收容せし旨を申告す

〔東京より之御用狀扣〕

今般降伏之淺田麟之助列二拾五人當藩ゑ御預被　仰付候旨御達之趣奉畏昨十日一ノ宮藩より受取先龍ノ口屋敷内ゑ差置申候此段御屆申上候以上

九月十二日　　熊本藩
兵部省御役所　　井上治部承

九月十二日長藩世子毛利廣封は長岡護美の藩政改革に關する山口藩の施設を尋問せしに對し答書を贈る

〔子爵長岡家文書〕

仲秋念三之朶雲拜誦彌御勇健被爲涉今般被願之通被賜歸藩之命候付去月廿二日京都御發馬川路無御支卽日御着阪相成候由奉壽候抑先般官制御改正ニ付冠藩被爲設知事職從前之藩政改革被　仰出候仍て愈以□幾ヵ藩屏之任被爲盡度之貴慮有之候付此藩改正之次第兼而御承知相成居候ハ、貴地御一新之御參考ニも被備度旨を以從御旅中態々侍臣被差越含命之趣詳ニ拜承御厚情不淺奉畏候然處於拙家も頃日專取調中ニ付卽離及御答他日一定之上芳問も有之候得は條陳可致候委曲貴紀ニ相囑候條不惡御没取希候先ハ拜酬耳如此御座候不盡

晩秋仲二　　廣封頓首

明治二年

長　岡　賢　契

二啓御端書之趣却慢愧逐日冷氣加候自愛是祈前文供芳慮候段幾回も仰諒察午末御序之節兩尊兄へも可然御鶴聲奉願候迂生無恙在藩仕候間休意所願也以上

九月十二日本藩故横井平四郎養母に對し特に救助米四人扶持を給す

〔御國東京往來狀扣〕

（九月廿六日大參事等より在京中山源次右衛門等へ通報の内）

致變死候

横　井　平　四　郎

養　母

右者數代御知行被下置候家筋ニ付別段を以御救として四人扶持被下置候旨九月十二日及達候

九月十三日本藩長岡監物に對し其家臣長崎遊學生井上多久馬に佛蘭西學研究の爲め東京へ轉學を命すへき旨を達す

〔遊學一卷帳〕（慶應元年ヨリ明治三年迄）

御家來井上多久馬儀佛學修業として東京に被差越候條此段可被成御達と奉存候以上

九月十三日

長岡監物殿

少　參　事

九月十四日京都辨官傳達所を留守官傳達所と改稱する旨を達せらる

〔明治二年王政日新錄〕（熊本縣廳所藏）

（九月十四日非藏人口にて醍醐正四位渡前樞藩る廻達之書付）

京都辨官傳達處向後留守官傳達所ト可稱候事

右之通相達候事

九月

留　守　官

九月十四日九戸縣を八戸縣と改稱せらる尋てまた之を三戸縣と改めらる

〔復古帳〕

（九月十四日月番三藩る廻狀を以差廻來候　御書付寫の内）

九戸縣自今八戸縣ト稱候樣被　仰出候間此旨相達候事

九月

太　政　官

〔仝書〕

九月十九日月番廻狀を以差廻來

八戸縣自今三戸縣ト被改候事

九月

太　政　官

九月十四日大村兵部大輔の刺客を嚴密に探索すへき旨を達せられ尋て刺客黨類西國へ逃走の聞あり該地方官は別して至急偵察すへき旨を達せらる

〔明治二年王政日新錄〕（熊本縣廳所藏）

（九月十四日非藏人口にて醍醐正四位渡前樞藩る廻達之書付）

去ル四日夕大村兵部大輔旅宿へ何者之所爲哉及亂暴候段達　天聽深ク　御震怒被爲在候右ハ全ク　朝憲ヲ不奉憚不屆

之至ニ付京地ハ勿論近傍府藩縣共嚴密遂探索候樣被　仰出候間管轄中夫々至急取糺シ當官へ可屆出候事

九月　留守官

（九月十八日七半時過留守官傳達所非藏入口にて醍醐正四位ゟ本藩濱田要之助に對し前達文に付追懸渡したる布告書）

右靈類之内西國筋へ逃去候哉ニ相聞へ候ニ付其地方管轄中別而至急取糺シ當官ゟ可屆出候事

九月　留守官

九月十四日箱館追討に參加せし我藩兵に慰勞の恩命あり

〔東京ゟ之御用狀扣、復古帳〕

九月十八日參政中より　十月十四日着

以別紙相達申候去十四日辨官御役所より禮服着用出頭仕候樣御達ニ付井上治部丞罷出候處澤中辨樣を以別紙御書付并金千兩包壹ッ被成御渡候付差上申候御請之儀者可被仰付越と奉存候以上

尙々本文御頂戴金之儀者自筆を以相達申候以上

細川從四位韶邦

己巳之夏箱館追討之砌弘前ニ在ルノ兵總督之命ニ應シ箱館ニ到リ征戰ヲ遂候段神妙ニ被　思食仍爲其慰勞目錄之通下賜候事

己巳九月　太政官

日六ハ無之候也

九月十四日本藩太田黑亥和太戊辰以來の戰功により賞典祿百七十石を下賜せらる

〔東京ゟ之御用狀扣〕

（九月十四日澤中辨より井上治部丞へ渡し書付二通）

戊辰之秋海路北越ニ至ル時ニ流賊北邊ニ入ルト聞直ニ進テ青森ニ至リ清水谷總督ニ與參シ終始竭力竟ニ平定ノ功ヲ奏候段叡感不淺仍爲其賞高百七十石下賜候事

己巳九月　太政官

（右一通）

高百七十石

依軍功永世下賜候事

明治二年己巳九月（大政官印）　太田黑亥和太

九月十四日松前修廣箱館藩知事の軍功を賞し永世二萬石を賜はる

〔岡本柳之助（日露戰爭）筆北海道史稿〕

（松前氏世記、第十八世松前德廣の一節）

九月十四日從五位安藤信勇修廣ニ代テ參朝ス　天皇出御大納言岩倉具視演達シ修廣ノ軍功ヲ賞シ永世二万石ヲ賜ハリ且ツ隆廣（修廣の叔父）ノ功ヲ賞シテ御刀一口ヲ賜ハル

九月十五日神祇官中に諸陵寮を設置する旨を達せらる

〔復古帳〕

（九月十五日月番三藩ゟ彌狀を以差廻來候御書付の内）

今般神祇官中ニ諸陵寮被爲置候事

九月　太政官

九月十五日大紙幣不融通の憂あるを以て小紙幣を製造し交換せしむへしとの旨を達せらる

〔復古帳〕

（九月十五日月番三藩ゟ廻狀を以差廻來候御書付の内）

金札之儀大札之分僻遠之地ニ而ハ融通ニ差支下民難澁之趣ニも相聞候間今般民部省通商司ニ於テ貳分壹歩貳朱壹朱等小札至急ニ製造追々引替ニ相成候尤引替候大札之分ハ斷截候條兼而爲心得相達置候事

但引替之期限ハ追而從民部省相達候事

九月　太政官

九月十五日海軍操練所を設け各藩より練習生を徴集せらる

〔復古帳〕

（九月十五日月番三藩ゟ廻狀を以差廻來候御書付の内）

今般海軍操練所御取立ニ付十八才ゟ廿歳迄大藩ハ五人中藩ハ四人ッヽ稽古爲修行可差出候事

但食事ハ自分ゟ指出可申事尤出精生達之上ハ等級ニ應シ食用且月給等可被差出事

九月（十五日）　兵部省

藩々連名

扣略

九月十九日來十月五日皇后宮東京行啓の旨を達せらる

〔明治二年王政日新錄〕（熊本縣廳所藏）

（九月十九日非藏人口にて渡室從二位渡し前樞藩ゟ廻達の書付）

來十月五日

皇后宮東京行啓被　仰出候事

九月　留守官

九月十九日諸藩に令し米穀輸出の禁を解かしめらる

〔太政官一卷、復古帳〕

已九月十九日月番廻狀を以差廻來候御書付寫

諸藩ニ於テ米穀勝手ニ津留致候而ハ三都ヲ始メ庶民難澁不少候處近頃猥ニ輸出ヲ禁候向モ有之哉ニ相聞以之外ニ候以來海内一家遠邇同視之御趣旨ヲ奉體速ニ津留ヲ廢シ米穀不融通無之候樣可致旨被　仰出候事

九月　太政官

九月十九日本藩奥州戰爭の功勞者大河原典太等三十人に賞を與ふ

〔御國東京往來狀扣〕

（九月廿六日大參事等より在京中山源次右衛門等へ通報の内）

一御紋附御上下一具　大河原典太
奥州戰爭ゑ差添相働
一御紋附御上下一具　平井井平
一白銀二枚
奥州駒ケ峰戰爭
明治二年

一御紋附御帷子一　平井井平
一白銀三枚
奥州數度之戰爭
一御紋附御上下一具宛　大洞市郎右衛門
金津助之允
古小路才馬

原竈戰爭
一御紋附御帷子一　春木丈之助
原竈戰爭
一御紋附御上下一具　永田彈之允
原竈戰爭
一右同　小山繁藏
右同
一御紋附御上下一具　山内九平太
一白銀二枚
原竈戰爭
一御紋附御帷子一　沼田清人
原竈戰爭
一御紋附御上下一具　垂水惣兵衛
原竈戰爭
一御紋附御上下一具　境野熊藏
一白銀二枚
原竈駒ヶ峯戰爭
一御紋附御帷子一　沼田常雄
原竈等之戰爭
一御紋附御上下一具　緒方一男
原竈等戰爭
一御紋附御上下一具　建山四郎助
一白銀二枚　平井玖珠介
右仝
一御紋附御上下一具　田中章之助
一白銀二枚
原竈駒ヶ峯戰爭
一御紋附御上下一具　永田勝之允
原竈等之戰爭
一右同　緒方甚助
同
一御紋附御上下一具　木村武平太
一白銀二枚
右同
一御紋附御上下一具　岩下末雄
一白銀二枚
一御紋附御上下一具　緒方喜三太
右原紋等之戰爭

一御紋附御帷子一　春木次源太
同
一御紋附御上下一具　中山作之允

九月廿日本藩照幡列之助從五位に叙せらる

〔一新錄皇令〕

別紙之通被仰付候間此段御屆仕候以上

九月廿日　　參政衆中

叙從五位
右宣下候事
九月

一白銀二枚　照幡列之助
一御紋附御上下一具　垂水群之助
同　照幡集議判官
右之通同十九日御書付相渡候

九月廿日本藩主韶邦藩知事に任せられたるを以て御誓文の旨を奉體し維新の宏業を宣揚し知事の職責を盡さんと欲する旨を大參事以下に諭告す

〔明治二年年々覺帳〕

口達　　太政官

明治二年

去ル廿日於御城拜見被仰付候御直書寫二通並覺書一通御奉行所より御渡有之觸支配方ニ茂相示可申旨ニ付則寫之相渡候條被奉得其意相觸中ニ御通達支配方有之面々之可被相示候以上

九月廿四日　　詔邦

御直書寫

今般藩知事被仰付候付而者　御誓文之旨ヲ奉シ御政體ニ法り治教之本立チ富强之道行ハレ維新之御宏業ヲ宣揚シ知事之職掌十分ニ相立度付而者官制ヲ損益シ等級ヲ合併シ簡易之制度ニ歸シ内家分料之儀者被　仰出之趣茂有之非常之省略ヲ加ヒ候覺悟ニ候間一門以下士族末々ニ至迄受來之知行高茂一人之私有ス可キニ非ルヲ知リ天下之大勢ニ通シ事理之所在ヲ辨ヒ一藩之政所者天下之政所ト心得深ク朝意ヲ奉戴シ同心協力シテ我等存意貫徹致シ候樣一際勉勵致シ存付之儀茂候ハヽ不憚忌諱可申出候事

九月

大參事ヒ被成下　御直書寫

今般藩知事被　仰付候ニ付而者　御誓文之旨ヲ奉シ御政體ニ法り治教之本立チ富强之道行ハレ維新之御宏業ヲ宣揚シ知事之職掌十分ニ相立度存意ニ付其方共ニ於而茂天下之大勢ニ通シ事理之所在ヲ辨ヒ一藩之政務者天下之政務ト心得附屬之官吏末々ニ至迄深ク　朝意ヲ體認シ各其職掌ヲ盡シ我等ヲ輔助シ致勉勵候樣賴入候事

九月　　詔邦

九月廿日本藩平山大九郎藩命を以て東京より北見國宗谷に赴く

〔復古帳〕

覺

私儀此節夷蝦北見國宗谷表ヒ被差越今日出立仕候間此段御達仕候以上

九月廿日　　平山大九郎

九月廿二日本藩大江演武場に兵學寮を設く

〔年々覺帳〕

一今度於演武場兵學寮御取建被仰付候付兵學ニ志有之面々之可有出席候尤一應同役調役ヒ問合せ候上出席いたし於寮中之諸事其懸り御役々々之差圖を受候樣被仰付候條左樣相心得觸支配方ヒ茂可被達候以上

九月廿一日　　奉行所

同廿三日　　少參事

右之通候條被奉得其意夫々通達支配方ヒ茂可有御達候以上

九月廿三日大巡察山田十郎彈正少忠に陞任せらる

〔一新錄皇令〕

私儀昨日御用有之候處別紙之通被仰付候間此段御屆仕候以上

九月廿四日　　山田十郎

參政衆中　　山田大巡察

任彈正少忠

右　宣下候事　　太政官

九月

明治二年

九月某日本藩鹿子木彌左衛門葛飾縣判事を免せらる

〔復古帳〕

葛飾判事被　免候事

九月　鹿子木彌左衛門

九月廿四日皇后宮東京行啓につき我藩及ひ姫路藩兵に警衛供奉を命せらる

〔復古帳〕

（九月廿四日兵部省ゟ隊長御呼出ニ付立石亥藏罷出候處渡御之御書付寫）

今般　藩皇后宮東京行啓被爲在候ニ付其藩在京兵隊之内貳小隊御守衛可致旨申達候事

己巳九月　兵部省

〔仝書〕

九月廿四日非藏人口ニ御呼出ニ付御所使ゟ罷出候處葉室從二位殿を以御渡之　御書付寫

來月五日　皇后宮東京行啓ニ付其藩兵隊二小隊前後御警衛供奉被　仰付候事

九月　熊本藩　太政官

〔京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

左之御方樣ゟ今般　皇后宮東京　行啓ニ付此方樣兵隊供奉被　仰付候儀ニ付御使者を以被進候御挨拶且御同方樣ニ茂御一門代重臣並兵隊供奉被　仰付萬端御賴旁御使者を以被仰進候

以上

十月三日　中山源次右衛門殿　酒井從四位樣　宗村加兵衛

九月廿四日本藩宮川小源太民部省土木正心得を命せらる

〔復古帳〕

九月廿四日被　仰付候由試補業宅ニ參當省ニ出仕土木正心得ヲ以可相勤事

己九月　宮川小源太　民部省

九月廿四日京都府民東京遷都を欲せす或は騷擾を釀さむとす府知事等百方說諭に努め僅に事なきを得たり

〔明治元辰年正月より十二月迄〕一新錄探索報告〕

（公用方より廻來長谷川六右衛門書取の内）

一皇后宮東京行啓被　仰出候ニ付九月廿四日ゟ洛中之老若男女悉ク北野天神ニ百度參リヲふし御發途被止候樣祈願之處一同京都府ニ被召出御說諭ニ而漸ク承致候由

〔仝書〕

今般　中宮御所御東下ニ付而去ル廿四日比ゟ府下人民騒擾イタシカケ候付惣組町當府ニ呼出し知事參事連日說諭之次第大略左之通

奥羽北越既ニ平定スト雖モ兵馬騒擾之餘東北之人心モ猶未タ鎮マラス恐多クモ深ク　宸襟ヲ惱サセラレ候ヨリ諸民御安撫之御趣意を以て　御東下被爲遊且ツ諸侯百官ヲ東京ニ被爲召　皇國之大基礎御評議被爲在追々御政體モ相立候得共何分御多端之儀ニ而未タ御確定ニ不相成事件多々有之夫故當秋冬之間ニハ還　幸之御場合ニ至り兼不被爲得已御駐輦ニ而　御越年ニ相成リ時勢トハ乍申恐クモ　聖上ニ於テ一方ナラス　御苦勞被爲遊候御議ト下々ニ至迄恐察シ奉ルヘキ事ニ候然處　今般中宮御所東京ニ被爲召候儀ニ付其御趣意其時體等恐察シ奉ラス徒ラニ世上之流言風說處々之投書等ニ迷惑シ疑惑愁憂ノ餘御千度抔ト稱シ多人數を催シ神社而已ナラス　御所迄茂押懸動モスレハ强訴徒黨ニ齊シキ擧動ニ立至り以ノ外之事ニ候乍去其情實ヲ視ルニ萬一永ク還　幸無之時ハ遂ニハ遷都ノ儀ニハ無之哉且ツ今般中宮御所御東下ニ付而ハ彌以テ案思ラシク然ルトキハ是迄永久御恩澤ニ浴シ罷在候處ノ町人共忽チ父母ニ離ルヽノ思ヲ爲シ附而ハ都下日增シ衰微イタシ渡世立行方モ無覺束ト深ク差迫リ遂ニハ前後之考ヘモ無之唯々　中宮御所を御留メイタシ候得ハ還　幸可有之儀而已一途ニ存込ミ全クハ　聖上ヲ御大事ニ存シ候ヨリノ儀ニ而其方共心中深く察入リ可憚事ニ候然ニ前條申聞候通今年ハ實ニ御余議無キ次第ニ而御駐輦ニ相成候得共決シテ遷都ト申ス儀ハ無之此儀ハ當府ニ於テ篤ト伺を遂ケ有之儀ニ付急度安心可致其子細ハ大嘗會ト申モノハ古來より　帝都ニ無之テハ不被爲行モノニ候處若シ遷都ノ御目的ニ候得ハ當年於東京コソ可被爲行筈ナルニ無其儀年ノ大嘗會御延引ニテ明年還　幸ノ上當地ニ於テ被爲行候儀御決定ナリ是を以テモ遷都無之儀ハ明白ニ恐察シ奉ルヘシ又　中宮御所ヲ召サセラレ候儀ハ元來三種神器ト　中宮御所トハ　玉體ヲ久シク御隔離ト申儀ハ不相成モノニテ因テ當春　御發輦之節御同道被爲遊候筈之處　主上還　幸モ當秋ニハ是非トモト申ス　御内慮モ被爲在候付　中宮御所ハ御殘リニ相成リ候處前條申聞ケ候如ク御余儀ナク當年ハ御駐輦ニ相成リ候付而ハ凡ソ一年モ御隔離ニ相成候儀ハ實ニ御不都合ニ付故ニ此度遂ニ被爲召候儀ナリ依而　中宮御所御東下ニ相成ルトキハ　主上還　幸無之　中宮御所御東下無之トキハ　主上還　幸被爲在候ト申儀ハ更ニ無之假令　中宮御所御留マリニ相成候ともト東京御用向難被爲濟トキハ　主上還　幸ハ無之且ツ素ゟ連綿タル皇統自今猶万々歲を祈リ奉ルヘキハ其方共固より之儀ニ可有之附而ハ　中宮御所久シク御隔離ニテハ實ニ心ニ安ンセサル儀ニハ無之哉左スレハ下々より勸メ奉リテモ　御東下被爲在度事ニ候然ルニ今般其方共ノ擧動ニテハ口ニ主上御大事ヲ唱候得共却而　宸襟ヲ腦マサレ候樣ノ振舞ヲイタシ一ニハ恐多も　中宮御所ヲ質トシテ　主上還　幸ヲ要請スル樣ノ姿ニ相當リ抑モ　主上ニ於テハ遙々東京迄モ御苦勞被爲遊當今内外ノ御苦慮實ニ恐入リ候次第ノ處從來御膝元近ク御恩澤ニ浴シ罷在候　御留守之町人ニシテ却而　宸襟ヲ被爲腦候樣之儀イタシ候テハ重々不相濟此儀其方共心ニ於テ如何ソヤ而シテ今般ノ擧動或ハ彼ノ張紙投書ニ被驚怯怖迷惑心ヨリ出テ候儀モ有之然ル處右投書イタシ候その眞ニ誠心誠意實ニ天下ヲ思フノ忠ナル者ナレハ如此都下騒擾ヲ促スノ投書ハイタサス只懇ニ訴ユヘキナリ如何トナレハ假令一時勢ニ激スルコト有リトモ本來　聖上東京ニ於テノ御苦慮ヲ恐察スルトキハ實ニ御留守都下ノ者をシテ騒擾セシムルノ投書イタスヘキ心出スヘカラス今般ノ投書ヲ熟視スルニ名ハ都下ノ人民ヲ隣ミ徒　幸ヲ祈ルニ似テ其實ハ　朝廷ヲ輕蔑シ而シテ都下ヘ不深切ナリ是則チ亂ヲ好ムノ徒ニアラスンバ不逞ノ徒ノ所爲決セリ然ニ其方共ニ於テハ實ニ　主上ノ御大事ヲ思且都下ノ衰微ヲ憂フルノ誠意有之處偶彼誘一途ニ騒擾シ而シテ其實ハ彼ノ不逞ノ徒ノ世ヲ亂タスノ具ニツカハレ候儀ヲ自ラ不知遂ニ　主上ニ御苦慮ヲカクル而已ナラス都下一タヒ騒擾スルトキハ天下如麻亂レ天下如麻亂ルトキハ其方共終ニ安カラス實ニ靜ニ注意スヘシ依テ當今御留守都下ノ者ニ在テハ兎角少シニ而も主上ノ御苦慮不相懸樣精々心を用則今度　中宮御所御東下等之儀ハ元來ノ趣意ヲ考ヘ徒ラニ騒擾不致只願フ處ハ主上還　幸ノ早キコトヲト申ス趣意ニテ當府ニ歎願シ且ツ神社ニ祈願スルモ彼徒黨强訴ノ形ニ不相成樣實ニ誠意を以何十日ノ心願ヲ籠メ其組町中ニテ惣代トシテ毎日三人或ハ五人位之者參詣シテ以テ祈ルヘシ然ルハ　神慮決シテ可感應當府ニ於テモ固ヨリ其情不堪至感依テ右歎願ヲ束子別便ヲ以テ東京ニ奉リ其方ニ代ツテ急度願ツカハスヘシ若シ之

レヲ用ヒス猶愚昧ノ論ヲ主張シ沸騰スルトキハ法典ニ乖ク而已ナラス神罰モ亦蒙ラン懲ロニ注慮セヨ

九月二十八日　京都府

九月某日姫路藩知事酒井忠邦皇后宮東京行啓の中止せられむことを建白す

〔明治元辰年正月より十二月迄　新錄探索報告〕

姫路藩建白書

今般　中宮様御東下被爲在候趣奉拜承候廟堂之大議愚臣等可計知儀ニハ無御座候得共苧莽愚昧ノ民ニ至ル迄　主上御駐輦之久キスラ深相歎申候況ヤ此度　中宮様御東下被爲在候而之　御遷都之兆カト可奉伺候縱令暫時之　御動座在之共天下之議論沸騰人心動搖可仕哉モ難計且奥羽御平定トハ乍申賊氣未全掃除趣ニ付而之向背如何之憂モ可在之哉乍恐御東下之儀　御沙汰止ニ相成候方可然ト奉存候此段不憚忌諱奉建言候誠恐誠惶頓首再拜

酒井某

己九月

九月廿五日本藩皇后宮東京行啓につき供奉警衛すへき兵員を申告す

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

九月廿五日

一今度　皇后宮東京　行啓ニ付在京之兵隊二小隊御守衛被　仰付旨昨日兵部省より隊長御呼出御書付御渡有之其夕猶又御呼出ニて兵員早々相達候樣御達ニ付左之通取調今朝御屆取計候

今度　皇后宮東京　行啓被爲在候付在京兵隊之内二小隊御守衛可仕旨御達之通ニ付人員左之通

隊長　大塚貞之允
山田三郎八
半隊長

安藤健太
片野友雄
分隊司令士
福田次郎助
内藤信之允
村山仁九平
平山彦三郎
一百拾壹人　兵隊醫師補官太鼓手共
醫師　渡邊道柳
小者一人
隊長以下惣傭合　小者四人

右之通御座候此段御屆申上候以上

九月廿五日　熊本藩
山田三郎八
兵部省
御役所

九月某日我藩及ひ姫路淀兩藩は皇后宮東京行啓供奉に關し疑惑の件を申請して指揮を受く

〔明治二年王政日新錄〕（熊本縣廳所藏）

今般　皇后宮東京行啓供奉被仰付候ニ付左之稜々猶奉伺候

一御休泊附之通候得ハ雪名ゟ之佐屋被遊御廻候儀ト奉存候處御行列立外茂佐屋廻仕候哉又ハ宮ニ渡海被仰付候儀候哉左候ハヽ船御渡ニ相成候哉

但大井川阿部川之儀ハ臺越天龍川富士川等ハ御行列立外茂御役衆御出役越方御差圖有之相對屆ニ而ハ無之儀ト奉存候

御付札
佐屋廻之事

一御休泊ニ而親　御機嫌之儀供奉之重役無之隊長計之儀ニ付如何相心得候而宜敷御座候哉

御付札
不及其儀候事
但山川ノ節之隊長之者　御機嫌伺として可罷出事
一熊本藩隊中ニ之御行列立ニフラフ一流持せ熊本隊之目標ニ仕候事
フラフ持人足可被渡下哉之事
御付札
御規則之外持人足不被渡下候事
右之通宜敷御差圖之程奉願候以上
九月
行啓掛
辨官
御役所

熊本藩
宗村加兵衛

〔仝書〕
今般　皇后宮東京　行啓奉供被　仰付候ニ付爲心得左之件々奉伺候
一行啓御規則書拜見被　仰付候儀御座候哉
朱書
伺之通
一御發輿何日程前惣人數上京爲仕候而宜御座候哉
來月一日比上京可致事
一御道順並御休泊ニ而御門番爲仕候儀ニ御座候哉
一御休泊ニ而兵隊巡邏爲仕候儀ニ御座候哉
右二ヶ條最寄府藩縣ニ被　仰付置候間不及其儀候事
一御發輿御着之外御道中兵員一小隊之内三分ノ一御行列外ニ爲致候而も不苦儀ニ御座候哉
伺之通
一兩藩供奉惣人數宿割之者藩々ヶ差出候儀ニ御座候哉
但右惣人數休泊旅館拂方如何相心得候而宜敷御座候哉
驛遞司ニ可承合事
但書藩ヶ仕拂之事
一彈藥並兩縣兩具等持人御下渡ニ相成候儀ニ御座候哉
藩より通人足を以運送可致事
一兵隊へ御印御下渡ニ相成候儀ニ御座候哉
兵部省へ可承合事
一御休泊ニ而窺　御機嫌之儀如何相心得候而宜敷御座候哉
御休泊ニ而可伺御機嫌事
一御提灯御下渡ニ相成候儀ニ御座候哉
自分提灯可用事
一異人馬車ニ而通行之節如何相心得候而宜敷御座候哉
御通輿之節馬車之儀之發而御差停ニ相成居候事
右之通宜敷御差圖之程奉願候以上
淀藩
岡本勉
姫路藩
龍谷紫
行啓掛
辨官
御役所

九月廿五日大宮縣を浦和縣と改稱せらる

〔復古帳〕
十月十四日金澤藩ニ於非藏人口御渡之御書付寫同藩ヶ差廻來ル
大宮縣自今浦和縣ト被　稱候事
九月
右之通於東京被　仰出候間此段相達候事
十月
太政官
留守官

九月廿五日外國人に暴行を加へたる我藩兵卒谷富熊彦及ひ關係者を處罰せらる

〔一新錄旱令〕

一同(九月)廿四日兩人共明廿五日辰刻不遲召連罷出候樣刑部省より申來候付例之通被差出候樣との儀且端書ニ當人とも病氣ニ有之候共押而召連出頭いたすへく段茂申來候段達有之候事

熊本藩兵卒　谷留熊彦(谷留實ハ谷富)

其方儀去月十七日於途中英國公使に對シ拔刀及亂暴其場を遁去藩邸ニ潛伏罷在候段兼々御布告之趣茂有之上は常々相心得可罷在筈之處無其儀前條之始末不屆之至ニ付名字帶刀取放流罪申付ル

熊本藩兵卒　佐藤七左衛門

其方儀去月十七日同輩谷留熊彦儀於途中英國公使に對シ拔刀及亂暴遁去候處其節同行ニ有之上ハ至當之取計可有之筈之處無其儀同役手之者より不審ニ預候砌同行ニ無之旨申歎ク始末不屆ニ付名字帶刀取放シ笞罪申付ル

熊本藩　後藤惣左衛門

其方隊中谷留熊彦儀於途中英國公使に對シ及亂暴候條兼而御布告之趣モ有之處畢竟平常隊中締方不行屆ヨリ右及所業段不束ニ付謹慎申付ル

熊本藩　林九八郎

其藩兵卒谷留熊彦儀於途中英國公使に對シ及亂暴候條兼而御布告之趣モ有之處畢竟平常示方不行屆ヨリ右及所業段不束ニ付謹慎申付ル

九月廿五日

九月廿五日本藩知事留邦谷富熊彦の暴行に關し謹慎を命せらる

〔一新錄旱令〕

以別紙啓上仕候去廿三日辨官より御用之儀有之候間同廿五日御名代并重役之者禮服着用參朝仕候樣御剪紙相達候處御名代并私儀差支候付名代として崎村常雄罷出候處林少辨より被相渡候由ニ而別紙相達候御書付共寫二通(中略)此段相達爲可申如斯御座候以上(寫一通は公用人より常雄出頭して書付拜受せし由の屆書也)

九月廿八日　　叡田熊之助

大參事衆中

權大參事衆中　　熊本藩知事　細川韶邦

外國御交際ニ付而ハ兼テ御布令ノ旨モ有之處今般其藩兵卒谷留熊彦儀於途中英國公使へ對シ及亂暴候條常々示方不行屆之段不束之事ニ候依テ謹慎被　仰付候事

九月廿五日　　太政官

九月廿五日本藩上野堅吾諸陵大屬に任せらる

〔一新錄旱令、東京より之御用狀扣〕

判任諸陵大屬

九月廿五日　　上野堅吾

明治二年　　神祇官

九月廿六日本藩小倉戦役功勞者原田熊之助に賞品を與ふ

〔御國東京往來狀拓〕

（十月九日大參事等より在京中山源次右衛門等へ通報の内）

覺

一御紋附御上下一具　原田熊之助

右者小倉戦爭之節延命寺赤坂島越に應援として罷越差入及苦戦陳拂之節茂諸事行屆候付被下置旨　九月廿六日及達候

九月廿六日本藩山田十郎照幡列之助上京以來の勤勞に對し金子下賜の旨を在東京重役をして傳達せしむ

〔京都江戸狀扣〕

以別紙申達候

山田十郎
照幡烈之助

其方共儀去ル亥年御親兵として京都に被差登置候處同夏已來長々滞京御用相勤且八月十五日非常之節茂致出精候付別紙之通從　朝廷金子被下置旨被　仰出候條可有頂戴候

右之通被相達候樣存候以上

九月廿六日

林九八郎殿
飯田熊之助殿

大參事

被仰越通致承知夫々及達申候以上

十一月十一日

九月廿七日留守刑部省を廢し刑法事務を京都府に委任せらる

〔復古帳〕

九月廿七日非藏人口に前橋藩御呼出醍醐殿を以御渡之御書付

留守刑部省被廢候事

但以後刑法之儀ハ京都府へ被委任候事

右之通爲心得相達候事

九月

飯田熊之助
佐々木大參事

留守官

九月廿八日海外輸出の蠶卵紙並に生絲の驗査所を諸開港場に設置し其税則を定めて布告せらる

〔復古帳〕

（九月廿八日民部省産物會所にて藤井小佑より我藩公用人へ渡し）

蠶糸布告書

諸開港場に輸出之蠶種紙並生糸之類賄作僞製或ハ不正之仕立荷ヲ作リ貿易致ス者間々有之哉ニ相聞御取締ハ勿論遂ニハ　皇國之名義ヲ汚シ隨テ貿易衰頽國民失利之基ニ付今般御取締ノタメ東京ハ從前之通其他大坂並諸開港場最寄に改所被爲建候ニ付其旨相心得右改所之内便宜之方に輸送改ヲ受候上外國人ト取引可致万一心得違之者有之無改之品取引致スニ於テハ其品取揚候而已ナラス急度　御沙汰之品モ可有之間心得違無之樣可致事

但蠶卵紙之儀者其生産スル所之國所並製作人名前ヲ紙背ニ相記シ調印之上可差出事

右之通蠶糸渡世之者共ニ無遺漏可觸達但委細之儀ハ租税司ニ打合セ可申事

己九月　民部省

税則

一種紙本部壹枚　税金永百文

一生糸　九貫目ニ付　税金四兩

一眞綿　九貫目ニ付　税金壹兩

一駄斗糸　九貫目ニ付　税金三兩

一皮むき生皮苧　九貫目ニ付　税金壹分貳朱

一屑糸　九貫目ニ付　税金貳朱

一出殼蛹　九貫目ニ付　税金貳分

一山繭種　壹斤ニ付　税金貳分

以上

九月廿八日本藩知事韶邦謹慎を解除せらる

〔東京公之御用狀扣、一新錄皇令〕

今日辨官御役所より重臣衆御呼出ニ付爲名代井上治部丞罷出候處澤中辨殿より別紙御書付一通御渡ニ相成候間則相達申候以上

九月廿八日　公用人中

參政衆中　熊本藩知事　細川韶邦

謹慎被免候事

九月廿八日　太政官

九月廿八日持旨を以て公現親王徳川慶喜松平容保等の謹慎を宥免せらる

〔防長回天史第六編下〕

（明治二年秋期ノ大勢抄略）

二十八日特旨ヲ以テ公現親王ヲ伏見宮ニ復歸祿ヲ賜ヒ又徳川慶喜松平容保以下ノ謹慎ヲ宥ルス勅ニ曰ク

朕聞名君德ヲ以テ下ヲ率ヰ庸主法ヲ以テ人ヲ待ツ顧フニ亂賊常ニ有ラス君德如何ニアルノミ今ヤ北疆始テ平キ天下粗定ル慶喜容保以下ノ如キ各宜シク寛宥スル所アツテ自新セシメ以テ天下ト更張セン

明治二年己巳九月廿八日

而シテ松平容保林忠崇昌之ノ家ヲ存祿シテ繼嗣ヲ立テシメ大久保忠禮安藤信正ノ永蟄居酒井忠淳ノ蟄居伊達慶邦父子南部利剛酒井忠篤丹羽長國阿部正靜牧野忠訓水野勝知ノ謹慎ヲ宥ルシ久松定昭上杉齊憲久世廣文堀直賀板倉勝尚田村邦榮松平信庸酒井忠良岩城隆邦本多忠紀内藤政養南部信民等ニ爵位ヲ賜フ

〔海舟日記〕

廿八日

寶臺院御愁以　叡慮御宥免の趣御達　本日昨年來謹慎の向悉く被免（以下本ノマヽ）候木以下同斷ト云

九月廿八日彈正大巡察古賀十郎隨員と共に熊本に來たる

〔大巡察一卷〕（熊本縣廳所藏）

大巡察以下熊本入込可申哉之儀ニ付而申達置候通候處今日山鹿出立植木休ニ而新貳町目澤屋泊之筈候間道案内足輕出

方之儀可有御達候且又明朝出立之節道筋澤屋に承合出方有之候樣御達候以上

九月廿八日　　御客屋方

惣代小頭衆中　　御物書中

（右一通）

九月廿八日御客屋支配役ヨリ御客屋方根取へ通達ノ一切

一大巡察（右一通）已下熊本着之上小橋恒藏に應接被仰付候處大巡察之不快ニ而逢無之小巡察に應接有之候事

大巡察已下今晩熊本泊ニ候處大巡察之病氣ニ付鹿兒島に罷越候儀之延引ニ相成快復次第長崎之樣ニ罷越候との事ニ候依而小巡察巡察屬上下五人鹿兒島に罷越候由ニ付左樣御心得可有其御達候以上

少參事

九月廿八日

本文之趣川尻町にも御達候事

飽田郡　入江次郎太郎殿
宇土　原田十次郎殿
八代　志方軸人殿
芦北　熊谷忠右衛門殿

九月廿八日本藩小倉戰役の功勞者に行賞す

（十月九日大參事等より在京中山源次右衛門等に通報の内）

〔御國東京往來狀拓〕

渡邊平左衛門

右者父渡邊平左衛門儀小倉戰爭之節於赤坂鳥越及炮發相働且其方儀右戰爭之節一番手に爲應援罷越相働候段被遊御滿足旨

一白銀三枚充

内藤宗賢
宮前宗碩

白石玄齡
内藤宗晋

右者小倉出張中大勢之病中療治方格別致出精候付被下置旨

村山傳左衛門

右者小倉戰爭之節於大谷間道相働滯陣中物見且玉藥仕込等骨を折去年關東出張中申談筋行屆所々警衛等辛勞いたし候段被遊御滿足旨

中路內藏之助
能勢市之進
栗屋平右衛門
木庄源八
橋木武雄
杉慎十郎
丹羽九一郎
橋本正馬
橋本源十郎
能勢秋之助
中路安之助

右同斷之節於大谷間道相働候段右同斷

門池三七郎
白石安兵衛

右同斷之節役筒之者共引廻赤坂往還筋取切大谷間道方に繰込相働前後格別骨折候段右同斷

今井勘兵衛

右者小倉出張中敵地之模樣探索等心配いたし戰爭之節と鳥越筋を固骨折候段右同斷

大里角次

右者小倉戰爭之節父に附添赤坂に出張一同骨折候段右同斷

白石忠右衛門
白石道之進

右同斷之節赤坂往還筋取切大谷間道方に出張炮發ニも および相働候段右同斷

荒木善右衛門
本庄藤次郎

右同斷之節大谷間道に出張一同骨を折候段右同斷

石田藤左衛門

右同斷之節大谷間道赤坂鳥越に出張一同骨を折候段右同斷

續　庄兵衛
入江駿四郎
續　直彦

右同斷之節赤坂鳥越に爲應援罷越一同骨を折陣拂之節茂諸事行屆候段右同斷

大塚孫兵衛
野村源之允
金守彦之允
遠山謙藏
匂坂平一郎

右同斷之節之御言賞
一御紋附御上下一具充

井上傳記
片山小源次

右同斷之節之拜領

九月廿九日棚倉藩使者を東京の我藩邸に遣はして隱居阿部正靜の謹慎を免せられし旨を報し昨年以來の厚情を謝す

庄野新兵衛
三池鐵太
安野左衛門
安野九左衛門
安野彦五郎
安野七郎
金守豐熊
加賀山權次
吉住督太郎
雨森悌二

右同斷之節之御言賞
右之通被仰付旨先月廿八日御書付相渡候
小倉戰爭之節之御言賞
一御紋附上下一具

富岡貞一郎
梅田文之允

右同斷之節ニ付拜領
右之通同廿八日奉書を以申渡候事

〔東京ゟ之御用狀抬〕

右者別紙御口上手扣之通被仰遣候段公用方に罷出申述候
九月廿九日

參政　衆中

熊本藩知事様

今般隱居正靜儀深き以叡慮謹慎御免被仰出難有奉存候昨年以來段々厚預御世話候故全前文之次第ニ至り候儀ゝ厚忝存候右者是迄之御挨拶御吹聽旁以使者申述候

阿部基之助様御使者
足立倡之丞

公用人中

九月晦日本藩小倉戰役の功勞者に行賞す

〔御國東京往來狀扣〕

（十月九日大參事等より在京中山源次右衛門等へ通報の由）

古賀作十郎
田添猪津太

右者小倉戰爭之節一番手に應援として罷越相働候段被遊御滿足旨
一御紋附御上下一具
一白銀二枚

宮部玖右衛門

右者小倉戰爭之節於延命寺格別相働候付被下置旨

岡崎直之允
宇田喜兵衛
益田文藏
加賀山權之助
宮原平右衛門
八木太門

明治二年

井上平馬

右同斷之節一番手に應援として罷越相働候段被遊御滿足旨

一御紋附御上下一具、

一宮九郎次

右者去年八月原窪戰爭之節相進及炮發相働其後兩度之戰爭共格別相働且滯陳中番兵等茂致精勤候付被下置旨

一御紋附御上下一具

一白銀二枚

水野治兵衛

右者小倉戰爭之節於延命寺格別相働候付被下置旨

一御紋附御上下一具

一白銀一枚

中山閏五郎

國友儀兵衛

右同斷

一御紋附御上下一具

一白銀二枚

寺本愼兵衛

右同斷之節於延命寺格別相働候付被下置旨

小島富之助

篠原新助

下林勵太

曾我時雄

山本閏助

古賀秀之助

加賀山泉藏

武藤貞之允

右同斷之節一番手に應援として罷越相働候段被遊御滿足旨

井上嘉十郎

小森田新七郎

右同斷之節於赤坂鳥越相働候段被遊御滿足旨

一御紋附御上下一具

一白銀二枚

成田大記

右者小倉戰爭之節本陣爲警衛罷越於大谷間道格別相働候付被下置旨

仲光長助

猿渡健之助

右同斷之節於赤坂鳥越相働候段被遊御滿足旨

仲光半右衛門

村松龍彦

右同斷一番手に應援として罷越相働候段被遊御滿足旨

一御紋附御上下一具

一白銀二枚

（氏名脫落）

右同斷之節本陣爲警衛罷越於大谷間道格別相働候付被下置旨

杉浦甚之助

右同斷之節於赤坂鳥越相働候段被遊御滿足旨

武藤八郎助

右同斷之節一番手に爲應援罷越相働候段被遊御滿足旨

一御紋附御上下一具

一白銀二枚

（氏名脫落）

右同斷之節於延命寺格別相働候付被下置旨

島居十兵衛

矢島岩熊

右同斷之節一番手に爲應援罷越相成候段被遊御滿足旨

片岡熊雄

右同斷之節於赤坂鳥越相働候段被遊御滿足旨

右之通被仰付旨九月晦日御書付相渡候

九月某日皇后宮行啓につき供奉の輩沿道下民の窮苦を慮り休泊人夫遣方等に注意すへく其他供奉者の心得方につき諭達せらる

（明治二年王政日新錄）（熊本縣廳所藏）

今般　皇后宮行啓被　仰出候ニ付而ハ第一民之疾苦ヲ被爲厭御輕辨ヲ專ニ被遊候　御趣意ニ候殊ニ近來海道筋非常之往來打續キ下々之難儀其上今歲雨天相續キ農民作ヲ失ヒ窮苦不成一方折柄先般厚被　仰出候　御趣意モ有之旁以供奉之面々下々至迄殊更深ク御綏撫之御趣意ヲ奉戴シ沿道休泊人夫遣方等厚ク心ヲ用下方之難澁相救ヒ候樣右取扱舊弊ニ

習ヒ權威ヶ間敷振舞決而有之間敷事

一御當日御休泊多人數ニ付供奉之面々於驛々ニ諸賄等不行屆之儀モ可有之候條兼而相心得居其場ニ至彼是申立候儀決而致間敷事

一御定御休泊之外ニ於テ自分勝手ニ支度等決而致間敷事

一御道中供奉下々ニ至迄男女之制法堅ク可相守事

一供奉之面々下々ニ至迄旅宿ニ於テ娼婦等呼寄セ酒宴ヶ間敷儀決而不相成候事

一供奉下々並又供之向下宿ニ於テ博奕諸勝負決而致間敷事

一供奉之面々支度料大札小札割合ヲ以被渡下候間道中筋ニ而小買物トイヘ共其割合ヲ以テ正路ニ仕拂可致事

一御道中筋監察トシテ彈正臺供奉之面々旅宿ヘ臨時ニ巡察可致之間此段兼而相心得居可申事

一宿驛ニ於テ不都合之次第有之候ハヽ其趣供奉彈正臺巡察ヘ可訴出事

一御道中筋惣而御列奉行之指揮相請違背有之間敷事

一御輿脇猥リニ小者等徘徊停止タルヘク前駈之者萬一用向有之節ハ帶刀之者無禮無之樣ニ通行可致事

一供奉之面々所勞足痛之節御憐愍ヲ以宿駕被下候間精々勘辨ヲ致シ無餘義分ハ其主人方印形ヲ以御泊彈正巡察ヘ可願出事

但重病ハ其驛ニ可差留事

右之通被　仰出候間家來末々ニ至迄不洩樣可相達事

九月

右壹通

御當日　皇宮ヘ參上之節御門內帶刀二人小者二人限リ隨從タルヘキ事

辨官

一前駈供方之者一條家四脚門前ニ屯可爲致事

一後駈供奉方之者近衛家四脚門前ニ屯可爲致事

一太鼓一音ニ而御催之事

一同二音ニ而御供廻之事

一同三音ニ而　御出輿之事

一御豊御泊太鼓之令同斷之事

一御途中ニ而一音御止リ二音御進之事

一御小休二音御供廻リ三音　御出輿之事

但御催之一音太鼓無之御列共儘ニ而休足堅散亂致間敷事

一五日青蓮院宮御書供奉之面々並家來末々ニ至迄辨當用意可有之事

右之通被　仰出候間家來末々迄不洩樣可相達候事

九月

右壹通

御當日供奉之輩荷物雜具之向總而堺町御門外丸太町東西之內ヘ繰出シ置後衛兵隊之跡方混雜無之樣隨從可有之事

一過日御布令有之候家來所勞足痛之節宿駕被下候ニ付其主人印形ヲ以供奉彈正巡察ヘ可申出樣達置候處全ク人足賃ハ其主人方可差出候此節ニ至リ道中宿驛人馬遣方之儀ニ付段々御取調之次第茂有之更ニ御當日人馬共定員被相立候ニ付而ハ宿駕人足迄茂右定員之內方繰替御廻ニ相成候事ニ付賃錢等モ御定ヲ以無滯仕拂勿論ニ候自分ニ而問屋役人エ相對一切致間敷既ニ今度ハ日當之被下方モ有之次第旁以心得違無之樣可被致候事

九月

追而賃錢之儀ハ泊驛ニ於テ傳馬所出役之驛逓司ニ可相渡事

右壹通

行啓御道筋

辨官

皇宮御門前南へ南門前東へ後院前南へ堺町南へ三條通東へ蹴揚夫ヨリ東海道御順路
右壹通
行啓御道中御休泊割

御畫	青蓮院宮	御泊	四日市
御小休	山科奴茶屋	御小休	富田
御泊	大津	同	小向村
御小休	鳥井川	御畫	（地名ナシ）
御畫	草津	御泊	桑名
御小休	梅ノ木	御渡舟	
同	石部	御畫	佐屋
同	三雲村	御小休	神守
御泊	水口	同	萬端
御小休	大野村	御泊	宮
同	土山	御小休	鳴海
同	鈴鹿峠	同	東阿野村
御畫	坂ノ下	御畫	池鯉鮒
御泊	關	御小休	大濱茶屋
御小休	亀山	御泊	岡崎
同	庄の	御小休	藤川
御畫	石藥師	御畫	赤坂
御小休	日永村	御小休	伊奈村
御泊	豐橋	御小休	二タ川
御畫	白須賀	御泊	荒井
御小休	舞坂	同	篠原村
御畫	（地名ナシ）	御泊	濱松
天龍川御渡舟		御小休	池田村
同	見付	御畫	袋井
御小休	原町	御泊	掛川
同	日坂	御小休	小夜中山
同	金谷	御畫	島田
御泊	藤枝	御小休	岡部
同	宇都ノ谷峠	御畫	鞠子
御畫	靜岡	御小休	小吉田村
御泊	江尻	御小休	奥津
同	倉澤村	御畫	蒲原
御小休	岩淵	富士川御舟	
御泊	吉原	御小休	柏原
御畫	沼津	御小休	三島
御泊	三ッ谷新田	同	山中新田
同	石荒坂	御畫	箱根
御小休	御野廷畑	同	湯本
御泊	小田原	御畫	大磯
御小休	茅ヶ崎村	御泊	藤澤山
御小休	戸塚	御畫	程ヶ谷
御泊	神奈川	御畫	川崎
御小休	梅屋敷	御泊	品川
東京入			

九月某日在東京我藩吏員薩土二藩の貨幣贋造自訴書を得て在藩同僚に通報す

〔一　新錄探索報告〕（明治元年辰正月より十二月迄）

薩土贋金自訴之書付左之通

頃日傳承仕候處贋金天下ニ布滿万民是ヵ爲ニ不一方困苦ヲ蒙リ剩外國より種々御難題申立（以下略）

鹿兒島　公用人

八月廿四日

（右全文は既に八月廿四日の條に登載せり參看すへし）

頃日贋金流布之儀付而於　廟堂御憂慮有之哉ニ承知仕候高知藩ニ於テ茂先年來　王命ニ奔走國力分外之費用有之不堪止之情實を以鑄金仕候儀ニ御座候ヘ共勿論　國家之爲注意仕一時燒眉之急ヲ救候爲而已ニ而速ニ差止メ御座候然共一度冒大禁候儀ニ付此上如何樣共　御沙汰可被　仰付候以上

己九月　　高知藩

公用人

右ハ太政官ニ出仕いたし候史生之内より潛ニ借り受寫取差出申候

（右ハ東京明石鍾太郎下廻し之内拔萃）

九月某日本藩議員代井上治部丞贋金處分に關する下問に答申す

〔尊攘錄諸家建白並屑書等（文久元ヨリ慶應三マテ）〕

御下問

贋金天下ニ蔓延ス屢嚴禁有レ共未タ之ニ處ル方ヲ得ス官或ハ眞貨ヲ以テ引替ンカ是姦ヲ啓キ惡ヲ誨ル也或ハ悉ク之ヲ廢センカ其種甚多シ美惡幷廢ス理ニ於テ行レシ或ハ其質ヲ折シテ元估ヲ以テ之ヲ買ンカ是稍人情ニ近キモ能其方ヲ得スンハ反テ怨謗ヲ速カン夫貨幣流通ハ國家ノ由テ寧スル處ナリ然ルニ上下因弊如此加之互市ノ際紛紜ナキコト能ハス其皇威ヲ損スル亦少ナカラス方今何ノ策カ克ク之ヲ濟ヒ公私兩便ヲ得ン宜シク商議シテ以テ上聞セヨ

九月

御答

贋金ハ何方ニテ僞造セルト云フ其金ニ就テ曖然タリ去レハ其本ヲ罪センヿ至當ナレ共因循此ニ至リ今更之ヲ罪スルモ如何ナリ僞造セシ國々ニ說ヒテ其僞造ノ高ヲ自首セシメ其估ヲ償ハシムヘシ若シ此事モ行ハレスハ一旦楮幣ヲ以テ盡ク贋金ヲ收買シ追テ其金ヲ鑄直シテ又楮幣ヲ易フヘシ是レ朝廷ニハ大ニ御損失ニモ成ルヘケレ共已ニ夷人ニモ正金ヲ以テ引替タマヘハ民ニモ其筋ヲ以テ處セスンハ理ニ叶ハス故ニ御損失ヲ顧ミス前文之通ナルヘシ

熊本藩議員代　井上治部丞

九月某日兩替商等私に金錢相場を定め賣買貯錢等をなし融通に支障を生せしむることなき樣との旨を諭達せらる

〔太政官一卷、復古帳、王政日新錄〕

十月十二日非藏人口に金澤藩御呼出加納少史を以御渡之御書付寫

錢相場之儀金壹兩ニ付拾貫文通用可致旨先般御布令相成候就而者兩替屋共ニ於テ心得違有之間敷筈之處當節ニ至リ相場幷諸錢之定位等區々ニ相成融通甚差支殊ニ眞鍮錢ハ直增可相成抔跡形モナキ虛說申觸シ私之相場相立密ニ賣買又ハ貯錢等致候者有之由以ノ外不埒之事ニ付既ニ此度右躰之輩召捕吟味之上御所置之品モ有之候條向後錢通用方之儀兩替共ハ不及謂譯商人共一同御布令之旨相守リ銘々心得違無之樣可致事

但地方官之見計ヲ以テ一躰融通之タメ兩替渡世之者ニ無之共當分之内勝手ニ錢引替差許候儀ハ不苦候事

九月

右之通於東京被　仰出候間此段相達候事

十月　　太政官

留守官

十月二日本藩林九八郎謹慎を免除せらる

〔東京より之御用狀扣〕

明治二年　　林九八郎

謹慎差免候事

十月二日　刑部省

十月三日細川行眞皇后宮東京行啓につき大津驛より土山驛まで護衛を命せらる

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

十月四日　細川從五位

一宇土に左之通被　仰付候由ニ而昨夕公用方より被差出

后宮行啓ニ付其方兵隊一小隊大津驛御道筋御警固申付候進退之義者彼縣に打合可申候事

但郡山藩にも同樣申付候間可申合候事

（明治二年）十月　京都兵部省

（頭書）本文相勤候上猶土山驛御警固被仰付候由

十月三日本藩改めて皇后宮東京行啓警衛供奉の兵員數を申告す

〔返達御用狀控〕

今般　皇后宮行啓ニ付隊長以下八人兵隊百拾壹人と申上置候處根方調違有之猶取調候處左之通御座候

一隊長以下八人

一百八人（兵隊壹人　神官太鼓手共）

右兵隊前後御警衛供奉被　仰付候付道中下宿賦等之たゑ差出申候

右之段御屆申上候以上

中尾万助

小者一人

熊本藩　宗村加兵衛　兵部省　御役所

十月三日

十月三日本藩御留守警衛として上京せし兵隊の着京期日を申告す

〔御在京御在府御在國共御記錄、（明治二年）王政日新錄（熊本藩廳所藏）〕

申述之振

當春兵隊着京日限御屆可仕旨奉畏當時御留守御警衛として差出置候兵隊着京迄取調候右御警衛被仰付候後ハ追々人員差繰有之最前差出候兵隊ハ歸藩仕居候付取調不申候此外　桂御所御警衛被　仰付候付而も三小隊餘差出置候との趣

御留守御警衛として差出置候四百人之兵隊七小隊着京日限左之通御座候

四月三日着京　隊長　仁田市之助列　兵隊共

三月廿九日着京　上野多源太列　兵隊共

五月十四日着京　横田太十郎列　兵隊共

九月廿四日着京　庄野彦左衛門列　兵隊共

三月晦日着京　大塚貞之允列　兵隊共

四月朔日着京　山田三郎八列　兵隊共

九月廿四日着京　都築三右衛門列　兵隊共

右之内大塚貞之允隊山田三郎八隊之今般皇后宮東京　行啓ニ付御警衛供奉相勤候管之二小隊ニ而御座候此段申上候以上

熊本藩　宗村加兵衛

十月三日

兵部省

御役所

（錦在京御在府御在國共御記錄に左の通書込あり）

本文申達之趣を以屆上候處右八月給御渡ニ付而御達之事ニ付現實軍務官ニ罷出候日限且引替等之儀共百細取調達候樣との旨ニて御屆書被差返候

十月三日前小田原藩主大久保忠禮永蟄居を免せらる

〔明治元年正月ヨリ十二月迄〕新錄探索報告〕

十月三日御達

小田原藩知事

大久保忠良

大久保忠禮に別紙之通被　仰付候條此旨可相達事

十月　太政官

別紙

大久保忠禮

先般永蟄居被　仰付置候處深キ　叡慮ヲ以被免候事

〃　太政官

十月某日重ねて府藩縣に令し士民の外國人に横逆を加ふることを戒飭せしめらる

〔明治三年〕觸帖扣〕

昨辰年以來兵庫港ヲ初トシ京都並堺長崎横濱等ニ而外國人に對し亂妨いたし猶又今般於東京ニ熊本藩之ものとも英國公使に對シ抜刀ニおよひ候始末何も茂不容易大事ヲ引出候條昨春三月以來屢御布令之趣茂有之候付而ハ諸藩を始夫々其主宰之者より屹度取締方可致之處右樣數度法憲ヲ犯候もの有之ハ全御政令之不行屆ニ相當り皇威ニ關係致候次第ニ付向後取締筋一層嚴格之御所置無之候而ハ　叡慮不被爲安御儀ニ候尤外國御交際以來深く時勢も辨ヘサルヨリ只管非常ニ驚愕シ猥ニ掃攘之論を唱へ徒ニ血氣之小勇ヲ侍ミ眼前御國ニ渡來之者ヲ無故亂妨ニおよひ吾ニ曲之實ヲ爲シ彼へ直之名を與へ加之其場ヲ逃去候ハ卑怯之振舞ハ無し君父ニ迷惑ヲ掛候而已ならず第一　皇威ヲ汚シ候次第實以不屆至極之事ニ候萬一右樣之もの於有之ハ本人ハ勿論其主宰之ものとも嚴重之御沙汰ニ可被及候就而ハ府藩縣ニ於テ示方之儀嚴密行屆向後右樣之儀無之樣厚可相心得事

但東京諸藩邸詰合之人數並邸外住居之もの等屹度取締相立可申出向後御紀等有之節胡亂ケ間敷儀無之樣可致候事

十月　太政官

（近世史料編纂綱例には九月廿八日に此の發令ありし如く見ゆれとも本文に「十月」と明記あるを以て仮に此に掲記す）

十月四日皇后宮行啓供奉を命せられたる我藩隊長以下兵隊に手當金を給與せらる

〔明治二年〕王政日新錄〕（熊本藩一　肥所藏）

今般　皇后宮行啓ニ付供奉被　仰付置候隊長以下兵隊に被渡下候御手當金八百貳拾六兩貳歩兒玉三郎を以御渡ニ相成申候間則別紙手形壹枚相達申候以上

十月四日　宗村加兵衛

（付札）中山源次右衛門殿

本文御渡方隊長兵隊之差別可有之哉相伺候處取分無之壹人前一兩壹歩貳朱宛〆十九泊分之事

十月四日三條西公允越後水原縣知事に任せらる

〔京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

左之御方様今般水原縣知事被蒙　仰候御吹聽別紙之通御使者被仰進候

三條西侍從様

宗村嘉兵衛

以上

十月廿七日

横田治部右衛門殿

新侍從儀當月四日依　御召參　朝被致候處任越後水原縣知事被蒙宣下候右ニ付去ル八日東京表より彼地に被致發途候依此段御吹聽被申入度旨被申付越候付爲其使を以被申進候事

三條西新侍從使

近藤錄郎

十月

十月四日小橋恒藏大巡察古賀十郎の宿處に抵りて面會す古賀横井平四郎の著といふ天道覺明論の眞僞を質し其の探索に助力を求む

〔小橋私記〕

十月四日小橋恒藏古賀大巡察の宿處(澤屋)に抵り面會を求む古賀直に出て之に面して曰く余の西國巡視は藩縣各地諸般の狀況を視察するに過きす而して公務上の內容は茲に明言する能はす特に熊本に於ては重要の關係ありて愼重周密の觀察を要するを以て其意を通じて應接の役員を求めたり能く之を諒せられよと語を續て曰く横井平四郎を殺せし者は國法を以て嚴刑に處せらるへきは言を俟さる所なりと雖も亦深く其情狀も酌量せさるへからざるものあり世に傳る所の天道覺明論なる者は横井の著述なりと聞く其實果して如何其眞僞を明にせむと欲す願くは其幇助を與へられむ事を望むと恒藏曰く本藩有志の者は固より其眞僞を知らむと欲して百方心力を竭したりと雖も未た何等の證左を發見する所なし唯阿蘇大宮司か覺明論同一の意味に基き議論合せすして終に絶交に及ひたりと聞くのみなりと答へたり

〔編者曰、古賀大巡察來館の事情は此の奥十一月十七日の條に木藩松本彥作が京都にて藤村兵部權少丞と對談せし筆記を掲けたるを參照すへし茲に掲くる小橋私記は蓋し當時の記錄に非すして後年の記述なるへし文中謂ふ所の天道覺明論は十月六日夜阿蘇宮拜殿に投書したる者なれは其前古賀の知るへき理由なし然し此時古賀が問の中に横井が嘗て廢帝論の如きものを唱へ居たるかなとの言はありしならむ次に掲くる久留米藩雜記も亦後年著者が記憶を辿りて記述せしものなれは天道革命論云々とあるも誤なるへし詳悉は奥の十一月十七日の條を參看せは思半に過くるものあらむ)

〔明治四年久留米藩雜記〕

古賀十郎と云ふ人は御一新に成ると直に彈正臺に奉職して少巡察使とか云ふ役を勤め大に幅を利かせたとの事で彈正臺では當時立役で有つたと云ふ事で有る然るに共同志者中の者が熊本藩の横井平四郎當時參與職と云ふ役を勤めた人で在つたのを斬殺したから其の人々は死刑に處せらるゝ事と成り既に斷頭場裏に引き出され今しも首を刎ねられやうとする間際に成り彈正臺の命と云ふ事で其死刑の執行を差留めたと云ふ事で有りしが其議の主張者は乃ち此の古賀と云ふ事で有つた其名義とする處の者は死刑に處する前には必す彈正臺の議を聞いて後之を行はねばならぬのに一應の打合せもせす恣に刑に處すると云ふのは違法であるから行ふ事はならぬと云ふので之を差留めたのであつたが其實を言へば横井が天道革命論と云ふ書物を著はし革命を唱へたと云ふ事で有つたからして其罪は天地間に容れられぬ大罪人で有るから之を殺してもよいと主張して其人々の命を助くる手段で有つたと言ふ事で其の著書を證據に持出し甘くやり遂げやうと巧み百方其著書を搜索したけれども皆目見當ら無かつたと云ふ事で其翌日は皆々斬罪に處せられたと云ふ(編者曰、此に刺客の斬罪に處せられたりといふは著者河村淳の誤聞にて刺客の處刑は明治三年十月に施行せられたるなり)

然るに彈正臺に於ては横井が革命論を著はしたと云ふ事は事實相違なき話で現に其著書を見たと言ふ者も有りしかば何れにか隱して居るに違ひは無いと云ふ事となり此古賀は其著書搜索の衝に當り九州に出張を命せられたのであるが表面上に於て名とする處の者は九州の形勢視察と云ふ事で朝命を帶び九州に下向し各藩の狀況を視察した其傍ら專ら彼の著書を見付け出さうと努めたと云ふ事でありしかども矢張り見當ら無かつたと云ふ事であつた(編者曰、著書見當らさる由いふもまた誤聞なり其の著書果して横井の手になりしか否を探求し得さりしなり)

十月五日皇后宮東京へ行啓御出輿あらせらる

〔京都并東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

（十月六日井上牛兵衛早瀬岩彦よりの狀中）

皇后宮東京　行啓御日限通昨五日五時之　御出輿ニ而無御滯　行啓被爲濟奉恐悦候云々

〔仝　書〕

御行列附如左

京都府參事　同心　同心　同心　同心　前衛熊本藩兵隊一小隊　兵隊一小隊　口付酒井一門代重臣　騎馬　帶刀　六門　六門　同

口付　彈正大巡察　騎馬　帶刀　帶刀　小者　口付　粟田迄　口付　三宅戸從四位　騎馬　帶刀　帶刀　同　同　小者　小者　口付　千種正四位　騎馬　帶刀　帶刀　同

同　同　小者　同　同　小者　小者　口付　清岡正三位　騎馬　帶刀　帶刀　同　同　小者　同　同　小者　小者　口付　大原正四位　騎馬　帶刀　帶刀　同　同　小者　小者

口付　野宮皇后宮大夫　騎馬　帶刀　帶刀　同　同　小者　小者　御歌書櫃　守護使番　宰領山科郷士一人　御守櫃　同上　同上　大清　御辛櫃

同上　使番　使番　同　同　高田新正六位　阿野正六位　淺井新正六位　藤林正六位　青山新正六位　調子從六位　同上　簀鳥二人　使番　使番　同　同　官人　同　同　同　同

中上正六位　調子從六位　同　御板輿　同　上田藤盛　執次　長仕丁　御醫　兩皮　吳床一人　簀鳥一人　御裝束櫃　宰領山科郷士二人　御膳辛櫃　御膳掛小者　同上一人　御膳掛小者

書田從六位　同上從六位　同　香山德盛　輿丁　三十人　執次　四人　御醫　吳床一人

御藥櫃　宰領山科郷士一人　御醫　帶刀　小者　御醫　帶刀　小者　簀鳥三人　御茶辨當　宰領仕丁貳人　非藏人　帶刀　小者　非藏人　帶刀　小者　御水桶　御替輿　宰領預リ

貳人　八瀬　吳床　簀鳥一人　竹馬　打物　山科郷士　上藤　油小路　使番　小者　打物　山科郷士　宣旨　使番　袴簞笥　小者

十六人　竹馬　打物　山科郷士

中藤　右兵衛佐　使番　使番　小者　打物　山科郷士　下藤　越前　使番　小者　打物　山科郷士　同　美作　使番　小者　打物　山科郷士　同　御生所

打物　山科郷士　上藤　植松　使番　小者　打物　山科郷士　小上藤　千種　使番　小者　打物　山科郷士　同相羅　千枝　使番　小者　打物　山科郷士

使番　小者　打物　山科郷士　年寄　藤坂　輿脇　小者　打物　山科郷士　同　藤川　輿脇　小者　三仲間　主水　輿脇　下部　同　千壽　同上　供連　同　阿ゝ

供連　表使　津山　同上　供連　三仲間　屋戸　同上　供連　同　美登　同上　供連　同　濱江　同上　供連　同　花垣　同上　供連　同　糸崎　同上　供連　口付　五辻少辨　騎馬　帶刀　同　同　小者　小者

市川富大錄　帶刀　小者　小西史生　帶刀　小者　口付　堀川皇后宮亮　騎馬　帶刀　同　同　同　小者　小者　口付　粟田迄　口付　石野正四位　騎馬　帶刀　同　同

小者　小者　後衛　口付　口付　稲葉篤實　騎馬　帶刀　同　同　小者　小者　兵隊一小隊　熊本藩兵隊一小隊　雜具　群行

行啓御道筋

皇宮御門前南へ南門前東へ後院前南へ堺町南へ三條通東へ蹴揚夫ヨリ東海道御順路

十月五日本藩後藤惣左衛門謹慎を免除せらる

〔復古帳〕

謹慎差免候事

十月五日

熊本藩

後藤惣左衛門

刑部省

十月五日本藩小倉戰役の功勞者を賞す

〔御國東京往來狀扣〕

（十月九日大參事等より在京中山源次右衛門等へ通報の内）

八木田小右衛門　不破太直　小田原武兵衛　鈴木茂五左衛門
高見權右衛門　的場甚右衛門　青山庄右衛門　狩野源内
芦田七右衛門　嵯峨三郎右衛門　佐分利次郎兵衛　原權之助
森尾母太郎　松岡九兵衛　岩間清次　平野新右衛門
井田惣右衛門　松村新三郎　長谷川忠右衛門　大塚七右衛門
宮木角兵衛　兒玉太郎左衛門　兒玉豬左衛門　上田組之助
嘉悦市之進　大田黑淳助　吉永兵左衛門　岡助次
小野又左衛門　井上太郎左衛門　安井先之助　波々伯部政彦
石川末彦　廣吉健太郎　松岡常太　岩間官平
兒玉大作　兒玉直熊　青山哲太郎　中島小一郎
大塚彦助　白木五兵衛　林常之允　中島傳九郎
中津海平之進　杉山平四郎　岡十兵衛　宮木角之允
岩間金太郎　深野初市之助　魚返佐一郎　堀田惟之允　池部富次

右者小倉戰爭之節之御言賞

一御紋附御上下一具

右同斷之節之拜領

右之通被仰付旨十月五日御書付相渡候

右同斷之節之御言賞

右之通同日奉書を以申渡候

右之通候事

十月

十月六日大巡察古賀十郎阿蘇宮へ參向す是日天道覺明論を阿蘇宮拜殿に投書したる者あり

〔大巡察一卷〕（熊本縣藍所藏）

大巡察上下六人五半比阿蘇宮爲參詣出立ニ相成申候此段不取敢御達仕候以上

十月六日　長谷信義

〔宮村家舊記〕

上封

阿蘇大宮司殿　別紙入御直披

當神前に壹封之書翰奉供致置候間明拂曉正に御落掌可被成候也

十月　　長谷信義

大宮司殿

別紙壹冊今度大巡察司當地へ巡察に相成候に付吾黨十三人直に巡察司目逓に呈し度存候處多人數相憚り幸に貴殿勤王之有志なるを聞き依之巡察に御取次呈進被下度奉願入候也

集議局十三人之内　長谷信義（花押）

十月

吾師横井平四郎所著一昨夏吾師に隨ふこと二月一夕閑時模寫して以て平常暗誦して吾固陋を活達するの補けとし殊に秘藏せ「しめ」「られ」候處當正月横井於京都斬殺に遇ふ事を聞又甚疑ふ吾師の如き大德發明の人匹夫匹婦の爲に害に遇ふ理なしと研窮日久しく一朝漸く横井の所見大に違ふことを悟り後悔又久し豈に圖むや今般大巡察司來るか聞き昔日の過を改め横井の識見實に世に大害を爲す大に可禁事を示し給はむ事を所希也大宮司に依りて以て一冊を奉呈候恐々敬白

東皐野人

天道覺明論

夫宇宙の間山川草木人類鳥獸の屬ある猶人身體の四支百骸あるか如し故に宇宙の理を不知者は身に首足の具あるを不知に異なることなし然れは宇宙ある所の諸萬國皆是一身體而無人我無親疎の理を明にし内外同一なることを審にすへし古より英明の主威德宇宙に博く萬國歸嚮するに至るものは其胸襟濶達物として容れさるはなく其慈仁化育心ロ天と異なることなき也如此にして世界の主蒼生の君と可云也其見小にして一體一物の理を知らさるは猶全身痿れて疾痛痾痒を覺らさると同し百世の身を終るまて解悟なすこと能はす亦可憐乎抑我日本之如き頑頓固陋世々　帝王血脈相傳へ賢愚の差別なく其位を犯し其國を私して如無忌憚嗚呼是私心淺見の甚しき可勝慨嘆乎然るに或云堂々神州參千年皇統一系萬國に卓絶する國也と其心實に愚昧猥りに億兆蒼生の上に居る而已ならす僅に三千年なるものを以て無窮とし後世又如此と思ふ夫人世三千年の如きは天道一瞬目の如し焉そ三千年を以て大數とし又後世無窮と云ふことを得んや其興廢存亡人意を以て可計知乎今日の如きは實に天地開闢以來興張の氣運なるか故海外の諸國に於て天理の自然に本つき解悟發明文化の域に至らむとする國不少唯日本一國孤陋たる孤島に據りて　帝王不代汚隆なきの國と思ひ暴惡愚昧の君と雖とも堯舜湯武の禪讓放伐を行ふ能はされは其亡滅を取る必せり速に固陋積弊の大害を摟除して天道無窮の大意に本つき孤見を看破し宇宙第一の國とならむことを欲せすむはあるへからす如此理を推究して遂に大活眼の域に至らしむへし

丁卯三月南窓下偶著　　小楠

右書類は十月七日阿蘇宮神前ゑ差置有之候間同夕社家より差出候に付前夜差置候儀と相見候事

明治二年

十月六日延岡藩領高千穗村民黨を結ひ暴動せしを聞き我藩兵一小隊を派遣して藩境を守らしむ

〔東京より之御用狀扣〕

當月六日延岡藩支配地高千穗邊村民共徒黨亂妨ニおよひ候旨相聞候付隣境迄最寄之兵隊一小隊繰出警備致せ候處一時之動搖ニ而被藩より說諭ニよつて鎮靜ニ赴候段申越候此段御屆申上候以上

熊本藩　井上治部丞

十月十四日

辨官　御役所

明治二年

十月六日我藩數寄屋橋御門警衛兵を交代せしむ

〔御國東京往來狀扣〕

（十月十三日飯田館之助より西京中山源次右衛門並に藩政府宛通報の内）

覺

（前略）

後藤惣左衛門
金子熊太
准次郎弟
北垣橘之助
安兵衛養方之叔父
飯田安之允
叛平二男
賀來權九郎
右炮隊共
水上素兵衛
休之允嫡子
井上平太
金右衛門二男
和田爲之允
彌左衛門養子
東彈藏
右炮隊共

右者數寄屋橋御門警衛被仰付置候處被遊御免用意濟次第御國許に被差下旨去ル六日及達候

魚住源次兵衛
隊共
寺本八左衛門

右者數寄屋橋御門警衛被仰付旨同日及達候

源次兵衛弟
魚住彦三郎

右者詰中魚住源次兵衛隊副士之場被仰付旨同七日及達候

（中略）

安兵衛養方之叔父
飯田安之允

右者滯府被仰付魚住源兵衛隊副士之場被仰付旨同九日及達候

十月七日本藩桂宮警衛兵員調書を進達す

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

十月七日

一兵部省より御剪紙を以左京亮樣京都詰當時之兵員取調只今差出候樣申來申候間直樣取調公用方に差遣長岡從四位當時在京之兵員取調御達可仕旨奉畏候　桂御所御警衛として差出置候兵員左之通御廉候

隊長
金津次郎右衛門
古原信次郎
水足勘助

副隊長
塩山騏三郎
上月半下
大木七右衛門

司令士
吉田次郎左衛門
志水權左衛門

杉浦清右衛門
高橋九左衛門
香山俊助
上妻三左衛門

一百七拾五人　兵隊爾導神官太鼓手共

侍
成瀨小右衛門
手島忠之允
湯地丈之進
荻忠右衛門
長沼英之助

一宮彦九郎
本庄角之允
渡邊理左衛門
萱野九郎助
内藤勘左衛門
吉田先二郎
築山與十郎
湯淺五郎兵衛

隊長以下總員
合貳百人
以上

十月七日　熊本藩
兵部省　宗村加兵衛
御役所

十月八日亞米利加國公使參朝す

〔復古帳〕

十月廿日非藏人口に金澤藩御呼出青木史生を以御渡之御書付
來ル八日第八字亞米利加國公使參　朝候間此旨相達候事

十月　太政官

右之通於東京被　仰出候間此旨相達候事

十月　留守官

十月八日結城藩使者東京の我藩邸に來り隱居水野勝知謹慎を免せられし旨を報し昨年保管中の厚情を謝す

〔東京々之御用狀扣〕

右者別紙口上書之通被仰進候段公用方に罷出申述候以上

十月八日　結城從五位樣御使者　平井庄左衛門

寒冷之節御座候處彌御勇健被成御座珍重之御儀奉存候將又今般隱居律堂儀深キ　叡慮ヲ以テ謹慎被免候段被　仰出難有仕合奉存候同人儀昨年其御藩に御預被　仰付候節者萬端厚御世話被成下辱仕合奉存候依之御挨拶以使者申上候此段藩地從五位申付越候

公用人中

結城從五位樣
結城從五位樣使者　平井庄左衛門

十月九日永田貞助平野武次郎古莊幾太郎の大學入寮の願書を提出す

〔東京々之御用狀扣〕

生國肥後　宿所大名小路邸内
熊本住居　永田貞助　己廿五歳
右同斷
右同　平野武次郎　己廿四歳
右同斷
右同國　古莊幾太郎　己廿二歳
玉名郡住居

右之者共當　御學校に入寮修業爲仕度候間此段奉願候
以上

明治二年　己十月九日　熊本藩　井上治部丞
大學校
御役所

十月九日鹿兒島藩知事召命により兵を率ゐて上京せし旨を申告す

〔一　新錄探索報告〕

明治元年辰正月ヨリ十二月迄

長谷川六右衛門ヶ差出候書付寫

十月

鹿島藩出府候付御屆書

一銃兵一大隊

一炮隊一座

但人數七百四拾九人

内

大隊長ヶ戰兵迄士分五百七拾五人

足輕　拾三人

夫卒　百六拾人

外ニ　軍馬七疋

大隊長

篠原冬一郎

教頭

中島健藏

池上四郎

教佐

坂本鄭介

小隊長

山口孝左衛門

町田武助

兒玉來太郎

堀　新次郎

益波宗之助

安田泰助

山野田彦助

伊東蒙吉

本ノマヽ、小家長

相良五左衛門

山口十藏

谷川治部左衛門

阿多壯五郎

松永清之丞

吉井叶助

知織源助

調役

有馬直之進

海老原量平

分隊長

大迫新九郎

伊地知カヽ、伊勢地庄右衛門

四木助十郎

村岡源助

廣瀨八郎

長崎尙五郎

炮隊教頭

村田三助

炮隊長

大河木武輔

半隊長

中江差之助

分隊長

西郷彦右衛門

稅所佐一郎

右者爲御警衛精兵可差出旨御達ニ付海路ヶ着仕候間兼而御手當被下置候屯集所ニ差置姓名等右之通り御座候

一銃兵一大隊

一炮隊一座

右者爲御警衛精兵可差出旨御達之趣承知仕鹿兒島表ニ申越置候處前文一大隊迄ニ而ハ非常之節迎茂十分之御警衛不相調候ニ付右之通豫備兵として知事召連海路ヶ到着藩邸ニ召置申候

右之通御座候間此段御屆申上候以上

鹿兒島藩公用人

十月九日　田中精之進

兵部省

御役所

一此度薩州之兵隊甚謹慎成事也市中一人ニ〆往來せす市店價ヒを苦切事ナシ婦人ニ不戲夜行せす邸ノ窓より買物をせす而シテ人毎ニ純粹之紙幣ニすへきと問ふ東京中之唐物店必薩州人ゟ買手ヲ案スルニ如此度大勢を召連而市中ニ大ニ金

を散らし潤色せしめ昔日之汚名を一洗する之策にや怪むへし

〔仝　書〕

明治二年十月大久保一藏ヶ聞取候趣高山秋藏書付

一薩公此度出東之儀ゝ去年來之軍功被賞御藏米等拜領被仰付候御禮且當春諸侯一同御召ニ相成候節奥方死去相成候砌ニ付被憚出方及延引候故右之譯を以出京ニ相成候事右ニ付而ゝ多人數引卒出京ニ不相成而ゝ何之支茂無之事ニ候得共當秋殊ニ薩長土肥四藩之兵隊　朝廷御守衛之爲御召ニ相成居候間隅然之事ニ而二大隊被引連之由尤内實ハ上之御腰くらつき候故外國御交際ニ茂兎角靄昧たる事而已多有之故御腰元ヶ嚴重ニ有之度との意味ニ有之候よし

一薩之情實ハ一國を拋チ　皇國之爲盡力ゝたし候存意ニ候處是迄兵卒等之暴行ヶして却而諸人ニ疑惑を受殊ニ（御諸を指候由）肥藩抔ニ而ハ情意隔絶ゝたし候處ヶ共楚之思をなし候條　皇國之一大惱ニ候間如何樣卒いたし情實相貫同心協力之場ニ至候樣致度有志之面々ハ憂念罷在候由

十月

十月十日本藩吏に御留守警衛として春來勤務せし兵員數を申告す

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

此御屆ハ月給渡之由ニ付如本文

御留守中御警衛として當春以來追々差出候兵員左之通

御座候

二月廿六日より三月十九日迄隊長以下兵隊　三百拾六人

三月廿日より四月十一日迄　三百貳拾六人

四月十二日より當時迄　四百人

右之内百拾六人ゝ此度　皇后宮行啓供奉之二小隊ニ而御座候此段御屆申上候以上

熊本藩　宗村加兵衛

十月十日

兵部省　御役所

十月十日宣教使を神祇官に附屬せしめらる

〔復古帳〕

十月十日月番ヶ差廻來候御書付寫

宣教使神祇官ゝ被接之事

十月　太政官

十月十日本藩長沼英之助が多年の精勤を賞せらるゝ旨を傳達す

〔江戸來狀扣〕（從慶應二丙寅年至明治三年）

（十月廿二日在京都横山治部右衛門より大參事等へ通報の内）

一金子八百疋

右者去ル亥年御親兵として京都ゝ被差登置候處同夏以來長々滯京御用相勤且八月十八日非常之節茂致出精候付從朝廷被下置候旨被　仰出候條可有頂戴旨

右之通同日（十月十日）及御達申候　長沼英之助

十月十日京都にて公用人の勤務を廢せられたるにより本藩公用人宗村加兵衛の職務を免し更に公務懸を命す

〔江戸來狀扣〕（從慶應二丙寅年至明治三年）

（十月廿二日在京都横田治部右衛門より大參事等へ通報の内）

宗村加兵衛

右者公用人詰方被差止候付當御役被遊御免座席御物頭列被仰付公務懸被仰付御足高之内百石直ニ被下置大參事支配ニ而被差置旨

右之通同十日御書付相渡申候右ニ付御請書一通進覽仕候

十月十一日大巡察古賀十郎阿蘇より熊本に返る

〔大巡察一卷〕（熊本縣廳所藏）

大巡察上下六人只今九時過澤屋に參着ニ相成申候間此段御達仕候以上

十月十一日　　御客屋支配役中

御客屋方

根取衆中

十月十二日兵部大輔大村益次郎の刺客探索方につき京都に於て更に嚴達せらる

〔復古帳〕

（十月十二日非藏人口に金澤藩御呼出加納少史を以御渡之御書付）

先般大村兵部大輔旅宿に及亂暴候賊黨追々御召捕ニ相成候得共別紙名前之者共逃去候ニ付嚴密遂探索候樣於東京被仰出候間猶又相達候事

十月　　留守官

山口藩　神代直人

信州伊奈郡ナムクマ村郷士關鳥金左衛門倅　關鳥金一郎

高知藩　岡崎強助

河野某

堀内誠之進

堀内了之輔

坂野次郎

十月十二日本藩後藤惣左衛門に箱館の降人十五名を警固して東京より歸國すへき旨を命す

〔御國東京往來狀扣〕

以別紙相達申候追々及達候趣別紙書付一冊進覽仕候以上

十月十三日　　飯田熊之助

中山源次右衛門殿

大參事衆中

權大參事衆中

（中略）

後藤惣左衛門

水上素兵衛

右者兵部省ゟ御預人之内今度別紙名付拾五人之者共一同御國許に被差下候付道中上見聞被仰付自然之節之臨時之見込を以指揮いたし候樣被仰付除中之者にも前後心を附宰領人申談致警備候樣惣左衛門素兵衛ゟ申聞候樣との儀も昨日（十月十二日）及達候

右之通候事

十月

兵部省ヵ御預人之内十五人之名附

森川善之助　中村兼太郎
杉浦多嘉吉　亀谷丑太郎
小坂三十郎　武川勇次郎
海老原健三郎　久保常吉
小田部共九次　伊久間市之助
開彌太郎　土屋文次兵衛
小竹銃之助（ヵ）　小澤敎次
大宮靜橋

以上

十月十二日我藩隊伍編制を改革し且つ小銃隊は英國式を採り大砲隊は佛國式を用ふ

〔御國東京往來狀扣、明治二年觸狀扣〕

覺

兵制之儀者昨年來追々御取調被仰付候得共未タ結局ニ至不申今般職制之儀付而之從　朝廷被　仰出候趣茂有之候付別紙之通御改革被仰付候尤隊列教練之儀之是迄之通銃隊者英式砲隊之佛式ニ因り候樣被　仰付候委細之儀者猶追々可被　仰出旨候條奉得其意觸支配方ニ茂可被達候以上

十月十二日

覺

奉行所

一士隊二大隊
　但隊士四十八員を一小隊とし六小隊を編て一大隊とす
一砲隊六隊
　但一隊佛製四付半砲（斤カヤ）四門砲手四十八員宛
一銃隊四大隊
　但銃手四十八員を一小隊とし六小隊を編て一大隊とす

以上

右之趣支配方帳口々々に及達二丸御屋形支配頭尾藤健之助に及通達候事（張口とは人名簿の首席の人を云ふ）

十月十四日我藩先きに日向國高千穗地方に暴民の起りしを以て兵隊を隣境に出し警備せしが延岡藩の說諭によりて暴徒鎭靜に至りし旨を申告す

〔東京ゟ之御用狀扣〕

當月六日延岡藩支配地為千穗邊村民共徒黨亂妨ニおよひ候旨相聞候付隣境迄最寄之兵隊一小隊繰出警備致せ候處一時之動搖ニ而彼藩ゟ說諭ニよつて鎭靜ニ趣候段申越候此段御屆申上候以上

十月十四日

熊本藩
井上治部丞

辨官
御役所

十月十七日飯野藩知事保科正益は松平容保の子慶三郎容大に松平の家名を相續せしめられむこと

を請願す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄 新錄探索報告〕

十月十七日

飯野藩知事より願書

奉願候覺

容保實子

松平慶三郎

當才

松平容保先般城地被　召上父永御預被　仰付置候處深キ以　御慮今度家名御立被下置候付血脈之者相撰奉願候樣被　仰出候付右慶三郎儀幼弱ニ之御座候得共此者ニ家名被　仰付被下置候樣仕度段容保元家來一同奉願候旨申出御座候間此段從私奉願候以上

飯野藩知事

保科正益印

明治二巳年十月十七日

辨官

御中

別紙

同文言被　仰出難有奉畏候依之容保實子慶三郎當歳ニ而幼弱ニ之御座候得共此者ニ家名被　仰付被下置候樣私共一同奉願候此段宜敷御執達被下度奉願候以上

十月十七日

元松平容保家來

惣代　重役　兩人

飯野御藩

御重役中

十月十八日北海道開拓費用として當百錢を増鑄せらる

〔復古帳〕

左之御書付十月　ホノマヽ　日非藏人口ニ御呼出御渡之由ニ而月番ヶ差廻來

今般新錢御鑄造ニ相成候得共差向北海道開拓爲融通在來之當百錢御鑄造增相成候條爲心得相達候事

十月　太政官

右之通於東京被　仰出候間爲心得相達候事

十月　留守官

〔維新史料編纂綱例〕

一十月十八日當百錢ヲ増鑄スノ用ニ充ツ　北海道開拓

十月十八日我藩兵制改革に就き士隊の外に番士隊を新設し番方中小姓の内より編入すへき旨を達す

〔明治二年 觸狀控〕

一兵制御改革之儀ハ先日及達候通候處士隊十二小隊御知行取御中小姓當代無足之無差別編制被仰付外ニ番士隊御取起是

迄之御番方並御留守居御番方御中小姓之内ニ編入被仰付苦候尤追而被及御沙汰候迄之今迄之通相心得候様被仰出候條奉得其意觸支配方ニ茂可被達候以上

十月十八日　　奉行所

右之趣支配方帳口々々ニ堀口角助列ニ及達ニ丸支配頭尾藤健之助ニ及通達候事

但士席已上

十月十八日我藩藩政を一新して職制職名等を改革す

〔明治二年 觸狀 控、御國東京往來狀扣〕

一今般知事被爲蒙　仰候付而之先日御直書之趣孰茂奉拜承候通ニ而素寄職制職名等別紙表面並畧書之通變革被　仰付役員茂多分減少之筈候間受々之面々其旨相心得彌以可致精勤候就而者諸沙汰筋等是迄ニ相違之筋茂可有之何事も内外力を合簡易之制度ニ歸候樣可心懸旨被　仰出候條奉得其意觸支配方ニ茂可被達候以上

十月十八日（御國東京往來狀扣には十九日とあり）　　奉行所

右之通候條被奉得其意夫々通達且可被達候以上

十月廿一日　　少參事

覺

一機密問

右者記室ヲ被改大參事權大參事之附屬局ニ被仰付是迄之選擧方ハ選擧局學校方ヲ學校局ヲ被改右記室併局分課被仰付候事

一御郡方　町方

右者併局被仰付民政局ヲ被改是迄之御郡方ヲ郡政局町方ヲ市務局ヲ唱寺社方ヲ神事僧籍ヲ二局ニ被改類族方ヲ戸籍局ヲ唱都而民政局之内ニ分課被仰付候事

一御軍備方

右者軍備局ヲ被改是迄之御城内方御船方ヲ被換右軍備局ニ合併被仰付候事

一御勘定方

右者被廢止是迄之御勘定所ヲ會計局ヲ唱奉行所分局ニ被仰付候事

一御刑法方

右者刑法局ヲ被改候事

一御當用方

右者當務司ヲ被改御作事方ヲ工作局御掃除道方ヲ修築局屋敷方ヲ邸宅局御客屋方ヲ待客局ヲ被改都而當務司之内ニ併局分課被仰付候事

一御供頭　　大司儀

一表御取次　　少司儀

一御奉行所佐貳役　　主簿

一同根取　　録事

一同御物書　　書記

一家知事　　家扶

一御側御取次　　大從

一御小姓役　　少從

一御近習御目附並御次番　　諸務引除少從

右之通役名被改候事

但新御屋形並宮内茂准之

以上

十月

奉

政事堂　總裁卿事

記室（唱來問）	選擧	學校
當務（當用方）	工作（作事方）	修築（掃除方）
邸宅（屋敷方）	待客（御客屋方）	

大參事	權大參事	少參事
主簿事	録事	書記

行所						
民政局		會計局（出納定方）	軍備局（出軍備方）	刑法局（出刑法方）	監官	監察
郡政（出郡方）	少參事	主宰（出納主）	主宰（出納主）	少參事		
神事（寺社方）市務（町方）僧籍（道俗方）邪	少參事	少參事	少參事	少參事		
書記	書記	書記（出納定役計事主錄）	書記	書記		

十月廿一日本藩皇后宮東京着御の日の途上警衛を命せらる

〔東京々之御用狀抑〕

（十月廿一日宮掌岡田市之助を以て渡されたる書付一通）

來ル二十四日　中宮着御ニ付御道筋辻固申付候條圖面之通人數分配差出可申候事（繪圖之扣略す）

十月廿一日　熊本藩兵部省

十月廿四日皇后宮東京に着御あらせ給ふ

〔明治二年主政日新錄〕（熊本縣廳所藏）

皇后宮去ル廿四日午ノ刻東京へ　着御被遊候

右之通東京ヨリ申來候間相達候事

十月廿八日　留守官

十月廿四日自今庶民に至るまで西洋形船舶を所持することを許す旨京都留守官より示達せらる

〔復古帳〕

十月廿四日非藏人口に御呼出御渡之由ニ而月番ゟ差廻來

別紙之通於東京被　仰出候間此旨相達候事

十月　留守官

西洋形風帆船蒸氣船自今百姓町人ニ至ル迄所持被差免候間製造又ハ買入等致度者ハ管轄府藩縣添書を以東京外務省に可願出事

但身元不慥之者共外國人馴合御國人所持之名を貸シ與へ候樣之惡弊無之樣府藩縣ニ於テ篤と吟味之上添書可致候事

十月　太政官

十月某日本藩臼杵亭藏大學校中助教を命せられ青木彥兵衛從七位に叙せらる

〔東京よりの御用狀扣〕

（十月廿五日大參事代飯田餓之助より餓本へ廻達書の内）

臼杵亭藏
大學別當
青木彈正大巡察（彥兵衛）

授大學校中助教

十月

太政官

叙從七位

右　宣下候事

十月

十月廿五日鳥取藩に肥前國浦上の基督教徒二百六十名の保管を命し受取の爲め來月廿五日迄に艦船を長崎に廻航すへき旨を達せらる

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄〕一新錄探索報告〕

鳥取藩
太政官
鳥取藩

十月廿五日御達

肥前國浦上郡其外異宗門之徒凡貳百六拾人其藩ニ御預被　仰付候事

十月

今般長崎縣ゟ人數凡貳百六拾人逆送御用被　仰付候條其藩船艦來ル十一月廿五日迄ニ長崎縣ニ差廻し可申候事

但御用中費用ハ長崎縣ゟ御渡相成候間着次第可屆出候事

十月

太政官

一御預之者共從來支配地人民同樣懇々撫育シ開墾大工金銀其外夫役ニ召仕相應產業ニ基候樣可取扱事

一異宗信仰ヲ嚴禁シ人事ヲ盡シ教諭ヲ加ヘ良民ニ復シ候樣精々教化可致事

但藩々最寄便宜之ニ港迄長崎縣ゟ護送可致ニ付掛合次第請取候者可差出事

一諸費者藩用ヲ以可取賄尤漸次產業ニ基キ公費無之樣猶處分可致候事

十月

右三通三條殿邸ニ而鳥取藩ニ御渡相成候事

十月廿八日結城藩知事隱居水野勝知東京の我藩邸に來たり謹愼を宥されしことを報し昨年保管中の厚情を謝す

〔東京よりの御用狀扣〕

水野勝知様

今般謹愼御免之處昨年中御預之節別端厚御世話ニ相成忝存候御禮御吹聽旁參上

以上

十月廿八日

結城藩知事隱居
水野勝知

飯田熊之助殿

公用人中

十月廿八日三條西公允越後按察使に任せられし旨を報する者あり

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄 一新錄探索報告〕

十月廿八日

一三條西正四位殿越後按察使被蒙　仰候との事

〔防長回天史第六編下〕

（明治二年冬期ノ大勢抄略）

同日（十二月五日）越後ニ按察使ヲ置キ去年以來兵禍ニ苦シミ平定ノ後モ地方官ノ任免頻りナリショリ人心安ンゼサルベキヲ以テ藩縣ノ政績ヲ熟察シ地方官ト戮力協心シテ布政施治ノ道ヲ盡シ上下ノ情ヲ通達セシム

（越後按察使設置任命の日附不審の點あれとも今暫く一新錄探索報告に從ふ）

十月廿九日贋金兌換の制を定め銀質鑛金百兩を紙幣三拾兩に抵て本年十二月を以て限りとする旨を達せらる

〔明治二巳年 觸狀控〕

少参事

贋金引替之儀ニ付太政官ゟ御渡有之候別紙御書付寫一通御用番被相渡惡金所持之有無且持高等取調來廿四日限達出候との旨候條左樣被相心得夫々通達且支配方ゟ可被達候以上

十二月十九日

惡金之儀ハ兼而御布令之通府藩縣ニ而取調十月中ニ可申出筈之處此度引替之通被爲立銀臺之分ハ格別之譯を以百兩ニ付先金札三拾兩御引替被成下追而總員數銘々持分等巨細御取調之上猶御詮議之筋も可有之候御趣意之程厚相心得可申候自然蓄置又ハ姦曲之所業いたし候者於有之者當人ハ勿論地方官之落度たるへく候條得其意早々取調別紙最寄之通大藏省並京都大坂同省出張所ゟ可申出候事

太政官

但代り之金札凡之見込を以府藩縣エ御渡可相成尤引替之儀當年限ニ候條受取之者早々可差出事

巳十月

（次に京都、東京、大坂大藏省出張所取扱地方を示せる別紙あれとも略す）

（備考）

廿九日（十月）贋金兌換ノ制ヲ立テ本年十二月ヲ限ル銀質鑛金百兩ヲ紙幣三十兩ニ抵ツ（近世史料編纂綱例）

〔明治三年 探索書控〕

大坂天滿ノ人ノ話ニ現今日本ニ通用スル貳歩金ノ内ニ贋金ナルモノ相除キ銀臺ノ貳歩金百兩ヲ楮幣三拾兩ヲ以引替可申トノ布令アルヲ云因而貳歩金純粹ナルモノヲ分析シテ試ル左ノ如シ

舊幕貳分金百兩此目方百六十目　内金三拾貳匁　銀百貳十八匁

右ヲ分析シテ鑛滅ヲ引左ノ精金銀ヲ得タリ

金三拾目　銀百二十目

金銀合シテ此價當時ノ相場

楮幣百二十兩ニ換ル

眞鑛臺ノ二歩金所謂贋物ナルモノハ分析スルニ不及日本政府未タ貳歩金ヲ分析シテ試サルヤ否若然ランニハ其國ノ貨幣ノ位ヲ不知シテ妄ニ布令ヲ出シテ現在百兩ノ貨幣ヲ三拾兩ニ買持主七拾兩ノ損アルニ政府ハ十兩之利益得ベシ日本人之ヲ知ラズシテ正金百兩ヲ楮幣三拾兩ニ換ルヤ否ヤ如是政府ノ役人愚ニシテ人民モ愚ト云ヘシ若役人金銀分析ノ高ヲ密ニ知ナカラ此布令ヲ出セシナラハ愚民ヲ欺キ非道ノ利益ヲ貪ル物ニテ下民撫恤ノ布令面ニ變シテ人心不服ノ災ヲ釀スモ計ラレス歐邏巴ニテ政府如是不條理ノ布令ヲ出シナハ忽チ國民ハ沸騰シテ政府ノ都城ニ礫ヲ打テ罵ルヘシ然ル

ニ日本人民敢テ動搖セサル者ハ愚者ハ知ラスシテ百兩ノ正金ヲ楮幣三拾兩ニ換知者ハ極ニ收メテ更ニ出サス狡黠ナルモノハ鋼潰シテ百兩ニテ拾兩ノ利益ヲ得ルモアルヘシ或ハ外國人銀臺貳分金ヲ九拾兩ニテ鬻敷買込タル由風聞アリ我等思フニ日本政府如是奸謀ヲ下民ニ施行スルヿ信ヲ失ヒ往々必政府ヲ蔑如シ己カ儘ニ奸謀ヲ出シテ政府ヲ欺クニ至ルベシ冀クハ貳歩金ノ眞贋ヲ論セス金百兩ヲ楮幣百兩ニ換ヘ取玉ハヽ下民損失ノ爲メ産ヲ失フ者ナク公正至當ノ仁政ト云ヘシ

右神戸ゟ東京ニ便報有之候由尤去己ノ年ノ事ノ由

一造幣局之人ノ咄新貨幣ノ分量金一分ニ銅銀九分ノ由舊幕二分金ハ金二分ニ銅銀八分也（以下略）

右高松藩大久保來ゟ借受寫取御達仕候事

午七月廿八日　　猪俣才八

十月廿九日本藩長沼英之助に有栖川宮御東下の隨行を命す

〔明治二年諸扣〕

十月廿九日

其元儀有栖川宮様御東下ゟ付而御用有之被召連度段御使被遣候間被差出旨候條左様可被相心得候以上

十月廿九日　　横田治部右衛門

長沼英之助殿

十月某日山口藩知事常備兵二千餘人を獻し親兵となさむことを請ふ朝廷之を聽許して先つ千五百人を徵せらる

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄探索報告、防長回天史第六編下〕

臣頃伏而念方今維新之政紀綱未全張基本未全立是本末輕重之勢猶備ナル處有之歟ト奉存候夫兵之所在其勢重シ故古之善ク勢ヲ制スル者必本末之宜ヲ得テ偏重之勢無之是誠ニ治亂ノ由テ起ル處ニ有之乍恐今日御親兵未編(備イ)杞憂罷在藩内ニおゐて先年來格別致編制置候常備兵差出度可奉願度ト相考候處今度奇兵振武兩隊東京常備兵被　仰付奉畏候然處當時勢御基本第一之御事ニ付藩内常備兵都合二千餘人不殘御親兵被　仰付候樣奉願候尤規律嚴重相立聊報國微志ヲ勉シ度(效イ)候輕重之勢ニ至候而ハ御親裁ニ有之紀綱之益御振張基本之益御確定被爲在候樣千萬不堪希望之至候此段宜御執奏所仰御座候以上

月　日（防長回天史には「十月」とあり）

（防長回天史には「幣官餓中」と宛名あり）

山口藩知事

御付札

願之趣尤之儀ニ付二千餘人東京常備兵ニ被　仰付候事

但御都合茂有之候付先千五百人被召出候其餘ゝ當分有形之通藩内ニ可差置候事

十一月三日千種有任薨す

〔京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

十一月八日横田より

千種從三位樣御病氣ニ付去三日東京ゟ御歸京同夜御逝去之由

十一月四日松平慶三郎に先祀を承かしめ陸奥國に於て三萬石の地を賜ふ

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄探索報告〕

十一月四日飯野藩知事御用召ニ付參朝之處左之通

松平慶三郎に別紙之通被　仰付候間此段可相達候事

十一月　飯野藩知事　保科正益

別紙　太政官　松平慶三郎

今般家名被立下華族之列ニ被置於陸奥國高三萬石支配被　仰付候事

但郷村高帳之儀ハ追而　御沙汰可有之候條受取候上藩名可申出事

十一月　太政官

〔吉田東伍著大日本地辭名書〕

田名部（タナブ）（陸奥）陸奥は南部藩政の時田名部通と稱し下北郡の諸村を統べて一奉行の治所たり明治維新の際南部藩倒封せられ會津藩は更に三戸七戸田名部等三萬石を賜り就封す即、斗南（トナミ）藩と稱せしが幾歳ならずして廢す斗南とは「北斗以南皆帝州」の義にて北遷の新藩に命名す○東巡錄云舊會津藩士族凡六千戸　明治己巳の年斗南藩を置るゝや悉皆該地へ移住而も廢藩の後は自由去就を聽され六年の春に至り故郷若松へ返るもの二千戸是等素より無祿無産にして又家屋ふし日夕の生活に迫らる乃强壯の男子は或は山業或は工職に從事し婦女は針線織紡を爲す而も今や其甚しきは日傭等の賤業を爲し僅に口を糊す又初め斗南に移住せすして直に歸農をゆるされし者あり困窮中稍佳ふる者とすされは若松舊城下復歸の士族に對し三木木開拓場に下附せられし現米九萬石の内一萬八千石の殘數を轉移して授産の方法を立てしめらる

〔仝　書〕

新撰國誌云、斗南舊名田南部、北郡半島の都會也盛岡藩の郡署ありしが明治維新、會津松平氏に封せられ斗南と改む卽郡署を以て居館とす既にして藩廢し又田名部の舊號に仍る云々

十一月四日本藩福田大助武藤猪之助（後名嚴男）の大學入寮の願書を提出す

〔東京より之御用狀扣〕

生國肥後　宿所大名小路邸内　福田大助　己廿五歳

熊本住居

右同斷　武藤猪之助　己廿四歳

右之者共當　御學校ニ入寮修業爲仕度候間此段奉願候

以上

熊本藩　島田次兵衛

己十一月四日

大學校　御役所

十一月五日本藩兵の中宮行啓供奉警衛を解き且つ賞品を下賜せらる

〔東京より之御用狀扣〕

今日辨官御役所より御呼出ニ付御所使罷出候處五辻少辨樣より別紙御書付壹通御渡且　中宮御警衛隊長御呼出ニ相成居平山彦三郎ニ白羽二重一疋並御酒御料理二小隊ニ金五拾兩下賜候旨被仰渡候付右御品等ゝ直ニ彦三郎ニ相渡申候此段相達申候以上

十一月五日　公用人中

飯田熊之助殿　熊本藩

中宮行啓ニ付其藩兵隊供奉御警衛被　仰付置候處被免候事

十一月　　太政官

十一月某日醍醐を閑散ならしむる爲め高一萬石につき三百兩迄を目當として來十五日より大小金札を引替ふへき旨を達せらる

〔太政官一卷〕

兼而御布告有之候通大札引替之小札未十分之製造ニハ不至候得共融通差支難濃之折柄ニ付高一萬石ニ付先三百兩迄ヲ爲目的ト來ル十五日ヨリ追々引替候條藩縣ニテイテ取纏引替札ヱ印形致シ包坐改ヲ受大藏省ヱ可差出事

但三府之義ハ爲替會社小札ニ而致流通候ニ付追而引替可及沙汰候事

十一月　　民部省

十一月五日數寄屋橋門警衛の我藩兵、鹿兒島藩兵と衝突す

〔東京々之御用狀扣〕

去ル五日數寄屋橋御門鹿兒島藩炮卒押通り候節下方之者共行違之儀有之同所御番衛中より別紙之通申出候右者全苛察之仕形ニ相當居兼候次第御座候右ニ付而之同藩よりも御屆仕候由ニ付別紙相添御達仕候以上

十一月八日　　熊本藩

兵部省　　井上治部承

御役所

口上之覺

數寄屋橋御門之儀演暮ニ小扉通行出來候樣ニ大扉を直シ南片扉ヲ立挑灯を燈候上小扉ヲ打升形外御門ヱ六半時比迄ヱ片扉明置六半時より兩扉締切箱番之者ヱ燈付より出張いたし來候然處昨五日暮時分例之通小扉ヲ明片扉を立挑灯臺等出シ居候處御門外より炮車一輛走ラカシ來り御門ニ付當可申勢イニ付御門に紙付候而ハ難相成故開閉之ため罷出居候夫卒茂助と申者より御門ニ當付候而者不相成候付氣を付靜ニ通り候樣申向候得共不聞入南扉に當付候間差咎候處何も不存由申候間叱候而通し候跡に猶一輛同樣ニ走ラカシ來候間聲を懸候得共北扉に當付候付高聲ニ差咎候を夫卒長吉外四人聞付罷越候處右樣御門に當付懸合混雜口上不分ニ而ふせきのけ候ため持居候棒を茂助長吉打振候内ニ又壹輛駈込來候處先之車御門に滯り居候付跡に扣居車押兩人ニ内壹人暫立退候付壹人ニ而御門押通候處又北之扉に當付候間叱候而通し候由右夫卒五人罷越候上騒敷有之候間内田伊助甲斐範藏中島熊之允罷越候處其節ヱ事濟候間靜ニ通候樣申聞御番所に引取呢といたしたる事とも不相聞候付隊長にも不申出夫卒共も承糺なく差置候處六半時過鹿兒島藩之由村田三助と申者同所御番所に人數凡三拾人程引連罷越申出候ヱ今日兵部省御用ニ而大炮打方として罷越候引取懸ケ御門ニ而僕を打擲ニ相成候儀ヱ如何之趣意ニ候哉樣子承知いたし度段申出候然處前文之通御門に車當付候間夫卒共より及懸合候段ヱ承居候得共打擲いたし候儀ヱ承り不申候付相糺是より可及返答申向夫卒共手元承糺候處前文之通度々御門に車を當候付拂除候ため棒振舞候内打當候儀ニ而素より打擲ニおよひ候意ニヱ毛頭無之由申出候得共向之者に振當候而ヱ全打擲同樣之仕方ニ相成奉恐入候段申出候此段御達仕候以上

數寄屋橋御門

御番衛中

十一月六日

十一月五日先きに刺客に襲はれ負傷したる兵部大輔大村益次郎遂に歿す

〔防長回天史第六編下〕

（明治二年秋期ノ大勢抄略）

四日（九月）兵部大輔大村永敏益次郎京都木屋町ノ寓ニ賊六七人突入シテ害ヲ加ヘ逃ス永敏重傷ヲ負ヒ廉客家僕等數人死傷ス（中略）十一月五日ニ至リ永敏遂ニ歿ス（而部ノ傷ハ次第ニ癒エシモ一脚ノ切斷ヲ要シ之ガ爲メ遂ニ斃ル施術者開醫ボートインナリ（略）

十一月六日本藩林布之助に根室支配地開拓事務主任として出張を命す

〔御國東京往來狀扣〕

（十一月十一日附藩政府ヨリ在東京京都重役宛書面の一節）

林　市之助

右者根室國御支配地開拓ニ付而用意濟次第被差越右御用筋一列之面々主ニ成申談候樣被仰付旨去ル六日及達候

十一月六日軍曹巢内式部は彈正臺小巡察小野某と協議し大坂に至り横井平四郎の著と稱する五部の書を探索したれとも發見するを得す遂に岡藩士矢野束を鶴崎毛利到の家へ遣し之を求めしむ

（日本史籍協會編）

〔巢内信善遺編附錄〕

勤王家巢内式部傳

式部の自記左の如し（抄出）

然る所同年冬東京彈正大弼備前侯の命を持し柳川藩小野小巡察急使にて備前に下り奸魁横井が罪狀確證を藤本津之助（鐵石）が後家の方へ求めに被遣候處此家には一物もなし依而徒らに京迄歸へる然る處予が此秋東京より歸りて後大に盡力の事を聞いて予を訪ふ依て是迄横井か奸惡を集錄せし物を以て示之同人大に歎ひ度々予を訪ふ彈正臺にはタ程迄心を入れて彼等を助けんとす偖直に東歸可致之處此手掛り有之か故に此約りの相分る迄京地に逗留可致と也故に前件の事を審に申示す右ハ正木昇之介か從者增田金藏を浪花にさし下し横井著述五部之書を書附に致し大坂河内屋に爲相尋候處なしと答ふ然るを一時の策に依りて前廉に我見たる故に其事を主に申依て我等求めん事を以て今度態々下候處今日に至り何そ見せさると責む其時和助の子和三郎得と考へ入りて後夫成は前方御覽に入候御方樣ハ君にて候哉と申實は其本前方京都田中屋治平方へ爲持遣はし都合三十冊の内五冊を分て殘二十五冊宰町姉小路角松田屋幸介へ賣渡す幸介は此節大坂に住居の所紀州より姫路邊へ參り居候よし故に河内屋には右の書物無之事を爲書京に歸る依て京都田中屋治平方を調へ見候處不知を以て答ふ故に其元を探索せん事を以て浪花に下り愈々不分上は豐後鶴崎へ矢野束を遣はし可申と申約定にて浪花へ下る時に十一月四日也大坂八軒屋に着す尤も倅鬼藤太增田金藏矢野束同道大坂にて鍛治天國壽山等同道直に和介を呼に遣はし候處夕方不成しては不歸候由夫より五日呼立右之趣を申聞候處不知を以て答ふ猶明日帳面を以て旅亭に來らん事申付兩人歸る翌日親子來る依て始よりの概略を申聞け始め五部の書目錄を以て有無を問ふなしと申故に策を以て前に一見せしと云ふに實は京都田中屋と松田屋兩家に賣れりと申書附を出す然るに今帳面を見れは雜の寫本四十六冊を田中治平方に賣り内十二冊を取り殘り三十四冊の處三十三冊松田屋に賣りしとあり尤も辰五月也其前金藏相尋候時帳面を前に置き三十三冊の内を田中屋へ賣ると申二十五冊を松田屋へ遣はすと云ひ本數の違ひと申特に其時五部の書目錄を以て之を尋ぬ然るに始はかくして後に實を告く依て之を責む只々思ひ誤りと答ふる而已（中略）

爰に岡の藩士矢野束と申す人浪花肥後邸にて鶴崎毛利イタルの子息タダスに面會の節、我親天壤非說を持てりと云ふ故に同夜矢野を豐後鶴崎毛利の邸に遣しぬ尙西國の事情を探索せん事を託して立たしむ猶彈臺油川に談して十兩を借用外に廿五兩を添へ卅五兩爲持同夜出船せしむ

同六日大坂府内佐久間守衛介、喜多田三郎、箕田貢一郎、林□寄りて一酌すこれ等皆黑谷隊より出たる者也同七日知府事西四辻殿に拜顏夕暮八軒屋より乘船京に歸へる其後古賀大巡察肥後を探索して天道革命論を得たり此書を以て小

野小巡察は火急東歸せり

日々寒氣強く御座候處益々御勇健御起居奉賀候昨夕ハ折角御尋被下候處忽忙之折柄ニて失敬打過恐縮之至也其節御談之事件ニ付河内屋和助呼出し勘問に及候處偏ニ相秘し居事情明亮不仕候間即時悖和三郎呼出し猶又篤と勘問に及候積就テハ昨日拜見仕候本屋之文通書等確證之書類今一應拜見仕度恐入候得共此者へ向ケ御遣はし可被下候樣奉願候他ゑ拜月草々頓首

十一月六日　　船来巡察屬

巣内鴨生様

急用

（編者曰、本文中横井が奸悪を集録せし物を以て示之とあるは蓋し左の書ならむ今此に抄錄す）

〔彈正臺書類巻十巻〕（司法省所藏）

横井平四郎罪悪證迹（抄略）

横井平四郎罪悪證迹（抄略）

一藤本津之助（號鐵石）曰ク横井平四郎ハ天地ニ容ラレサル大罪人也其故ゑ詭辯ヲ以湯武革命ノ理ヲ主張シ我國ハ　天照太神之私言ヨリ帝王血筋相傳トナリ武烈陽成彼禁紂ニ同シキ暴君ト云トモ敢テ之ヲ放伐スル者ナシ故ニ門閥ヲ尊ヒ俊傑アリト云トモ沈淪シテ其才能天下ニ顯ハレス幕府モ京師ニ掣肘セラレ莫大ノ功ヲ成スコト能ハス是彼血筋相傳之非說ヲ墨守スルノ固陋ヨリ蕞爾タル孤島ヲ神明之國ナト、妄ニ自ラ尊大ニシテ未タ一人之万國洞觀ノ大活眼ヲ開ク者ナシト云其所著天壤非說大意如此即廢帝論之由テ起ル所ナリ嗚呼是邪說忌憚ナキ者ニアラスヤ若シ彼ヲシテ廟堂之上ニ在シメハ馬子直鞠ノ大逆ハカルヘカラス可憎可畏

此書ハ津之介ヨリ其書友村山荷汀（越後人）ニ與ヘシ也荷汀之所持ノ由

一西村敬藏ヨリ書狀之寫

昨日は御光來被下忝奉存候然ゑ御約束之銀山一擧死亡之姓名等別紙ニ認メ差上候間御請取可被下候其節被托候横井平四郎罪狀之次第委敷ゑ相分り不申候へ共肥後藩南木四郎竹中某兩人ゑ切懸候へ共不果志候極ニテ南木四郎ゑ大日山ニテ割腹致候竹中ハ即藤村四郎殿之舍兄ニ御座候間藤村氏へ御探索被遊候ハヽ大凡事情相分可申候先ゑ用事而已大略草々如斯ニ御座候

右ニ付早速藤村氏ニ面會相尋候處同人曰ク彼平四郎カ奸悪ゑ天下ノ赤子モ所知是確證ナリト　巣内鴨生記

一横井十年ハカリ前同藩上野堅五ニ謂テ曰ク有德者天下ヲ有ツヘシ　皇統之一系ハ尤不可ナリ合衆國ノ例ニ倣ヒ四年期限入札ヲ以大統領ヲ立君臣ノ名義ヲ廢シ五倫ヲ四倫トシテ可也ト云々

一友人ヨリ之書中ニ平四郎天壤無窮ハ　天照大神之私言と申詩有之山同藩益坂榮藏へ御申聞御取寄之事

右益坂榮藏甲州御在役滋野井家ニ仕度由ニテ予カ旅宿へ來リ賴ム即添書相認メ渡ス右之書狀ヲ得シハ榮藏甲府へ向ヒ出立之跡ナリ遺憾

本月二日大坂肥後藩邸ニ而同藩毛利莫ニ面會仕候節横井平四郎之一條相噺候處同人申候ハ右横井平四郎著述廢帝論同藩高崎善右衛門へ相頼早々鶴崎毛利方へ船頭直ニ持參り右之書物持歸り候樣申付置候處以今返事參り不申候ニ付且天壤非說等之類々所持致候趣相咄候間早速彼地へ罷越持參可申心得御座候處無據需用出來候ニ付則書面相認拙老明日知藩事（堺縣知事小河彌右衛門を指すならむ歟）歸國（肥後國藩也）ニ付拙者親族何某へ書狀認め遣し候書狀着次第ニ鶴崎へ持參之上早々右之書物さし登シ呉候樣申遣シ置候

十月念七　　岡矢野東

重曹

巣内鴨生様

横井平四郎著述天壤非説　河内屋和助

右者大坂心齊橋通り

右之書物探索之爲指遣シ候處始ハ在不申候趣ニ申立候趣之處探索ニ指遣シ候者當座之策を以テ夫ニても前方拙者ニ賣ふと申て見せ付其趣主人に申此度態々買ニ下り候處待歸り不申してハ主人へ申分無之趣申立候所右和助夫成ハ成程前方御目ニ掛申候ハ其御方ニて候歟と申候て實事申出候尤三十部丈寫し取候而京都四條御旅丁田中屋治兵衛方に相登シ候處內五部分買取殘り二十五冊之烏丸姉小路角ニて松田屋幸助方に賣渡申候然ルニ京地表右之本探索强く有之候ニ付同人不如意ニ付大坂に下り湊町之內之露路を借用ニ而住居仕居家主も本屋之由此者ハ紀州より姫路邊に參り近々歸坂之よし右歸次第早々取調可申と申事ニて罷歸り申候

探索ニ參り申候者ハ民部省內正木昇之助家來益田金藏ト申者ニ而有之候事

一河內屋和助之咄ニ京都烏丸六角服紗屋勘兵衛と申人士壹人同伴にて買ニ被見候處此方へ御賣不申候よし

一大坂へ下り金藏と申錦小路烏丸西へ入明論舍之內ニ留主居致候平助と申之西院村平塚氏ニ朝夕出入之所右之横井之始末其外之書と申て被寫候を現ニ見申候と申事也

右之平介ニても又平塚氏へ成とも被參候而御咄ニ相成候ハヽ被見候事と申候也

一河內屋和助直書之覺

天壤非説　烏丸也

右寫本不殘賞拂仕舞申候間宜敷御斷奉申上候以上

（十月廿二日附アリ）　室町姉小路用

右書而待歸り申候事　松田屋小幸助也兵衛

河內屋和助

一横井著書題目

廢帝論　天壤非説　天照大神私言　武家非錄　公武議言

右五部

七ヶ年計前ノ事寫シ人　京師　梯信造　同　上坂庄次郎　大坂　河內屋和助

八坂神主山本貢右書ヲ買ヒシ由

十一月七日本藩高原淳次郎本佐々開拓使御用にて上京を命せらる

〔御國東京往來狀扣〕

（十一月十一日附藩政府より在京京都重役宛書簡の一節）

右者從　朝廷御用有之候付用意濟次第東京に被差越旨去ル七日及達候　高原淳次郎

十一月八日本藩山田爲八並に歩卒久次郎戰功により賞祿を下賜せらる

〔東京ゟ之御用狀扣〕

十一月十一日飯田熊之助より

以別紙申達候、、、

（十一月八日兵部省に於て朝陽艦元船將中牟田倉之助渡し）

高拾四石

蝦地流賊追討爲戰功三ヶ年間下賜候事

但三ヶ年分一時ニ被下候事

明治二年己巳十一月　朝陽艦

久次郎

高拾四石
現米三石五斗
平均相場壹石ニ付金八兩
此代金貳拾八兩
三ヶ年分
金八拾四兩

（十一月八日兵部省に於て岡本大録を以て渡されたる書付）

山田爲八

高四拾石
依蝦地流賊追討戰功三ヶ年間下賜候事
己巳九月

十一月九日本藩黑川太兵衛田中又之允に東京に於て海軍砲術書飜譯の旁廣く砲術を研究すへき旨を命す

〔江戸京都來狀扣〕

（從慶應二丙寅年正月至明治三年十二月五日佐々木大參事飯田餌之助ヨリ藩政府宛報告書の内）

黑川太兵衛
田中又之允

右者海軍砲術書飜譯之透々諸方ニ渉り右ニ係り候件々廣研究いたし候樣被　仰付旨同（十一月）九日及達候

十一月十一日本藩藩士にして朝官に任命せられたるものは藩職を免し其職に對する足高及ひ職務俸を支給せさることに決す

〔御國東京往來狀扣〕

以別紙申達候　朝官ニ被　召仕候面々免職且席祿等之儀付而別紙ゟへ之通此節僉議相決候間於東西京茂右之趣を以御取扱候樣存候以上

十一月十一日　同廿四日着

横田治部右衛門殿（西京詰）
神山源之助殿（同右）
佐々木與太郎殿（十月八日餌本發同十五日西京着同廿日西京を發し中ノ急にて十一月三日東京に着せり）
林九八郎殿（東京詰）
飯田熊之助殿（同右）

權大參事
大參事

東西京ニおゐて　朝官ニ被　召出候面々藩之職務ハ不被免候而之跡役等之都合あしき綾も有之哉ニ付向後之藩職ハ都而可被遊御免哉

但他日　朝官被免候節歸役可被仰付哉否之儀之其時之都合或ハ人躰之茂寄候事ニ付豫難被究置可有御座哉

一藩職被免候上之職付而之座席幷御足高等ハ悉皆被召上候儀當然ニ御座候處　朝官ニ被召出候迎藩之席を被落候而之被對　朝廷候處如何ニ付別段を以座席ハ其儘被閣御役付而之御足高幷勤料等ハ悉皆被召上候方可然哉ニ候得共御藩士ゟ朝官ニ被　召仕候得之何稜ニよらす御用便ニも相成候譯も有之是又別段を以御足高等之其儘被附置勤料ハ不被下置候事

但旅詰究御扶持方も被渡下月給ハ不被渡下筈尤　朝官被免候節ハ御足高等被召上候儀勿論之事

十一月十一日本藩岩男助之丞の上野戰役の功を賞す

〔御國東京往來狀扣〕

（十一月十一日在東京佐々木大參事等より藩政府へ通報の内）

一御紋附御帷子　一

右者去年五月上野戦爭之節惣見役ニ而相働暫者本陣附物見相勤所々探索等別而骨折候付被下置旨今日御書相渡候
右之通候事
十一月　　岩男助之丞

十一月十二日高瀬宇土二藩に大原口警衛を命せらる

〔江戸京都來狀扣〕（慶應二丙寅年正月至明治三年）

兵部省より御渡相成候寫

其方在京兵隊大原口警衛申付候事
但郡山藩兵隊と交代可致候事
己巳十一月　　細川從五位利永
細川從五位行眞
兵部省

〔密書輯錄〕

自著子爵細川利永履歷大略

十一月十二日ヨリ兵隊大原口御警衛被命（此時利永在京桂御所御警衛）

〔京都并東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

十一月廿三日神山より十二月十四日着

以別紙相達申候去十二日高瀬從五位樣宇土從五位樣御家來々々兵部省より御呼出ニ付罷出候處在京兵隊大原口警衛被仰付候段之御書付御渡ニ相成候由ニ而被差出候間進覽仕候右ニ付翌十三日郡山藩と交代相濟候由御座候

十一月十二日新貨鑄造につき諸藩より無用の銅製大砲を購入すべき旨を達せらる

〔江戸京都來狀扣〕（慶應二丙寅年正月至明治三年）

（十二月十二日附宗村嘉兵衛より藩政府宛報告書の内）

一新貨幣御鑄造ニ付藩々無用ニ銅製大砲御買上之儀ニ付一通（但文書記載なし）

（備考）

十二月（十一月）諸藩ニ令シ無用銅礮ヲ納レシメ新貨鑄造ノ料ニ充テシム（近世史料編纂綱例）

十一月某日摂州三田藩の農民徒黨を結びて暴動す

〔一新錄探索報告〕（明治元年辰正月ヨリ十二月迄）

摂州三田藩大改革專ラ洋風ニ倣フ處ヨリ民心不服物情恟々タル折柄藩士牛ヲ屠リ（此牛買タル歟夥タルカ不詳）割烹スルヲ見テ農民共大ニ憤リ牛ハ農ヲ助ケ大ニ功アル者ナルヲ妄リニ屠リ食フ「無慙ノ至リ也ト益不平ヲ懷キ居リシ由然ルニ今年凶荒ノ譯ヲ以テ租稅減額ノ「ヲ歎願セシニ許容ナカリシカハ下地十分憤怒ヲ含ミ居リシ民心一時ニ激發黨ヲ結ヒ群ヲ成シ例ノ竹槍或ハ小銃ヲ携ヘ城ニ迫ル勢ナリシヲ說諭ノ爲ナルベシ知藩事ミヅカラ出馬アリシヲ銃丸ヲ以テ馬ヲ打倒シ知事ハ落馬アリ這々ノ躰ニテ一民家ニ逃込レシヲ續イテ取圍ム右民家ノ者知事公ナル「ヲ示シ退ケントスルニ知事ナラハ尤モ望ム所ナリト彌迫リ來ルニヨリ知事ハ陣羽織等ヲ脫キ捨樣ヲカヘ（裏道アリタルナルヘシ）辛フシテ脫走アリ引續キ駕三四挺出タルヲ見付ケ逐ツカケ來リ打カヽル勢ヒ烈シカリケレハ駕ヨリ轉ヒ出散々ノ躰ニテ脫走（コレハ大參事權大參事位ノ人ノ由）其中ニハ創ヲ被リタルモ有之トノ「サテ右ノ駕ハ微塵ニ打碎キ又彼知事ノ脫ステ置レシ陣羽織ヲ多勢群リ來リ手ニ手ニ突破リ引裂キズダノ〳〵ニシテ竹ノ先ニ引掛ケ眞先ニ押立見々聲ニテ押行ク於是急評議アリシト見エ願ノ通聞屆ケタルトノ趣ヲ高

札ニ認メ兵隊ヲシテ城外ニ掲ケ出サシメルニ高札ノ表ニハ聢ト目モ着ケサリシヤ兵隊ト見テ彌奮ヒ立小銃等烈シク打カクルニヨリ兵隊モ札ヲ打捨テ散々ニ逃行ヲ追打ニ城内マテモ付入ルヘキ勢ナリシニ其内ニ高札ノ表ニ氣付シモノアリテ群黨ヲ制シ漸クニシテ先ツ鎭リタル由

右ハ十一月十一二日頃ゟ十五六日頃迄五日程ノ間ノ事ノ由福山藩士有馬ヘ赴キシ途中ニテ聞取タル由ニテ同藩關根敬三ヘ直話ノ次第同人ヨリ尙又直ニ承候趣ニ御座候事（以下略）

右件々御達申上候事

十一月廿五日　　猪俣才八

〔仝書〕

前文略廿三日三木ヶ申處松屋ヶ申ニ一宿致翌日同所より三里計先に參候處攝州三田ヶ明石領ヶ之間ニ公訴相始り家數凡三拾軒計打毀大混亂同所ゟ先ハ通行辻茂難相成趣無是非途中ゟ跡に引取候趣ニ御座候右者當月十八日ゟ相始人數之不相分候へ共不容易事故諸向ゟ種々相論候得共中々相鎭り不申候此段御斷旁申上候以上

十一月廿五日

右ニ付三田侯一揆之爲ニ所騷漸々命を全して逃去被申候趣此書狀ハ三木ゟ三里計北東より大谷ヶ申處之明石侯菩提所ゟ出シ也

十一月十三日長岡護美代細川利永桂宮警衛を免除せらる

〔京都并東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

御留守中桂宮御警衛被　仰付置候處御模樣茂有之ニ付被免候事　　細川從五位

十一月

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

十一月十九日　　留守官

一去ル十三日高瀨從五位樣御用召ニ付御參　朝之處　桂御所御警衛御模樣も有之ニ付被　免候段之御書付一通久世從二位樣ゟ御渡之由ニ而公用人助役を以被差出候然處諸太夫ゟ御口達ニ而此方樣御事ハ格別之御由緒も有之　御所ゟ御墓之譯も有之候付以來も不相替切々御機嫌御伺等被爲在候樣との趣申出候由云々

十一月十三日攝津艦機關長となり職務に殉死せし本藩野間嘉右衞門に對して祭粢料を下賜せらる

〔東京ゟ之御用狀扣〕

（十一月十三日佐藤兵部權大錄發）

軍艦攝津丸機關長中付置候處航海中誤而機關ニ陷り死去候段不愍之至ニ付祭奠料トシテ金百貳拾兩下賜候事

十一月　　兵部省

十一月十三日故兵部大輔大村益次郎に從三位を贈り金幣を賜ふ

明治三年

〔從東京西京之下廻〕

大村兵部也

故從四位守兵部大輔藤原朝臣永敏

夙贊回天之業克策勳賊之勳軍旅之事大有望後圖豈料溘然謝世帷幄喪人深悼惜焉因贈從三位幷賜金幣

明治二年十一月十三日

右之外指而錄上之筋無御座候以上

正月廿四日　　西京

坂　梨　様　　二月八日着岸

熊　本　様　　仝十一日着

十一月十三日本藩古閑富次に北海道支配地開拓用懸を命す

〔御國東京往來狀扣〕

（十一月廿五日藩政府より京都東京詰重役へ報告の内）

古閑富次

右者蝦夷御支配地開拓御用懸被　仰付旨

右之通去ル十三日及達申候

十一月某日隱岐國大凶作につき大森縣に金壹萬兩を貸與し之が救助に充てしめらる

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄探索報告〕

（公用司方廻來長谷川六右衛門書取の内）

十一月十四日於彝官御達

鳥取藩

隱岐國大凶作ニ付救助之儀願出候條無餘儀相聞候依之大森縣ニ先金壹万兩拜借被仰付置急相救候樣民部省ゟ大森縣ニ相達候間此段爲心得相達候事

十一月

十一月十四日我藩小倉戰役の功勞者を賞す

〔江戸京都來狀扣〕

（從慶應二丙寅年正月至明治三年十一月廿三日神山源之助より藩政府へ通信の内）

太政官

一御紋附御上下一具　　立石玄藏

右者小倉出張中敵地之模樣探索等別而致心配戰爭之節之延命寺赤坂鳥越に應援として罷越差入及苦戰陣拂之節も諸事行屆候付被下置旨

一御紋附御上下一具　　八木田新助

右者小倉戰爭之節於赤坂鳥越大谷間道格別相働候付被下置旨

梶原丈之助

仁田市之助

波々伯部九郎助

曾根亦彦

右者小倉戰爭之節一番手に應援として罷越相働候段被遊御滿足旨　　庄野彦左衛門

右者小倉戰爭之節於大谷間道相働滯陣中物見且玉藥仕込等骨折候段被遊御滿足旨　　山田又雄

右者關東出張中所々警衛等致辛勞追而甲府に分隊巡邏厚候等骨折候段被遊御滿足旨

一御紋附御上下一具　　立石熊彦

右者小倉戰爭之節大谷間道赤坂鳥越に應援として罷越差入及苦戰陣拂之節も諸事行屆候付被下置旨

右之通被仰付旨去ル十四日御書付相渡申候右ニ付御受書一通進覽仕候

右之通候事

十一月

十一月十四日本藩澤村脩藏に北海道支配地開拓用懸を命ず

〔御國東京往來狀扣〕

（十一月廿五日藩政府より京都東京詰重役へ報告の内）

澤村脩藏

右者蝦夷御支配地開拓御用懸被仰付旨

右之通去十四日及達候

十一月十四日阿蘇大宮司の臣佐伯關之助神祇宮に召喚せらる

〔佐伯文書〕

阿蘇大宮司代

佐伯關之輔マヽ

神祇官

尋候儀有之候間明十四日巳刻出頭可致もの也

十一月十三日

十一月十四日我藩和田倉呉服橋數寄屋橋等諸門警衛兵の交代を行ふ

〔御國東京住來狀扣〕

以別紙申達候追々及達候趣別紙一冊差進申候以上

十一月十九日　　飯田熊之助

佐々木與太郎

大參事衆中

權大參事衆中

覺

横田治部右衛門殿　　金守彦十郎

隊共

澤彌門

治助嫡子

小堀太郎彦

休之允嫡子

井上平太

右者和田倉御門警衛被仰付置候處被遊御免用意濟次第熊本に被差下旨

小堀治助

隊共

合志彈之丞

山崎半之助

野々村三郎次

右者呉服橋御門警衛被仰付置候處被遊御免右同斷被差下旨

魚住源次兵衛

隊共

右者數寄屋橋御門警衛被仰付置候處被遊御免呉服橋御門警衛被仰付旨

山路太左衛門

隊共

右者數寄屋橋御門警衛被仰付旨

和田權五郎

隊共

右者和田倉御門警衛被仰付旨

右之通去ル十四日及達候

右之通候事

十一月

十一月十五日本藩數寄屋橋門守衛番長謹慎を命せらる

〔東京々之御用狀扣〕

（十一月十五日唯兵部權大錄渡）

熊本藩

去ル五日夜鹿兒島徴兵大砲調練之歸路數寄屋橋御門通行之砌右徴兵ニ對シ不穩振舞ニ及全同日當番重立候者之不行屆

ニ付謹慎可申付候事

十一月　　兵部省

十一月十五日横井平四郎の著といふ天道覺明論の來歴熟知の者をして至急携帶上京せしむへき旨大宮司阿蘇惟治に達せらる

〔阿蘇家文書〕

先般彈正臺古賀大巡察迄及披露候天道覺明書之儀ニ付而者其旨當官ハモ可申出筋之處其儀無之如何之次第ニ付右書持參右之筋篤ト相心得候者極至急上京可有之候也

十一月十五日　　阿蘇大宮司　　神祇官

別紙

阿蘇大宮司

右先般古賀大巡察迄及披露ニ候天道覺明書差出方之儀ニ付御尋之筋有之候間其集譯局名前之者取調有之書籍來歴委典當臺へ可申出候事

猶以極至急御用ニ付書夜取調若不分明之儀茂有之候ハヽ、集義局一同上京爲致候トモ結局條理明白取調成丈夕急速可申出候事

十一月十四日　　彈正臺

右之通彈正臺ヨリ達有之候條相心得本文之趣を以極至急取調可申出候也

十一月十五日　　神祇官

十一月十六日我藩桂宮警衛を命し居たる吉海市之丞吉田源左衛門等の任を解き尋て下國を命す

〔江戸京都來狀扣〕

從慶應二丙寅年正月至明治三年

（十一月二十三日神山源之助より藩政府へ通報の内）

覺

（中略）

古原信次郎　組共
上月半下

右者（中略）桂御所爲御警衛被差出置候處被遊御免旨

（中略）右之通同（十一月）十二日及御達申候

吉海市之丞　組共
吉田源左衛門
懋兵衛嫡子
下林勵太
權之助弟
加賀山泉藏
水足勘助　組共
大木七右衛門
成瀨小右衛門
手島忠之允
湯地丈之進
荻忠右衛門
一宮彦九郎
本庄角之允
渡邊理右衛門
萱野九郎助
內藤勘左衛門

右者桂御所御警衛として被差出置候處右御警衛被免候付被遊御免旨

築山與十郎
湯淺五郎兵衛

右同斷

右之通同十六日及御達申候

水足勘助
組共
大木七右衛門

右者用意濟次第早々熊本に被差下旨

成瀨小右衛門
手島忠之允
荻忠右衛門
一宮彦九郎
本庄角之允
渡邊理左衛門
豈野九郎助
内藤勘左衛門

右同斷被差下旨

湯地丈之進

右同斷被差下候尤探索として中國筋被差越旨

右之通同十七日及御達申候

吉海市之丞
組共

右者用意濟次第早々熊本に被差下旨

吉田源左衛門
懋兵衛嫡子
下林勵太
權之助弟
加賀山泉藏

右者用意濟次第早々熊本に被差下旨

都築三右衛門
藤兵衛養子
河井藤十郎
熊之助三男
山田又男
充次郎弟
曾根亦彦
隊共

右同斷被差下旨

後藤彈助

右者御人減に付用意濟次第熊本に被差下旨

右之通同廿日及達申候

右之通候事

十一月

〔仝書〕

吉海市之丞
組共
吉田源左衛門
懋兵衛嫡子
下林勵太
權之允弟

十一月十七日桂宮警衛の我藩兵、兵部省親兵と交替す

〔京都并東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

兵部省御役所に

今度　桂御所御警衛被　免候付跡御警衛之向(兵部省親兵也)と昨日引代り相濟申候依之爲御警衛差出置候兵隊近々熊本表に差下申筈御座候此段御屆申上候以上

十一月十八日

熊本藩
宗村加兵衛

加賀山泉藏

右者明日爰許被差立候此段相達爲可申如斯御座候以上

十一月三日

神山源之助
大參事衆中
權大參事衆中

十一月十七日在京我藩吏員松本彦作兵部權小丞藤村某に就きて我藩兵の桂宮警衛を免せられたる理由且つ彈正臺大巡察使の熊本へ出張せし情況等を聽く

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄〕

〔一　新錄　探索　報告〕

明治二年十一月於京都松本彦作藤村兵部權少丞と對話書取

十一月十七日兵部省藤村兵部權少丞に罷越承合候趣左之通

一桂御所御警衛此節被遊　御免許候子細之諸藩ニ比較いたし候得ハ熊本兵隊餘程增員ニ相成居候付此節御解放ニ而兵部省親兵と交替被　仰付候事

但桂御所之外所々御警衛茂段々親兵被差出候而兵部省茂空虛ニ相成此度御差登之因備兵隊を却而兵部省ニ被操入候事

一高瀨樣御警衛被爲　免候付御歸邑相成宜候哉と問合候處勿論宜候間御伺之御手數之上御發途ニ相成可然由申聞候事

一兵隊之義茂右親兵と交替相濟候ハヽ差下宜哉と問合候處勿論宜候間御伺之手數有之可然よし申聞候事

一御留守御警衛之四百人之内二小隊を東京に皇后宮御供奉ニ而罷越居閥員ニ相成居候得共是ハ此儘ニ而桂御所御警衛隊を却而被差下子細無之哉と相尋候處子細無之よし申聞候事

一熊本に先日ハ彈正臺ゟ大巡察使被差越候由之處此砌歸京相成候樣子ニ承知ハ無之哉と相尋候處歸京いたし候趣を何共不致承知尤全躰彈正臺當時在勤之役々ハ古勤　王偏固之輩而已ニ而或つまらぬ艸莽之徒に茂交候位之事ニ而彈正之儀ハ別而之重任正義廉直之輩屹と御精選無之候而ハ難相成候處右之通之次第ニ而既ニ先頃藤邨在勤中見込建言筋茂有之候得共致徹底兼致辭職候位之事ニ而彈正臺中之人物巡察罷越彼是皷勤いたし候共決而御勤無之樣有御座度熊本ニ而も如何樣之事抔申出候哉と相尋候間未詳成事ハ承知不致候得共横井平四郎正奸之儀抔聞合候哉ニ承知致候通及返答候處成程左樣ニ而可有之此一事大巡察熊本に罷越候大眼目ニ而其子細ハ平四郎及殺害候十津川浪士ハ可被誅處彈正臺ゟ大ニ拒平四郎を奸賊ニ付浪士可被誅筋ニ無之と頻ニ申募候付其奸賊と申證跡ハ何そ屹と有之候哉と東京ゟ御押懸り是と申候確證ハ無之事ニ付大ニ御返答ニ困百日之御猶豫願出内實ハ熊本に證跡取ニ罷下候趣意之由然ニ平四郎儀以前如何樣之邪說唱候儀有之候とも今日之御一新至候而ハ耳目替り正義ニ相成居候哉茂難測候處萬一舊說を取今日を邪ニ陷候樣之儀有之候而を難相濟其上平四郎茂　朝廷より被爲　召位階を賜朝臣ニ被仰付置候をのを浪士之身分ニ而及殺害候ハ　朝廷を不憚不屑之次第ニ而よしや奸物と見込候ハヽ當節言路茂御洞開之砌國害之筋建言之道茂有之候處左樣之事茂無之殺害およひ候ハ重疊不怪狀難遁筋ニ而假令ハ此節熊本に罷越確證を得來候ハヽ猶活路之御調ニ茂可相成哉ニ候得共誠ニつまらぬ次第と申事ニ而此節大巡察古閑何某と賊中ものハ藤村茂於彈正臺能素性を存居候をのゝよしニ而大ニ致冷笑前段之次第茂嘶仕候事

一鶯尾樣昨今大和十津川に御出張之由致傳承候付子細相尋候處全躰十津川浪士ハ偏土之山谷へ生立候頑固之もの共ニ而吉野帝以來勤　王之習俗ニ候得共夫も近年を二派黨を立一派を眞之勤王ニ而昨年來北越之役ニ茂大ニ忠勤を盡し軍功茂有之候付五千石賊鄉中御賞賜茂有之候由今一派を倫安苟且之徒ニ而黃幕之節ハ專會桑ニ相媚金錢ニ目くゞ候由ニ而口ニ勤　王を唱候得共銃器を取扱候儀を洋癖抔とて甚嫌傍ニを京都定住御所御番抔肩衣着用いたし候位を內望之流弊等ニ而更ニ役ニを立不申乍然二派ニ而も人員茂四千餘有之當時却而兵部省に屬十津川に出張所を不被設置候而ハ兎角ニ黨派混亂を生候付此節鶯尾樣御出張ニ相成候次第ニ而其外何そ子細茂無之彼横井を致殺害候茂右倫安徒ニ而前後何之辨茂無之一圖ニ洋癖と相惡候上之暴擧之由其黨類二十人計ハ于今獄中ニ罷在候由右等之徒を彈正臺ニ而ハ頻りニかほひ候茂全偏固之然らしむる所と內々藤村茂歎詰仕候事

一薩長土此節東京に兵隊四百人宛御呼出ニ相成候子細承合候處差而子細とてハ無之全徵兵ニ被爲召候譯ニ而積ル諸藩に順々交替被　仰付ニ而可有之どふて三藩ハ多年勤　王今日之時勢ニ茂立至候功業拔群ニ而　朝廷よりハ御依賴茂不一ト方次第ニ而仰願ハ御國茂三藩ト御一體ニ出御盡力被爲在候樣不及なゝら奉萬祈候而已ニ而鼠輩之管見ハ實ニ恐入候得共申サハ惣別御國之人物を諸藩ニ比候ハヽ拔群相登居可申是を却而一定之御運ニ相成候ハヽ三藩ハ腕押も出來申間敷とのミ存候事ニ而岩倉卿方も御國今一層御震立之事を大ニ御祈望之御沙汰茂御內々相伺候儀有之候とゝ〳〵懇話仕候事

十一月十七日　　松本彦作

十一月十七日東叡山寛永寺の僧徒謹慎を免せらる

〔東京より之御用狀扣〕

右持參之口上書貳通差出申候以上

十一月廿一日　　本覺院使僧　妙德院

口上覺

一去ル十七日於東京府山内僧侶謹慎御免被仰出候旨昨十八日於凌雲院申渡有之難有仕合奉存候依之萬端御禮早速參上可仕之處昨今繁雜罷在候付先不取敢以使僧此段御屆申上候以上

十一月　　公用人中

口上覺　　本覺院（東叡山執頭）

一野院儀今十八日自坊に引移申候間此段御屆申上候全御餘光故ゝ難有仕合ニ奉存候依之早速ニ茂爲御禮參上可仕筈之處謹慎中ニ付以使僧申上候以上

十一月十八日　　本覺院

十一月十九日我藩數寄屋橋門守衛番長の謹慎を解かる

〔東京より之御用狀扣〕

（十一月十九日唯兵部權大錄渡）

去ル五日數寄屋橋御門ニ而鹿兒島徵兵と行違之事件ニ付同日當番重立候者謹慎申付置候處被差免候條此段可相達候事

十一月　　兵部省

熊本藩

十一月十九日在東京本藩大參事佐々木與太郎等は維新の宏業豫期に反し綱紀皇張せすして各省意見を異にし諸藩猜疑して彼是互に相嫉み國家危機に瀕するの際薩長大に勢力を張らむとする狀あるを報し且つ我藩亦猜疑の中心となれるを以て因循苟且の弊を脱し藩政を改革し人才を登用し東西相應して朝廷輔翼の實効を顯すへしとの意を藩政府及在京都重役に通報す

〔御國東京往來狀扣〕

以手紙致啓達候　知事樣　新從四位樣　上々樣益御機嫌能被成御座奉恐悦候隨而當御屋敷別條無之候御用有之福田大助横田勘次引返早打ニ而差立候付如是御座候以上

十一月十九日　同廿六日着　　飯田熊之助　佐々木與太郎

横田治部右衛門殿（日付の下に同廿六日着とあるは京都にて記入せしものなるへし明治二年諸扣に、一東京表去ル十九日立同廿六日西京着之事、十一月廿七日、福田大助横田勘次御國許に發之事とあり）

大參事衆中

權大參事衆中

福田横田に被渡候稜書寫

稜書

一皇朝御恢復之秋ニ膺り　聖運興ニ至り兼于今　御規模不相立候付近日ニ至候而諸藩猜忌心を懷き表發ニ及し候儀ゝ

無之候得共實ニ危機不可測之勢有之然ニ御藩之儀今以倫安苟且朋黨不和之名を不脫誠ニ奉恐入候何卒彌以確乎タル方向屹立唯々　朝廷輔翼之御偉功相顯候樣就而今日猶更自他之交際上ニおゐて好惡愛憎之念悉く掃棄有之度事

一卽今素より須叟茂無爲ニ處すへき時節ニ有之間敷迅速大參事權大參事之內ニ御藩議御委任被爲在東下被命藩邸之御政體增々御更張儼然正道を被示高堅之精力を以從來御誠意徹底之場を切ニ湯望懇願之事

一此表藩邸詰事務職員都而相應之人物御選用勉勵無之候而ハ難相濟假令如何成事件觸來候共臨時之處置共機を不失火急之儀ハ見切を以此地限取扱藩邸出張之儀を本藩ニ被爲採東西一致融通愈膠漆ニ成し候樣早々御施行有之度事

右一通

飯田對話書取

一王政維新諸藩目を拭御彌業湯望之折柄綱記張皇ニ成る事を不得殆ト墜緒之憂不少夫故鹿兒島山口等之諸藩大兵を率經闕下ニ差置　皇朝之御倚賴ニ備へ不軌之徒隱拒ニ成る事を得さらしむる主意ニ候處　廟堂意のことく顯擧流通ニ至事を不得畢竟至密之謀儀動モすれハ漏洩ニたし不測之禍も釀可申哉之模樣ニ而要路之諸賢果決機發する事を不得顧る叉手依稀之形勢ニ相聞候由

但參預之內大久保氏意見確定候得ハ處分徹底ニたし候へ共聰明果斷ニ短ナル由添島氏日用萬端ニ應酬速ニハ候得共意見搖動大事ニ躊躇せさるを不得廣澤氏性質正直人望ハ有之候得共才幹ニ乏く孰茂當時之形勢一身擔當之場ニ至り兼當惑ニ相成居候由

此上ハ大藩一致　皇政を振起ニたし候外無之見込ニ候由

一當時之形勢輕擧り目張之規模無之一省々々各管見異り會計之着眼恐ハ豐上殺下ニ可有之歟諸省藩縣之官員信腹ニ至兼候由兵部省學校等異說紛冗約束する事を不得樣子ニ相聞候由

一安業四方ニ滂礴する事なく諸黎望覓之情絕而無之之を要するに萬民保全之躰用立兼徒善徒法ニ成行居候故歟治亂分岐之樞要此時ニ係る歟其故ニ　勤王深志之藩獅子奮迅盡徹之擧意ニ基キ藩中租稅を寬し萬民保全之柱礎を立斎財を鄙吝せすして精忠を罄し候樣有之度今綱世接俗之陋に躊躇いたし候ハヽ理勢陵夷之歎ニ至らん歟

一諸藩猜疑之說紛々被嫉我忌反復相因とキハ禍機益深く天下危ニ至る智者を待すして知るゑし願曰ハ紛緒萬端皆ヌ解接るニ義を以し交ニ諒を盡三四之大藩戮力　皇朝之　嘉運を企望ニたし度との事

右一通

高山秋藏ヶ差出書取寫

一薩兵今度出京之儀ハ去年來之軍功被賞御藏米等拜領被　仰付候御禮且當春諸侯一同　御召ニ相成候節奥方死去相成候砌ニ付被憚出方及延引候故右之譯を以出京ニ相成候事右ニ付而ハ多人數引卒出京ニ不相成而も何之支も無之事ニ候得共當秋殊薩長土肥四藩之兵隊朝廷御守衛之ため　御召相成居候間隅然之事ハ而二大隊被引連候由尤內實ハ　上之御腰くらつき候故外國御交際ニハ兎角靄昧たる事而已多ク有之故御腰元ヶ嚴重ニ有之度との意味ハ有候由

一薩之情實ハ一國を拋チ　皇國之ため盡力いたし候存意ニ候處是迄兵卒等之暴行よヽして却而諸人疑惑を受殊ニ肥藩なとには情意隔絕いたし候所ヶ吳楚思ひなし候條　皇國之一第惱ニ候間如何樣卒いたし情實相盡同心協力之場ニ至り候樣いたし度有志之面々憂念罷在候よし

十月

右一通

外交生ヶ差出候書付寫

一盛岡藩周旋方山本敬藏と申者十月十五日西京發早打ニ而東京へ參り廿日比着廿四五日比東京打立早ニ而西京へ罷越候由靜岡藩ト唱ニ西京御警衛諸藩に遊說いたし候趣ニ相聞候事

一肥藩或ハ佐竹久留米等專ら攘夷を稱へ此三藩依然といたし居候而ハ萬國梨信を結候儀も成兼候由英國聞込如何樣卒埒付候樣との主意ニ而鹿兒島へ新製小銃貳百挺大炮七門差贈候由

一肥藩表ニ正義を唱內實佐幕之念。絕　朝旨を順奉いたし不申夷人と爭擾を引起共亂ニ乘し爲る事あらんとキ眞意之山中唱早ク御武斷管轄四分之一被減候樣との儀一二之大藩ヶ筑ニ內談いたし候處筑ハ不同意ニ有之候付右一二之藩筑と

快を挾ミ居候由

右樣之徇說茂專ら有之追々外交生より申達候事

十一月十九日膽澤縣大參事安場一平東京より書を酒田縣知事津田山三郎に與へ上京の用件を告け且つ熊本藩廳改革の密議あることを報す

〔津田家文書〕

當境之事情不及多言只々暴徒を恐ると聚倫（歛聚）スルの二ツニテ此大病根ヲ裁斷セスシテハ百方ノ治方渾テ益ニ立申間敷

熊本モ此節ハ治道之先鋒ノ覺悟ニ御座候與太郎殿方も一書被托候間差出申候

從東京一書奉敬呈候逐日寒威相募申候處愈倍御安泰可被爲成御勤奉拜喜候福島御分襟後十四日御着縣之段之過日於江刺治所國分より承知仕御書翰を茂拜見爲仕候間彼是多少之御配意之程奉想像取ノ〳〵御噂申上候事ニ御座候私儀茂取締之藩ノ〳〵談合等ニ而兩三日延途ニ罷成十七日ニ水澤へ着廿日野田大廿一日知事着縣ニ而爾來碌々相勤居申候乍慮外御放慮被爲成被下候樣奉願候彼表一通之事情ハ近年之不作且土地人民之模樣別帋草案之通ニ而民部大藏兩省之率引ゟ被免候半者縣札取立等如何樣とも救民之策御座候得共中ノ〳〵發途前御咄合之筋ニも運兼既ニ江刺ニ而ハ手形振出しも有之候得とも知事已下官員未々迄縣札之趣意柄飽迄承知不仕候而ハ利を謀テ却而大害を生し可申者必然と相考へ國分へも相談し先月十八日迄晝夜共々取調御救助願出候事ニ衆議一決十九日方早急上途仕候別紙御採用ニ相成兼候ハヽ縣札願取候見詰メニて罷上候處大藏省ニ而ハ中〳〵六ヶ敷遂ニ縣札迄被差留候ニ付尙事情精〳〵陳述租稅其儘取拂之上不足米三千石代金拜借願濟ニ相成今明日ニ差立候筈ニ御座候尤右丈ニ而之迚も引足不申候得共山林一切剪伐御委任ニ相成申候間横濱へ揃取相立材木伐出之手段ニ而見込通り被行候ハヽ兩三年之內ニて相應ニ富饒之基相立可申奉存候御許之御模樣と兼申〳〵之貧縣市在共通用ハ南部鐵立之四文錢迄ニ而五十兩を集候得ハ拾駄ニ相成候間萬端御賢察可被下候

一熊本之御模樣如何哉と案勞罷上見申候處岩男作左衛門到着引續與太郎殿（將監也佐々木ノ本姓ニ復ス）再上ニ相成妄用仙太郎別紙持參ニ付先御根本上ハ近來之御好都合先ハ躍歪仕候事ニ御座候幸私上り合何方も大悅何事も無洩相談ニ相成候田も十分之差入り岩男江口一同十分ニ咄合も出來申候彼彼輩之事も與太郎殿現在上ニ而見得ニ相成莊村紙面之第一等ハ六ヶ敷候得共此許之御模樣ニ應し臨機之所置も御委任ニ相成居申候間此節ハ十分ニ乘出ニ相成候咄合ニ而條岩兩公大久保參議あたりへも公然と乘込ニ相成申筈ニ御座候素方鮫島に段々情實相通し置申候間此節ハ十分之咄ニも至り可申此許之形勢與太郎殿施迄呑込之上急速歸藩第一等之英斷を被施候心決申〳〵感心之事已ニ御座候日夜之多忙何分明日之御便ニ差臨右迄早々拜呈仕候頓首再拜

十一月十九日　　安場一平

山三郎樣

玉机下

尙々時下折角御愛重奉祈候出立前ハ萬事不一方御配意ニ相成深々辱々奉多謝候渡邊列一統へ別段屆キ兼申候間乍憚宜敷〳〵奉願候膽澤官員中も折角盡力野田祖父江大ニ御用ニ相立御安心可被下候素未タ折合と申埒ニハ至り不申候得共官員中も相應之人物集り可也ニ運ハ付キ可申仙藩之當政今日之大幸ニ御座候何も後雁と早略仕候再上

十一月某日洋銀相場沸騰し支那人我一分銀を洋銀に改鑄して暴利を貪る者ありと傳ふるものあり

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄探索報告〕

公用司より廻來　長谷川六右衛門書取

明治二年

明治二年十一月中発出板横濱新聞（抄略）

洋銀相場沸騰セ支那人日本之一分銀ヲ買求メ洋銀ニ吹直シ持渡る者有之一分銀三個ヲ以洋銀一枚ヲ鑄作セ方今之相場ヨテハ一分銀一万兩ニ而一万三千三百兩ニ宛而洋銀を作るへし甚惡むへき所爲と云可

十一月廿二日細川利永京都を發し歸邑の途に就く

〔御在京御在府御在國共記錄〕

十一月廿二日

（前略）

一高瀬從五位樣今日御發足ニ付當秋御着京之節之御見合を以左之通被進候儀咄合相濟宗村昨日持參有之

鯛　一折

十一月廿五日我藩藩士の祿制を改革し兵員兵質の規則を定む

〔明治二年觸狀控〕

一十一月廿五日左之通

藩政御改革之儀從　朝廷被　仰出之趣有之候付先般御直書を以委細被遊御示諭候通候處家祿之儀現石十分之一相定藩士俸祿茂適宜可致改革旨御沙汰有之候付而者御手許之儀此節非常之御省略被爲在候依之御家中所務高之儀ハ從來少手取之末猶又被減候儀深御苦慮被思食候得共今日　朝廷御一新之御趣意御猶豫難相成候間御家中に被下置候御知行之名目被差止支配地として是迄通御預被置所務高之儀ハ向後一万石以上四ツ物成十分一を家祿ニ被定其以下貳百五拾石迄相應之差等を加貳百石以下ゑ是迄通被差置孰茂俵數ニ直シ被下置餘分ハ其儘養兵料として被附置候間別紙表面之通祿高ニ應し兵員差出候共又ハ兵賦差出候共銘々之望次第不苦候則兵員兵賦之規則左之通

一兵員差出之向者可成强壯之者を精選し十七歳以上四十五歳以下差出可申候身體之强弱藝之精粗練兵場御目附并組役等より及見分若現實御用ニ立兼候見込有之人柄ゑ兵員解放別ニ相應之人柄を選差出可申候

一現兵難差出而々者養兵料之内より兵賦壹人前五石完御取立餘分ハ先ツ其儘被附置候尤三百五拾石以下ハ現兵難差出候ハヽ兵賦下付紙之通御取立有之筈候下付札　三百五拾石　三石五斗、　三百石　貳石五斗、　貳百五拾石　壹石五斗

一兵員備置候而も病中故障等ニ而難相勤跡人柄六十日を限差出不申候得者期限迦候月より兵賦御引立之筈候

一兵員兵賦兩樣共當年中取完居出可申候

一步繰稽古之度數隊列編制等之儀ハ追而軍備局より可申達候

右之通被　仰出候條家祿之儀。内たりとも彌以節儉いたし專ら富强之筋心を用藩屏之御職掌相立候樣心懸可申候此段解支配方にも精々可被相示候以上

十一月廿四日

右之趣支配方帳口々々に及達候事

舊祿	新祿	兵員	奉行所
二百五十石	百二十二俵	一人	六百五十石
三百石	百三十九俵	一人	七百石
三百五十石	百五十二俵	一人	七百五十石
四百石	百六十四俵	一人	八百五十石
四百五十石	百七十七俵	一人	九百石
五百石	百八十八俵	二人	九百五十石
五百五十石	二百六俵	二人	千石
六百石	二百二十三俵	二人	千五十石

舊祿	新祿	兵員	奉行所
二百三十九俵	二人	六百五十石	
二百五十六俵	三人	七百石	
二百七十二俵	三人	七百五十石	
二百八十八俵	三人	八百石	
三百四俵	四人	八百五十石	
三百二十一俵	四人	九百石	
三百三十五俵	四人	九百五十石	
三百五十俵	五人	千石	
三百六十五俵	五人	千五十石	

千百石	三百七十九俵五人	三千石	七百七十三俵	二十四人
千百五十石	三百九十四俵六人	三千二百石	七百九十九俵	二十六人
千二百石	四百八俵六人	三千五百石	八百三十四俵	三十人
千三百石	四百三十五俵七人	三千八百石	八百六十三俵	三十四人
千三百五十石	四百四十九俵七人	四千石	八百八十俵	三十七人
千四百石	四百六十二俵七人	四千五百石	九百十五俵	四十四人
千五百石	四百八十七俵八人	四千七百五十石	九百二十八俵	四十八人
千六百石	五百十二俵九人	五千石	九百四十俵	五十人
千七百石	五百三十六俵十人	六千石	九百七十一俵	六十人
千九百石	五百八十一俵十二人	万石	千百四十三俵	百人
二千石	六百二俵十三人	一万五千石	千七百十四俵	百五十人
二千三百石	六百六十一俵十六人	一万八千五百石	二千百十四俵	百八十五人
二千四百石	六百七十九俵十七人	三万石	三千四百廿八俵	三百人
二千七百石	七百二十九俵二十人			

十一月廿五日伊達宗敦、仙臺藩知事伊達宗基の後見を命せらる

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄 新錄探索報告〕

仙臺藩知事伊達宗基幼年ニ付其方へ後見被　仰付候間乾度藩職ヲ可盡旨　御沙汰候事

伊達宗敦

十一月廿五日

十一月廿六日本藩時勢に鑑み藩士の武備充實を期し從來家中に貸下けたる年賦金を捨與し爾後家中及ひ市在諸職人等への貸與金を停止する旨を達す

〔明治二年 觸狀控〕

太政官

十一月廿六日左之通

近年非常之時勢ニ隨年々莫太之御物入差湊御借財高彌ヶ上相嵩會計筋必至度御差支相成此儘被押移候而之富强之御趣意茂終ニ貫徹之場ニ至兼可申哉依之會計筋上下一新向後之基礎を被定武備充實之効驗相顯候樣との思食を以御家中之面々御本方諸拜借諸品代外ハ一切被捨下向後拜借被差止候儀共別紙之通被　仰付候間彌以質素節儉ニ基キ御難題筋等聊不奉願樣一統可及達旨御用番被申聞候條左樣被相心得夫々通達支配方に茂可被達候以上

十一月　　少參事

覺

一御家中御本方拜借年賦惣而被捨下候事

一用心金殘等現上納出來兼手取米等ゟ御取立被差延置候分ハ御取立被仰付候事

（本頁頭付紙）本文御取立年內手數掛兼候分ハ來春殘米ゟ御取立之筈候事

一炮器並軍服代等年賦御取立之當年分疊置被仰付候事

一諸與拜借右同斷

一向後旅中病炎盜難ニ限除長官長手許ニ而取扱候而も難及力分迄御國着之上一同現上納を以拜借被濟下其餘地旅ニ而之諸拜借一切被差止候事

一在中宿驛火災其外市在諸職人御用聞御用代日當錢拜借前錢渡一切被差止候事

右之通被究置候事

十一月

十一月廿六日觸

右之趣支配方帳口々々に及達候事

十一月廿六日曉賊あり横濱なる英商館を襲ひ英人ホーイを殺し物を奪ひて逃亡す

〔明治三年 觸帳扣〕

去二十六日曉第二字比横濱居留地廿番商館に賊奴兩人刀を帶シ押入留守番英人ホーイを切害シホーイ小使千代吉ヲ縛置同人所持之品々奪取逃去候右之者共何ぞに潜伏も難計ニ付府藩縣ニおゐて管轄中嚴敷探索を遂見當次第召捕可申候事

但賊奴面体衣類等ハ闇夜ニ而不相分言舌ハ關東言葉ゝ申事

奪取候品々

一藍茶三筋立縞袷　一黑羅紗筒袍　一淺黄木綿ニ而革色之裏付候股引　一紺足袋　一白足袋　一腹懸隱シニ入置候一分銀三兩（一つ書きの品々原書横に列記しあり）

右之通候事

十一月

〔仝書〕　　民部省

人相書

東京淺草出産

喜八幹　清吉

一年齢二十三四歳位

一丈ヶ高キ方

一色淺黑キ方

一丸顔

一眼大キク右眼ノ下ニ一寸二分程之疵有之

一背中ニ武者ノ彫物有之由

一外常休

右昨年己十一月二十五日夜英商ホーイヲ及殺害逃去候者之由今以探索不行屆ニ付外國へ對シ候テ不都合之儀候間府藩縣ニ於テ嚴重探索ヲ遂捕獲候旨此段相達候也

庚午三月

十一月廿七日鳥取藩は北海道に於て開拓に從事せむことを請願す尋て後志國島牧郡の一部を支配せしめらる

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄 新錄探索報告〕

北海道開拓之儀ニ付先達而　御沙汰之趣之御座候ニ付於鳥取藩開拓仕度奉存候間相應之土地御渡シ被　仰付候樣仕度此段奉願候以上

十一月廿七日　　鳥取藩

辨官　御役所　　鳥取藩

後志國

島牧郡之内會所元ゟ南之方シツキ境迄

右支配ニ被仰付候事

十一月　　太政官

十一月廿八日我藩の數寄屋橋門警衛を免し馬場先門警衛の古河藩と交代を命ぜらる

〔東京より之御用狀扣〕

（十一月廿八日省擧馬場正助筆）

數寄屋橋御門警衛差免更ニ馬場先御門警衛申付候事　　熊本藩

但古河藩と可致交代事

十一月　　兵部省

〔御國東京往來狀扣〕

（十一月廿八日附佐々木大參事飯田熊之助より神山源之助及大參事櫃大參事宛壁書の一節）　　山路太左衛門

右者數寄屋橋御門警衛被　仰付置候處右御門警衛之儀被差免更ニ馬場先御門警衛被　仰付古河藩と交代可致旨今日兵部省ゟ御達有之候付直ニ及其達候

十一月廿八日我藩兵四百人分二月より九月までの食料を支給せらる

〔京都並東京鶴崎長崎返達御用狀扣〕

（正月十日宗村よりの内）

（前略）去十一月廿八日御同所（兵部省）より隊長御呼出ニ付中野彦右衛門罷出候處別紙書取ニ金九千八百六拾兩と錢六百文爲替手形御渡ニ付直ニ會計局ニ相納候由御座候以上

二百十六人二月廿六日着九月卅日迄二百十一日分金五千六百九十七兩也

百十人三月廿日着九月卅日迄百八十七日分金二千六百十二兩一分貳朱ト錢百四拾八文

七十四人四月十二日着九月卅日迄百六十五日分金千五百五十兩貳歩二朱ト錢四百四拾八文

壹人ニ付六合六百文平均永百廿五文ニテ

右總計

金九千八百六十兩ト錢六百文　　熊本藩四百人

十一月廿八日仙臺藩老臣三好監物の死節を追賞せらる

〔明治元年辰正月より十二月迄　新錄探索報告〕　　伊達仙臺藩知事

共藩士故三好監物儀別紙之通　御沙汰ニ相成候條於其藩之手厚ク祭祀ヲ營ミ其忠節ヲ表旌シ候樣可被致候事　　太政官

十一月　　仙臺藩士故三好監物

兼而勤　王之大義ヲ固守シ賊論沸騰中ニ特立シ反正之策議ヲ盡候處奸黨ニ被制屈竟ニ及屠腹殊ニ臨終之始末等逐一達叡聞其忠節深ク御悼惜被爲在候依之爲祭資金目錄之通下賜候事　　太政官

十一月

一金貳百兩也

明治二年

〔防長回天史第六編下〕

（明治二年多期ノ大勢抄略）

前月（十一月）二十八日仙臺藩三好清房（監物）ノ死節ヲ賞シ祭祀金ヲ賜ヒ知事伊達宗基ニ命シ之ヲ旌表セシメ此月（十二月）十三日天童藩吉田守隆（大八）ノ死節ヲ賞スルコト三好清房ノ例ニ同シ

十一月廿九日本藩吉田如雪（舊名鮫太郎）に北海道支配地開拓用懸を命す

〔御國東京往來狀扣〕

（十二月九日附藩政府ヨリ東京京都詰重役宛書面の一節）

吉田如雪

右者蝦夷御支配地開拓御用懸被　仰付旨
先月廿九日及達候

十一月晦日本藩宮川小源太營繕司知事を命せらる

〔京都大坂諸扣〕

宮川小源太

十一月晦日御達

治河御用中營繕司知事被仰付候事

十一月晦日松平容保の子慶三郎に支配地（南斗）下賜せられたるを以て嘗て和歌山藩に保管せしめられたる其家族を同家へ引渡すへく令達せらる

〔一明治元年辰正月ヨリ十二月迄　新錄探索報告〕

十一月晦日御達

和歌山藩

今般松平家名慶三郎に被　仰付支配地被下候ニ付而者先般御預相成居候婦女子一同同家に引渡可申此段相達候事

兵部省

右之通ニ候得共元會津藩士未謹慎中ニも有之候ニ付被免之上可引渡との事

十一月某日松代藩疲弊につき金拾萬兩を貸與せらる

〔一明治元年辰正月ヨリ十二月迄　新錄探索報告〕

松代藩當今疲弊ニ付藩政難相立程之事情を以　朝廷に歎願被致候處金子拾万兩拜借被　仰付候事

（右報告者不明、本文の前後に十一月末の記事あり蓋し此れも其頃の事なるへし）

十一月某日膽澤縣大參事安場一平東京に於て廟堂諸藩の情勢を探知し我藩の重職に報告す

〔一明治元年辰正月ヨリ十二月迄　新錄探索報告〕

安場一平聞取之趣書取寫

一近頃　朝廷之御模樣先一躰之靜謐ゝ而是と申程表發致候事件ゝ無之候得共大臣以下議參之間誰一人天下を擔當ニ致候人物無之躰ニ相見只日日前觸來候事件を被取扱候迄ニ而是と申政績相見不申只何とふく因循之躰ニ相成申候乍去在朝之人多クハ是に而善シト心得候者ゝ無之大概衆評を承り候ニ只今分ゝ而ゝ如何之御運ニ相成可申哉と氣遣居候者多分御座候然ニ身ニ引受候人物無之ハ必竟暴激之餘焰いまた絶に不申内外相應じ候處有之或ハ暗殺之勢をなし或ハ藩々を離間シ人々を疑貳せしむる抔之策を以終ニ畏縮を生せしめ如是之光景と相成申候既ニ先達而御藩と薩藩との間ニ浮説を唱候通之事ニ而御座候薩藩兵隊差登せ候茂必竟是等を鎮壓之模樣ニ御座候有志之藩茂相應じ候藩無之處ゟ先機會を相待候躰ニ御座候

一長薩確執と風評茂有之候得共是と申確證承り不申是又彼離間策歟と相考申候

右御問合ニ付見聞仕候儘妄ニ書認差出申候實否御取捨可被下候此他少々之事件ゑ略仕候以上

十一月

十一月某日彈正少忠山田信道十郎刺客に襲はれたる中辨江藤新平佐賀人の不覺を彈劾す

〔男爵山田家文書〕

江藤中辨彈劾書

今般江藤中辨御所置之儀ニ付テハ兼テ臺中ヨリ建議之次第モ有之候處御採用難相成段御沙汰有之殊ニ右大臣殿大納言殿信道ヲ被爲召候節モ反覆辨論仕候得共其場之顚末巨細被仰聞且又不被爲得止御内情トモ懇々御說諭ヲ蒙リ奉リ殆ト迷昧恐縮仕候乍併退テ猶又熟考仕候處何分逐一奉敬承候儀ニ至リ兼再應不顧憚書取ヲ以テ言上仕候抑彈臺之儀者恐多モ　主上之御耳目ニ代リ奉テ執法守律風俗ヲ肅齊シ非違ヲ糺彈スルノ大權ヲ任シ置レタル事ナレハ苟モ非違ヲ搜索シテ申立候事件ハ　廟堂ニモ決テ等閑ニ打棄サセ給フヘキ譯ニ無之況ヤ不被爲得止ノ御内情ナトニテ臺法ヲ被挫候樣之儀萬々有之間敷事ニ候得者今度臺中之議論ト中辨申譯ト御照合自然中辨之言條理ヲ得テ臺議當ヲ失候ハヽ其責臺ニアリ臺議正ヲ得テ中辨之言當ヲ失候ハヽ御責制有之度何レ條理ハ一ニ歸シ候譯ニテ判然タル御所置奉仰願候此節之義其事小ナルカ如シト雖モ其關ル處極テ大ナリ仰惟我　祖宗尙武之遺訓ヲ垂レ給ヒ　寶祚　神器之一ニ被爲置其威靈赫烈今更贅言ニ不及通ニテ世々奉承諗ニモ佩刀ハ武士ノ魂ト申シ習シ是ヲ遺棄スルハ士道第一ノ瑕瑾トス法ヲ以テ糺セハ屠腹ニ當或ハ廢シテ庶人ト爲ス如是而後始テ名節廉恥ノ風振起テ國之本根賴テ以テ立ヘシ德川氏末年此道ニ反シ本ヲ遺シ末ニ奢セ名節廉恥地ヲ拂テ落チ父兄ノ彎金錢ヲ以テ借フニ不是故ニ主家ノ傾頹ヲ見ルヿ路人ヨリ甚シ當時其弊習未全改加之賜刀ノ論サヘ有之殷鑒不遠誠以可懼可戒之時ニ候得ハ是非トモ中辨佩刀ヲ棄遁逃致候恇怯未練ノ進退卽チ前件屠腹ニ當風俗ヲ磨勵スヘキノ處情詭聊可恕モノ有之候得者非常之御宥典ヲ以テ御免職相成度如何ニ中辨申立ノ通胴脈ヲ被斷破血致シ刀ヲ取ルノ氣力竭果候トモ猶處ニ立歸候氣力有之刀ヲ取ルヿ不能譯ハ決テ無之大巡察點檢之次第モ腕先二寸餘ノ突傷至テ淺手ニテ聊氣力モ勞レ居候樣子モ無之段申立候左スレハ全ク長縮狼狽直ニ遁走致候ニ相違無之强辨飾辭彼是申シ僞リ候儀顯然ノ事ニ候假令片腕切リ落サレ實ニ難澁ニ及候ヒ宿所ニ立歸ル程ノ氣力有之上之決テ申譯難相立宜敷自ラ引咎辭官其責ヲ待ヘキ處豈計ンヤ僅二三寸ノ薄手ニ周章狼狽佩刀迄モ打棄遁歸其刀ハ辻番所ニ拾ヒ取ラレ其後使ヲ以テ貰ヒ受候儀實以士道忘却不躰裁之所業ニ及聊自反慚懼之色ナク端然自得奉職罷在候ハ名節廉恥拂地候人休ニテ　廟堂亦其儘樞要ノ地位ニ被差置候テハ萬一向後官員中白書暴人ニ對シ剛强敵スル能ズトテ佩刀ヲ棄遁走リ笑ヲ衆庶ニ取リ自反慚愧ノ色ナク自言我戰テ腕ヲ傷ク不得止刀ヲ棄タリトテ厚顏自若奉職致居候ハヽ如何御所置可被爲在哉其儘御責罰無之時ハ衆謗喋々不可止　朝憲何ヲ以テ立ヲ得ン廉恥何ヲ以勵スヲ得ン如シ又白晝衆謗ヲ招トテ其罪ヲ糺サレ候ハヽ是書夜ニヨリテ法ヲ異ニシ人ノ知ト不知トニ從テ罪ヲ定メ獨リ中辨ニ於テ偏私ノ御所置ニ相當益以不可然奉存候今ヤ紀綱更張法律改正信賞必罰大ニ信義ヲ天下ニ示サセラルヘキ秋ニ當リ分毫ニテモ曖昧模稜ノ御所置有之候テハ勸善懲惡ノ道不相立天下人々猶豫疑懼シテ方向ヲ失候樣相成可申與ト不堪痛歎是信道反覆再三固執テ不奉　命ユエンナリ何卒此奏議ヲ刑部ニ御下シ有之彈劾スル處當ヲ失候ハヽ妄誕ノ罪斧鉞ヲ甘セン所言果シテ至當ナラハ法律ニ從テ速ニ其罪ヲ被正斷然御所置可被爲在將又何レトモ御評決不相成御採用難相成候ハヽ信道淺劣不肖ノ身ト雖モ臺諫ノ員ニ連リ　廟堂ノ御失體ト奉存ナガラ匡救ノ力難及此儘打過候テハ天下萬世法ヲ權貴ニ屈ケ阿從ノ譏メ不可逃且又俯仰之間衷心實以テ慙愧仕候間早々御免職被　仰付度此段宜ク御　執奏奉仰願候誠惶誠恐頓首再拜

彈正少忠平信道

（編者曰右彈劾書日附不明なれとも左の二書に據りて仮りに此に掲載したり）

〔大日本人名辭書〕

江藤新平傳（抄略）

（前略）新平賞典祿百石ヲ賜ハリ中辨ニ任ス明治三年十一月廿日夜客アリ退朝ノ途ヲ窺ヒテ櫻田門内ニ要擊ス新平之ヲ（三八二ノ誤ナラン）

明治二年

拒キテ傷ヲ被ル盍シ佐賀藩士ノ改革ヲ好マサル者ノ爲ス所に係ると云ふ

〔明治三年探索書控〕

（公用方より廻し來、長谷川六右衛門書取（三年二月書取）の一節）

濱田縣一揆ノ巨魁ハ肥前ノ脱藩士ニ而江藤中辨殿殺害ヲ企シ黨類也此者煽動シテ一揆ヲ起サセタル趣也云々

十一月某日山口藩奇兵隊中津守幹太郎大野省三等豐後鶴崎に至り高田源兵に其の來たりて山口諸隊統轄の任に當らんことを請ふ高田之を說諭して受けす時に大樂源太郎亦藩の内訌を慨し門下生を出し九州各地の同志者に通謀せんと欲し書を鶴崎の毛利到に贈りて其の助力を請ふ

〔明治三年ヨリ探索書控〕

（明治三年三月藩廳の下問に對する答申書）

口上之覺

昨年來山口藩ゟ罷越候者之姓名并應接之模樣明細ニ可申旨奉畏候昨年十一月下旬之頃同藩士ゟ申津守幹太郎桑山誠一郎大野省三罷越方今海内海外可慨嘆憂思之事件荒々噺御座候委細者高田源兵衛承居候由噺終而拙筆懇望ニ付幸認置三四葉御座候間一葉宛遣申候右三葉之外於私者應接仕不申候以上

三月廿三日　毛利到判

奥村軍記殿

覺

山口藩人　津守幹太郎　大野省三　桑山誠一郎

右三人霜月比罷越申候趣ハ今度於京都大村益次郎闇殺ニ逢候次第其根元者何方より起候哉若承知茂致候半哉と相尋候付一向存不申候得共御同藩人御加りニ相成居候間御藩こそ御亭主と相考候ゝ申向候成程神城直人ゝ申者豐人歸國ハ゛し右之始末詳出候而牢者仕候處先達而牢中ニ而被殺姓名を變し梟首ニ相成候由相噺申候右之者申出之樣子ハ薩州より手を入不申哉と大ニ疑惑致候由相噺候間如何之譯を以薩とハ相察候哉と相尋候處其故ハ一昨年賊徒箱館ニ寄集候節於東京大村益次郎ゟ出張被命候處大村御斷申上候趣意ハ日本國中之戰爭ニ候得者内輪之事件故如何樣とも苦心仕り治可申筈ニ候得共佛人加り居候得者外國ニ掛候事ニ付先外國との戰爭ニ相成候間當御時節外國との戰者致し候見込無御座候間出張之分御斷申上候との事ニ御座候就ハ兵部省ニも居ながら右樣相心得候而ハ　皇威何時歟相濟キ可申哉と薩州人某於東京種々申觸候段承及候間必薩人之謀計ニ出候賊と察候次第ニ御座候其上以前より御案内ニ茂候通弊藩之儀ハ登攀之二ツを以數度國難も凌キ候程之事ニ而下民迄ニ其誠意貫居候然ルを先達而薩州より東京ゟ罷登候兵隊被髪脱刀との事ニ寄薩ニ劣さる樣ニとて我兵隊をも被髪脱刀いたし候樣相達候間此末之治り如何と案勞中ニも沸騰難計候尤常備隊二千五百人之被髪脱刀之事ハ　朝廷より御沙汰之趣ニ因而申付候との事ニ候間左スレハ防長一藩ニ限り候儀ニ而茂右之間敷と相心得御内々此邊之處問合仕度罷越候との趣ニ御座候事

三月　高田源兵衛

〔小森家文書〕

明治四年五月刑局根取廣田貞人東京エ參達引取書の内抄略　熊本藩士族　高田源兵

源兵備鶴崎兵隊但方として被差越置同所有修館に相詰居候内去々己年十月（十一月なり）と覺長州奇兵隊脱人品川（一ニ大野ト有）省三津守閑（一ニ幹ト有）太郎外一人名前失念三人參り同隊被髪脱刀を忌嫌專　尊攘之論を主張いたし候處より常備隊と申分差發候趣且右者畢竟諸隊惣轄之任ニ當候者無之處より之儀等委敷噺聞夫と廟ニ辭ニ之發不申候得共源兵を山口に誘參り奇兵隊之世話いたし貰申度含之噺いたし候得共素より承知いたし候樣茂無之何樣筋を踏而連不申候得之不義ニ陷り可申と精々及說得差返（下略）

（頭書）　本文之通申出ニ候へ共實ハ源兵ヲ奇兵隊ノ長ニ押立テ可申トノ申談

〔鶴崎毛利家文書〕

拜呈久不能存問函丈伏惟萬福生晩秋念九蒙嚴譴諸生の教授を禁せられ山口近村に謫居被仰付于今瓦全罷在候御憫笑可被下候委細の情實は此生より御聞知願上候此生今般九州遊歷仕候に付ては萬端御指揮與々も願ひ奉候學術は空疎に御座候得共數々血戰を經候男子にて膽氣は屹度有之候何分疎漏の事無之樣ニ極躬盡力仕候樣幾重々々奉願候此生冨々の志の在ル處は乍御面倒一々御聽可被下候國中の風景不堪泣血之至候申上も疎に御座候得共何卒々々御大策御立不被下ては皇國之爲皇國未可知也此生先年拜趨の土屋生と至て懇意に御座候土屋生の事も同人より可申上候同行之士何も有志に御座候先は御賴旁譴謫中走筆候時下向寒爲邦家御自愛第一奉存候餘は不及喋々不宣電覽後乞付丙丁兒

山口生拜

呈冷咲老先生
座下

（編者曰、右大樂源太郎書翰中に蒙嚴譴謫居被仰付とあるは蓋し大村刺客に連坐せられしなるへし左の文を參照すへし）

〔明治三年ヨリ探索書控、嘉永年間以降記錄〕

（前案人某鶴崎に來たりての談話一節）

一全體馬關一舉以來數戰場ヲ經候而今日ニ至り候處其數戰場ヲ經候諸隊にゑ格別之事茂無之只上ニ擧り事ヲ執り候者ハ當世派之洋癖家計りニ而有之候故下ニ而ハ憚謹ニ堪兼候處より大村ヲ切り候末段々京師ニ而捕レ其中長人壹人ハ姫島とか申處に潛伏致居候處右大村ヲ切り候長人者多クは之儒者大樂之門人ニ而有之候故大村一件ハ右之大樂内々屈押致タロウト申候處よりシテ右大樂之重キ御咎有之候間姫島とかに潛伏致し居候者右之樣子承り直ニ歸國致し自分政府に訴へ大村ヲ切り候中之壹人ニ而有之候か大樂抔者決而有大村一件ニハ預リ不申段申出大村罪狀數ヶ條枚舉致し甚激論致し候由右ニ付政府當世派之役人共右之者ヲ公然とハ不殺シテ姓名ヲ變シ殺候由是又此節諸隊憤激之一之由

十一月某日松本藩人内山總助穢多非人の待遇を改め百姓町人同等ならしめられむことを建白す

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄深索報告〕

一松本藩人内山總助建白文略御一新ニ付穢多非人人倫外ニ有之處以來改而革屋組織と唱替百姓町人同樣御取扱ニ被成下緣組等茂勝手次第御差免ニ相成候樣致度左候ハヽ是迄除地之場所茂百姓地並ニ租稅御取立相成候ハヽ莫太之御國益ニ可相成旦數十万ニ可及旨

（右報告者不明、諸件列記の内本文の前に十一月末の事あり誤し註れも亦其頃のことならむ）

十二月朔日細川行貞御留守警衛大原口警衛共に免せられ更に細川利永に歸邑を命せらる

〔明治二年御留守日記〕

大原口警衛差免候事　　細川從五位利永

十二月　　兵部省

御留守警衛差免候間歸邑可致候事　　細川從五位利永

十二月（朔日）　　兵部省

明治二年

〔密書輯錄〕

自著子爵細川利永履歷大略

十二月朔日御留守中御警衛被免長々勤勞有之趣ヲ以テ兵隊五十名ヘ酒肴下賜

〔細川行具譜〕

十二月朔日御留守御警衛命セラレシ精兵五十名並ニ大原口關門御警衛免セラル

〔江戸京都來狀扣〕

從慶應二丙寅年正月至明治三年

（十二月十二日宗村嘉兵衛より藩政府へ報告の內）

一高瀨從五位樣大原口御警衛且　御留守御警衛被免候付而御書付寫二通　付札　本文同樣宇土樣ニ茂被免候由ニ御座候

十二月朔日若松縣知事四條隆平家族を携へ京都を發して岩代若松に赴任す

〔京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

四條樣
御家族
宗村加兵衛

右者一昨朔日京地御發途岩代國若松城ヲ御引越ニ相成候段弓矢八郎右衛門より爲知來申候以上

十二月三日

〔明治三年探索書控〕

府縣役員錄（抄出）

岩代國若松縣　高三十五萬七千七百石余　知事　四條從四位　大參事　島精一郎　少參事　中邨釆一

十二月某日朝鮮我國に對し禮を缺くを以て使節を派遣し之を質さむとの議あり

〔防長回天史第六編下〕

（明治二年冬期ノ大勢抄略）

當時又木戸ハ左ノ朝命十二月三日付ヲ蒙レリ

明春支那朝鮮使節可被差越候右者重大事件ニ付即今ヨリ交際規程古今斟酌爲ク取調可有之旨御內意候事

其頃朝鮮缺禮事件ハ識者間ノ一問題タリ木戸ハ之ニ關スル使節派遣ト朝權確立即チ薩長二藩ノ協心戮力ヲ以テ大ニ刷新ノ政ヲ行ヒ朝廷ノ基礎ヲ固クスヘキコトノ二ツヲ以テ當面ノ二大問題ト爲シ密ニ意見ヲ廟堂ニ上リシコトモアリ前揭ノ內命ハ蓋シ此等ニ起因セシナラン但シ此事ハ爾後軍情ノ推移ニ因リ終ニ實行ニ至ラズ

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄探索報告〕

朝鮮國事情（抄略）

朝鮮ニ而于今攘夷頻ニ致居候由英佛亞三國ニ而朝鮮を呑併セントノ志之虛朝鮮不屈常ニ勝を奪候由然處右三州夷內之爭論ニ而英佛合躰亞ハ攻掛リ居候事ノ由魯ハ朝鮮に左袒始終兵器彈藥を贈緩々朝ヲ呑ント謀居候而實ハ英佛と亞ノ戰爭モ魯ノ爲ニ相設候由右ノ事件對州ゟ言上ニ相成候付十二月始爲應接朝に使者被指向候佐田素一郎使節被仰付（久留米ノ人也）朝を諭シ攘夷を爲止廣ク交易を以テ和親ノ周旋致シ且朝ハ從來我應下ニテ數年朝貢モ致居候處此ノ近年者朝貢モ不致就而者以前之通朝貢爲致英佛ニ不被呑內ニ我カ先鞭ヲ取候含ニ御座候佐田應接歸國後ハ改テ勅使被差立其上不聞入朝貢モ不致節ハ豐公ノ偉典ニヨリ征討ノ　王師被差向處ニ御廟議相決候由ト云々

十二月三日我藩本年六月廿五日の令達に基き藩政改革調書を提出す

〔江戸京都來狀扣〕

從慶應二丙寅年正月至明治三年

十二月十六日着熊夷艦便より也

（前略）

一諸務御變革御局書去ル三日公用人を以　朝廷ニ御局相齊候右ニ付烏田次兵衛早打ニ而明日罷許差立候付如是御座候以上

十二月五日

大　參　事　藤　中　　飯田熊之助

權大參事　藤　中　　佐々木大參事

〔諸務變革調〕

口上書取

當六月　御降命御條目付而諸務變革之儀夫々取調候御別紙御達仕候通御座候然處更始之節思慮届兼萬一至仁普照之御旨趣ニ毫違いたし人心を失候樣有之候而者奉恐入候儀ニ付此末彼是損益實地得失を精々考議仕度此節之調御期限茂有之如何體ニ茂永久一定之場ニは至り兼候儀御座候間猶追而奉伺候儀可有御座奉存候段申付越候付此段言上書取相添奉差上候事

十二月

熊本藩

井上治部丞

已下御改革ハ佐々木與太郎持參於東京御帝田ニ相成候也

一從來支配地總高並現米總高　一冊　一公費用　一冊

一諸産物及諸稅數　一冊　一職制職員　一冊

官等表一折並書付一通添

一藩ニ兵卒員數且從前之藩並扶持米追居候高　一冊

一社寺領其外從前藩扶持米等追居候人員並高　一冊

一家藩並藩士給藩改革之書付　一冊

一支配地人口戸數　一冊

一家令家扶家從以下召仕候人員伺書添書共　一冊

右一袋入

一支配地總繪圖　二折

右之通差出申候以上

十月　熊本藩知事　細川韶邦

表紙上書ハ紙上薄子紙之内一篇冠別帳ニ出來耳張紙上書此通

從來支配地總高並現米總高　熊本藩知事

肥後之國總侵國之内

一高五拾四萬石

内

參萬五千石　末家　細川從五位稱永内分

參萬石　細川從五位行篤内分

込高新田高

一合壹拾四萬六千石六斗七合壹勺七才

明治二年

總高七拾八萬六千拾五石六斗七合壹勺七才

元治元年子年より明治元辰年迄五ヶ年平均現米總高

一合三拾萬四千八百參拾八石壹斗六舛四合四勺三才

免三ッ八分七朱八厘四毛七弗

右之通相座候以上

明治二年十月　熊本藩知事　細川韶邦

表紙上書ハ諸産物及諸稅數

熊本藩知事　細川韶邦

諸産物

一鹽

一紙

一貢

一茶

一炭

一蜜柑

一人參

一牛夏

一柴胡

一鹿茸

但本文諸産物ハ邊商之餘産ニ而官府より收稅いたし候品に

は無御座候

諸税歩

一米七萬三千三百六拾貳石六斗八舛貳合貳勺四才

一鹽千九百六拾五石四斗六舛貳合八勺六才

一鑪實五拾萬三千四百六拾九斤三合

一金壹千六百拾五兩壹歩

但年々不同に御座候

右之通御座候以上

明治二年十月　　熊本藩知事　細川韶邦

表紙上書也
公廨一箇年之費用

公廨一箇年之費用　　熊本藩知事　細川韶邦

一米壹拾九萬七千七百拾六石七斗九舛四合六勺

内

參萬五千九百八拾六石八斗九舛四合六勺

政廳民政會計刑法等諸局用度

壹萬六千四百八拾壹石　東西京邸中用度

參千五百四拾五石　大阪右同斷

五百石　長崎右同斷

六千九百七拾石　諸役員役料

參百八拾石　養老米

參萬八千七百參拾五石　軍備費用

貳千四百七拾七石九斗　文武並醫學館費用

五千五百七拾石　城郭及水利橋梁驛遞倉庫等營繕費用

五萬三千八百參拾九石　東西京御警衛等其他臨時費用

四萬壹百參拾壹石　連年出入總計臨事非常費用

不足分取賄候自他國債高參拾萬五千七拾石之内一箇年拂入分

四萬參千石　韶邦及其他家族地旅用度

右之通御座候也

明治二年十月　　熊本藩知事　細川韶邦

上ニ付札

本文四萬三千石ハ内家之用度茂孕居候得共從前入費之幅ニ係り候付取加置申候勿論向後支引合申筈に御座候

當藩職制之儀者當春御屆仕置候處今般猶又別冊之通改革仕旨等表相添御屆仕候職員之儀者未々附屬役ニ至候而ハ多分增員茂有之候間沙汰改革取懸居申候此段御屆仕候以上

十月　　熊本藩知事　細川韶邦

別紙上書也
職制職員

熊本藩知事　細川韶邦

奉行所

神事堂

政事堂

大參事　四人　權大參事　五人

少參事　一人　權少參事　缺員

察政一致ノ旨ヲ明ニシ一新ノ政體ヲ遵奉シ一藩ニ施行スルコトヲ掌リ大小ノ事務與リ聽サルコトナシ

記室

幹事　二人　祿事　五人

書記　使卒

附屬役員　無定員臨事增減以下準之

公用司

公議人　一人　公用人　三人

祿事　一人　筆生

使卒　附屬役員

民政局

少參事　二人　權少參事　缺員

歲時ニ農業ヲ勸課シ租稅ヲ正シ力田孝悌ヲ激勵シ舊役ヲ均シ蒼稽ニ厚ク水旱ニ備ヘ商賈ノ生業ヲ敦クシ貴賤ノ日用ヲ辨シ利ヲ恣ニセス商法繼通セシメ僧尼ノ清規ヲ監察シ猥リニ堂宇ヲ構ヘ徒弟ヲ度スルコトヲ禁ス

祿事　五人　書記

使卒　附屬役員

司農

郡宰　十六人　郡監　三人

鄉長　村長

附屬役員

司商

市令　缺員　肆長

坊長　附屬役員

會計局

少參事　一人　權少參事　缺員

入ルヲ計テ出ルヲ制シ經費ヲ支度シ京攝東京及各處ノ運輸留滯ナク不虛ノ備ヲ厚クシ錢穀ノ大計怠慢セス役員廉謹精密ナランコトヲ要ス

主計　二人　祿事　五人

書記　使卒

附屬役員

倉庫司

祿事　五人　吏

筆生　附屬役員

貨幣司

録事　一人　吏

筆生

生産司

録事　二人　吏

使卒

軍務局

少參事　一人　權少參事　缺員

大ニ海陸ノ軍制ヲ興シ藩邸官舍ノ整理ヲ要因ニシテ兼職ヲ求メス要害ヲ慎ミ工匠ヲ聯シ土木ハ時務ヲ考ヘ適時ヲ審セサラシム

録事　三人　書記

使卒　附屬役員

武庫

長　一人　監　二人

録事　二人　筆生

使卒　附屬役員

藝樂司

長　二人　監　三人

録事　八人　吏

筆生　使卒

附屬役員

醫牧司

監　一人　吏

筆生　附屬役員

刑法局

少參事　一人　權少參事　缺員

藩野ヲ禁止シテ刑ナキヲ期スル比附シテ罰スル者ハ宜タ輕ニ從フヘシ死刑ニ處スル者ハ　廷奏シテ　裁斷ヲ御タ

録事　二人　書記

使卒　附屬役員

獄司

長　二人　監

氣間士

捕手　筆生

使卒

附屬役員

監官

監察　九人　監吏

大小ノ政令及ヒ人物ヲ粹温シテ知事ノ觀聽ヲ明ニスルコトヲ掌ル監吏ハ藩邸市井鄉邑ノ等別ナク十目ノ所視十指ノ所指ヲ探テ官吏ノ勤惰人物ノ淑慝ヲ審ニセンコトヲ要ス

文武館

教授　缺員　助教　一人

訓導　五人　學監　二人

文學諸師　武藝諸師

文武ハ藩士ノ常トイヘトモ雖新ノ休運ヲ知リ天下ノ事理ヲ明ニシテ才藝技藝各其所長ヲ成就センコトヲ要ス

録事　一人　吏

筆生　使卒

附屬役員

醫院

醫士司令　二人　醫學提舉　一人

醫學師　一人　醫學助教　一人

醫學監　二人　吏

使卒　附屬役員

兵曹

銃士隊

明治二年

大隊長　小隊長

指揮士

銃卒隊

大隊長　小隊長

指揮士

大砲隊

隊長　小隊長

指揮士

練兵場

監　教士

録事　筆生

別紙十等級

藩士兵卒員數

從前之祿並扶持米遺居候高共

熊本藩知事　細川韶邦

藩士兵卒總人數

一四萬一千四百五拾三人

内

弐千四百九拾六人　藩士

九千八百五拾三人　兵卒

壹萬千四百七拾七人　鄉兵

壹萬八千六百貳拾七人　四十六歳以上藩士兵卒並鄉兵

二八九

藩士兵卒從前之祿並扶持米等
一米壱拾萬參千壱百五拾壱石四斛五合

内

拾五萬千五百貳拾四石五斗五斛九合四勺

給祿

貳萬七千八石七斗

扶持米

壱萬三千貳百貳拾七石五斗

細川利永内分

壱萬千四百九拾石貳斗八斛五合六勺

細川行貞内分

右之通御座候以上

明治二年十月　熊本藩知事　細川韶邦

表紙上書也
社寺領其外從前祿扶持米等遣居候人員並高

熊本藩知事　細川韶邦

社寺領其外從前祿扶持米等遣居候人員並高
一米壱萬八百八拾六石五斗九斛四合三勺五才

内

七百七拾九石七斛八合壱勺九才

△付札合印

支配地並他所十九箇社

貳千三百九拾七石三斗貳斛四勺壱才

支配地並他所八十六箇寺

七千七百拾石壱斗九斛五合七勺五才

他所江從前祿扶持米等遣居候分

百五十七人

右之通御座候以上

明治二年十月

熊本藩知事　細川韶邦

△付札合印
支配地内判物受來候社寺無御座候

支配地現石十分之一家祿ニ定且士族之給祿適宜改革仕候樣御布令之旨奉畏則左之通

家祿

一現米參萬七千八百貳拾石餘

支配地現石十分之一

士族給祿

一同四百石　從前高萬石之面々物成十分一

同

一同百貳拾貳石餘　同千石之面々

同

一同貳拾九石　同百石之面々

右萬石以上者都而十分一ニ減石以下小祿ニ隨ヒ適宜差分を加一家之祿ニ定麗米ニ而給之其餘分者從前陪臣を兵隊編入等之扶持諸用度ニ充候樣相改申候此段御屆仕候以上

十月　熊本藩知事　細川韶邦

表紙上書也
支配地人口戸數

熊本藩知事　細川韶邦

支配地人口合
一七拾萬六千八百七人

内

參拾六萬千貳拾四人　男

參拾五萬五千七百八拾參人　女

支配地戸數合
一拾四萬八千八百五拾貳軒

内

貳萬參千九百參拾壱軒　藩士兵卒等

拾貳萬四千九百貳拾壱軒　農工商等

右之通御座候以上

明治二年十月　熊本藩知事　細川韶邦

今般内家之職制並召仕之人員取調奉伺候樣御沙汰之趣ニ付別紙之通相定右人員之内より家族共ニ茂分配召仕申度奉存候此段奉窺候以上

十月　熊本藩知事　細川韶邦

明治二年

内家職制人員

一家令　二人
一家扶　四人
一家從　六十人
但嫡子舍弟家族共ニ茂分配仕以下準之
一玄關取次役　五人
一茶酒　一人
一醫師　三人
一豪所役　一人
一裏方附役　八人
一裏方目附　八人
一廣敷番　十人
一錄事　二人
右之通御座候以上

十月　熊本藩知事　細川韶邦

高瀬より於東京御同之書付也
肥後高瀬藩士徒士兵卒員數並從前之扶持

一百六拾四人　藩士
一八拾九人　徒士
一百六拾參人　兵卒
合四百拾六人

右人員従前之縁扶持
合米六千七百六拾七石壹斗八舛
一社寺従前之縁扶持遣候者無御座候
右之通御座候以上
明治二巳巳十月　　従五位細川利永

一百五拾九人　藩士
一百参拾壹人　徒士
一百五拾九人　兵卒
（字セラレタル於熊本御屋敷之者付他肥後ノ士藩士徒士兵卒郷兵社寺員数並従前之縁扶持）

一百七拾五人　郷兵
合七百弍拾四人
右人数之内郷兵ヲ除キ従前之縁扶持
合米六千百弍拾參石壹斗六舛七合五勺四才
一拾五ヶ所　社寺
右社寺ニ遣置候従前之縁扶持米
合米百四拾石八舛七勺六才
右之通御座候以上
明治二巳巳年十月　　従五位細川行倫

十二月四日肥前國浦上の基督教徒六百餘人加賀へ移さる

〔一〕明治元年辰正月ヨリ十二月迄 新錄探素報告

去ル四日邪宗人數捕ゑ魁首六百人位運送之あと實ニ欣然之折しを稀成大事ニ而當縣役所ニて一首うゑた出し申候御笑覽可被下候

明治二年十二月朝日ヨリ日記略（著者不明）

四方山も皆白妙ゑふゑかしとけふふる雪は神乃御心

朝日

昨日ヨリ烈風雷雨ニテ天意人心悄々然ナリ朝昧爽ヨリ知事立山ニ出館此朝サ命シテ浦上等ノ邪徒七百餘人魁首ヲ召シテ出館セシム邪徒共ニ莊屋ノ宅ニ集リ嘆願シテ曰今般ノ御用ハ私共御國禁ヲ破リ異宗ヲ信向スルユヘ徒罪ニ片付ノ由内分承ルナリ自然左ナレハ家族共身仕舞モアレハ此三日ノ間日延ヘヲ仰付下サル丶樣幾重ニモ奉願ナリト申出ル莊屋ヨリ此旨申出ル館モ此迄極々秘シ置キ掛リ役兩三人ヨリ外他言モ是ナキニ已ニ浦上邪徒ニ内分知ラレル丶イカナル曲者アリヤト一同驚愕切齒殘懷ノ至リニ付更ニ別手段ヲ考ヘ談合致ス英佛ノ岡士某列國連名ノ書ヲ携ヘ館ニ馳セ來リ應接ヲ乞フ其文意ニ曰此度足下ノ從民所置ヲ中間ヨリ妨ルヲ希望スルニ非ス但シ文明開化ノ國ヨリ見レハ右宗徒ヲ殘酷ノ所置ナカラン丶ヲ庶希ノミト館其書翰ヲ受取リ應接ハ許サス佛ノ岡士曰明日英ノミニストル官姓名バークスヲ以テ應接スヘシト時刻ヲ約シテ歸レリ館内更ニ評議シテ浦上民ノ願ヲ許ス

夕刻余知事ヲ伺フ知事眼色血ヲ含ミ慨然トメ余ニ謂云余十月已來毎夜深更ヲ以テ密事ヲ談シ唯此ノ一擧ノ爲ニ苦心萬慮スル處豈計ランヤ奸魁此密事ヲ泄ス者アリテ事已ニ此ニ至ル唯決心一死アルノミ進テハ　朝命ヲ辱メ退テハ他人ニ對スルニ面目ナシト余曰何ノ處ヨリ密事ヲ泄スヤ知事曰加州ノ蒸氣艦兩三日前入港ノ處未タ官ニ屆ケサル内浦上ノ舟子豚油ヲ賣ル次テ加艦ノ舟人曰汝等速ニ用心スベシ我等汝ヲ積去ル舟ナリト浦上舟子大ニ驚キ歸テ衆人ニ告ル由ナリ嗚呼事ハ小人ヨリ泄ル丶ヲ通例ナレトモ實ニ殘念千万ナリト知事ノ切齒扼腕シバ〳〵火鉢ノフチヲ叩ク丶无數余モ不覺慨然流涕セリ

二日

朝昨日改心願ヲ出ス者百人餘ヲ歸ヘス此日其中數十人館ニ重テ來リテ昨日ノ改心セシハ本心ニ非スト白ス彼等ノ反復邪智官命ヲ輕蔑スル丶實ニ一刀寸斷スルモ其罪贖フニ足ラサレトモ知事深ク勘忍ノ深智ヨリ外寛仁ノ所置異人ニ示ス爲メ暫ク其請ヲ許ス此日二字ヨリ外務館ニ出張英ノミニストルト應接アリ渡邊彈正ト野村知事トナリ我知事ハユカス其應接別ニ記スト其大略取意

パークス曰基列士宗ハ萬國通信ノ法ナレハ其罪ニ非サル丶可知爾ルニ其宗徒ヲ徒罪ニ當ル丶過酷ト云ヘシ渡邊曰異宗ヲ禁スル我國法ナリ　朝命ヲ奉スルハ我等カ職分ナリ彼元ヨリ國禁ヲ犯ス故常法ヲ以テ刑セハ火刑モ爾ルヘキ處ナレ𪜈當分万國和親ニ對シ萬ニ寛仁ノ所置ヲ以テ徒罪ニ處スルナリ豈過酷ト云ヘケンヤ已ニ三四日ノ日延ヲ致ス丶

我等ノ寛仁無此上綏ルヿナリミニストル曰此宗徒ノヿ我万國ヨリ東京ノ長官先生ニ掛合ハヽ徒罪ニ及ブマジ渡邊曰東京掛合ハ我等ノ知ルヘキニ非ス我等唯奉命ヲ知ルノミト云切ルミニストル憤怒色ニ顯レ大ニ不平ノ樣子ナレ𪜈イカントモスルヿ不能此ニ於テ三日ノ後ハ必ス徒罪ニ行フヘキヿヲ申シキリテ皈レリ

此朝ハ筑後迄知事ノ命ニ奔走スル約アレ𪜈大事未決セサル故樺島小六君獨リ早逐ヲ以皈レリ知事書ヲ白濱大參事ニ贈ル其文中定テ一死ヲ決スルヿヲ陳シ遣ルヘシ此日余天主堂ニ出入スル者ニ金ヲ與ヘ彼ノ事情ヲ探索セシム夜ニ入リ歸リテ曰彼教師モ大ニ怖畏ノ色アレ𪜈猶泰然トシテ云今日ノ應接ニテ事スマヌ時ハ又明朝應接スヘシト余此ノ旨ヲ知事ニ告ク知事驚テ曰今日ノ應接ニテ已ニ事濟ト思慮案ノ外彼ノ狡猾又一增深姦ヲ回スヘキヿ實ニ可惡ノ至リ爾シ此上別策ナシ只決心ヲ變セサルノミ

英ノミニストルパークスハ万國ニテモ高名ノ魁ニテ全權ト稱シテ英王ヨリ日本ノヿヲ付託セラル、人ナリ佛蘭西岡士ヲ始メ魯伊蘭日等ノ八國ノ岡士皆此人ヲ賴ミニ思フノミ已ニ先日ヨリ彼ノ新聞紙ニ曰日本近來基利士宗ヲ逐フノ令アレ𪜈英ノバアクスヲシテ應接セシメハ其擧必行レズト云我知事公ニ已ニ先年大坂本願寺ニテ應接セシヿアリト云實ニカンシヤクモチノ大將ト云

三日

朝ヨリ知事ト渡邊野村同騎シテ裁判處ニ至リ英ノミニストルニ應接ス

ミニストル曰是非ノ〳〵十五日迄延引スヘシト余モ日本政府ノ爲ニ周旋スルヿ多シ豈政府ノ爲ニナラヌヿヲ庶希センヤ知事公泰然トメ曰事未發セサル先ナラハ貴君ニ對シ延引モナルヘシ今若貴君ノ爲ニ期限ヲ延引セハ官ヨリ已後制度行ハレス我等進テハ朝命ヲ忽ニシ退テハ下民ニ信義ヲ失ハヽ何ヲ以テ內國ヲ維持センヤ豈足下ノ請ヲ忽ニセンヤ

唯　朝命ヲ重ンスルヲ本トスルノミミニストル怒色アレ𪜈條理ニ於テ默止ヨリ外ナシ知事公恰然トシ寒溫ノ雜談ヲ陳シ大坂已來ノ再會ヲ述フ且ツミニストルノ烟草ヲ一吹センヿヲ乞フ其形狀寛裕泰然毫モ怖色ナシパークスノ如キ奴モ知事ノ膽略ヲ感シ烟草ヲ呈シ且曰今日ハ雜談スル勿レ知事猶又舊友ノヿ抔ヲ問フ爾レ𪜈其肝要ノ處一一格陳スパークスモ感心シテ退ク時ニ臣子ノ職分感心ナリト云

四日

朝ヨリ雨雪霏々タリ午後ヨリ大雪トナル其白雪中兵隊處々奔馳如飛此日急御用ヲ以テ浦上村邪徒六百餘人邪魁ヲ召ス皆涕泣血眼〻草鞋短褐ニテ出ス給釋官門ニ蝟集ス烈風雪ヲ吹キ苦寒不可耐晚ニ至リ藻氣船三艘ニ載ス卽薩ト阿州ト越前トノ艦ナリ知事公尊館ニ於テ一宴ス各死地ヲ免レ痛快云可カラス知事有ニ和歌一如別記夜九鼓歸宿

五日

朝余高取ト知事ヲ訪フ余ハ二日已來晝夜奔走事情ヲ搜索シ時ニ知事ニ告ク爾レ𪜈深ク秘シテ人ニ知ラレス今朝知事顏色モ愉和高聲事ヲ談ス曰余モ今度ノ樣ナ苦心スルヿナシ所謂裂腸トハ此ヿナラン若此ヿ不階ナラハ進テハ皇國躰モ制度モ立ツヿナク退テハ余日田ニ皈ルニモ本國ニ歸ルニモ面目ナシ唯一死ヲ期スルノミ卽一昨日應接ノ時自然カンシヤクモチノミニストルガ暴ナ言ヲ發シ舟ヲ遮ルノ或ハ軍艦ヲ遣スノト云時ハ爾ラハ我モ奉命スルヿ不能ユヘ生テ居ルニ面目ナシヨリテ氣ノ毒ナカラ我ハ我劍ヲ以テシ汝ハ汝ノ短炮ヲ以テ互ニ一死ヲ盡サント決答スルノ赤心ノ處豈計ランヤ如此ノ愉快ノ大擧已ニ無滯昨日ハ黑（原註）黑トハ邪宗ノ人自ラ誇スルノ言ナリ崎陽ノ人所ヒ知ハ邪宗ノ人ヲ涕泣ヲ含テ仰ラレタリ且曰今朝ノ大雪一酌セスンハアルヘカラス來レ布岳一醉セヨ又大參事モ定テ先日樺島ノ皈ルヨリ晝夜懸念スヘシ急飛ヲ以テ此事ヲ知ラセン汝大略を記シテ送レ縣內モ安心スヘシ余モ欣悅の餘リ一大抔ヲ戴テ歸リ此記ヲ匆卒ニ作ル

知事曰十日余ノ奉命前夜ノ夢ニ神ヨロ玉ヲ余ニ授クト余驚テ吉兆ヲ知ル此地ニ來リ野村ニモ此ノ事ヲ告ク實ニ此度ノヿ人力ニ非ス汝布岳歸テ松尾ニ命シ玉形大サ五六十圍ノ白石ヲ彫シ若宮ノ神前ニ奉納スヘシ豪ハコツブノ形ノ如クセヨ余ノ先刻ノ歌ヲ刻シ置カン汝其事ヲ記シテ石ニ銘セヨ余拜諾シテ退ク

（編者曰、本文中處々に知事とあるは日田縣知事松方一平にて野村知事とあるは長崎縣知事野村宗七、渡邊彈正とあるは彈正大忠渡邊昇のことなり）

（備考）

廿三日（十一月）肥前浦上村耶蘇教徒五百人ヲ加州藩ニ保管セシム前日ヨリ兩日間悉ク金澤ニ着ス（近世史料編纂綱例）

十二月四日太多喜櫻井大網一宮四藩及ひ宮谷縣の各知事連署して回章を同國各藩知事に贈り三治混一の叡旨を遵奉し國内に議事院を設け相會して互に長短を議し民政の一途に出つるを謀らんとの意を陳す

〔明治三年〕〔探索書控〕

本田喜藩知事太河内正質櫻井藩知事滝脇信敏大網藩知事米津政敏一宮藩知事加納久宜宮谷縣知事柴山典頓首再拜謹テ書ヲ同國藩知事諸公ニ致ス伏惟レハ方今府藩縣之三治ニ立チ三治一ニ歸シ國體愈固ウシ万國ニ恥ルナキノ　叡慮誰カ恐懼感佩セサルヘケンヤ然ト雖各藩從前政事異ナル事無キ能ハス偶々　叡旨ヲ奉戴シ勵精竭力シテ邦ノ本タル民ヲ栽培シ其憂ヲ憂フルモ只一藩限ニシテ是ヲ世ニ擴充セサルハ豈惜ムヘキノ至リナラスヤ藩士ノ言ニ曰ク善政ハ以テ我藩ノミニシテ足ル焉ソ他ニ關係センヤト其甚シキハ士々相軋リ不測ノ變ヲ釀スニ至ラン既ニ元亀天正ノ間英雄割據シ戰鬪コレ務メ骸骨ヲ曠野ニ暴スモ時勢不可止ニ出ルト雖槃シテ之ヲ論スレハ士々相軋ルノ甚シク藩々割據シテ政令區々ナル。致ス所ナリ嘗テ聞西洋諸州大小ノ議事院ヲ布置シ民害ヲ除ク多シト是政事上ニ缺典無ク又數途ナラサラシメンカ爲ナリ願クハ當國ニ於テ一ツ之議事院ヲ創立スヘキカ若クハ其ノ城内又ハ城外ノ大寺ヲ借リ而シテ藩知事縣知事ハ各ノ大小參事及ヒ一個ノ村長ヲ率ヒ之ニ相會シテ民政生產ヨリ些少ノ事ニ至ルマテ國ニ裨益アル條件ハ各ノ丹心ヲ表曝シ肺肝ヲ吐露シ熟議ヲ遂ケ普通ノ事ヲ行フニ至ラハ庶幾ハ各藩輯睦シ士々相軋ルノ弊風忽去リ彼是ノ長短異同ヲ參正シテ民政一途トナリ三治歸一ノ　叡慮周ク通徹シテ一民モ　皇澤ヲ與リ被ラサル無キニ至ラン而メ各藩ノ所得モ豈尠カランヤ如此ンハ國以富スヘク兵以テ強スヘク學校興スヘク商社組立共亦易々タランノミ我輩頑愚菽麥ヲモ辨スル能ハスト雖モ今ヤ　皇政古ノ盛時ニ復シ兆民漸ク　聖澤ニ化セントスルニ當テ守職ノ誠富强ノ基止ント欲テ止ムヲ得ス陋見ヲ陳述シテ正ヲ諸君ニ乞フ此ノ如シ若一笑シテ地ニ投セス採用スル處アラハ幸甚誠恐誠惶頓首々々

二日本文ノ事業萬一採ル處有テ同意アラントノ君ハ請フ尊名ノ下ニ然諾ヲ記シ玉ハランコトヲ而テ約諾整テ後更ニ會期ヲ告ン且曾スルノ日諸君各大小參事一員宛ヲ將ヒ至當ノ地ニ會シ本文兩議ノ可否其他議事ノ法則等萬機衆議ヲ歷公論ヲ竭シ確定ノ後以テ官許ヲ乞フヘキナリ不悉

三日廻文順達回尾ノ君ヨリ大河内正質方エ返シ玉ハラン事ヲ希フ

明治二歲己巳十二月四日

宮谷縣知事　柴山典（上總）
一宮藩知事　加納久宜（上總）
大網藩知事　米津政敏（上總）
櫻井藩知事　滝脇信敏（上總）
大多喜藩知事　大河内正質（上總）

（上略）久留里藩知事公　御狀狀之趣篤ト遂熟考大小參事等ヘモ申聞候上追テ從是可及復報右御文去ル十六日夕櫻井藩知事公ヨリ到來同十八日鶴牧藩知事公ヲ御達
久留里藩知事　黑田直養

（上略）飯塚藩知事公

（上略）小久保藩知事公　御回狀之趣尤御至當ノ儀と奉存候然處野非事大禍ニ付唯今別面不相勝候故即今可否尊報出來兼候間尚大參事中談追テ自是復報可申述候
小久保藩知事　田沼意高

（上總）佐賀藩知事公
（上總）鶴牧藩知事公　御廻章ノ趣承知仕候大小參事ヱ申聞自是可及書報且廻章十八日夜久留里藩知事公ヨリ到來同廿日菊間藩知事公ヨリ廻達　鶴牧藩知事　水野忠順

（上總）菊間藩知事公　廻文章達自鶴牧藩辱承高意宜的大小參事以流鄙情爲尚順達干鶴舞藩水野敬相贈
（上總）柴山藩知事公
（上總）鶴舞藩知事公　廻章ノ趣至當ノ確論異見無御座候御規則御成次第罷出可申然シ實効無ク虛說ニ流候樣且利ノ有ル處害モ隨フ者ニ候ヘハ唯熟計ヲ乞ノミ今廿二日菊間藩知事ヨリ到來小久保藩知事ヘ廻達　鶴舞藩知事　井上正直

次第廻達ノ便ニ非ス海恕是祈々

十二月五日我藩御留守警衛及ひ建禮建春二門の警衛を解かる

（明治二年王政日新錄）（熊本縣廳所藏）

熊本藩

御留守警衛差免候間歸邑可致候事

己巳十二月（五日）　兵部省

熊本藩

其藩兵隊建禮門建春門等警衛差免候事

但廣島藩ヘ明後七日引渡可申事

己巳十二月　兵部省

十二月七日

一右之通御達ニ付則七日建春建禮兩御門御警衛御場所等廣島藩ニ爲引渡池田出頭夫々引渡等之手數無滯相濟申候事

十二月六日本藩上野小倉等の戰役功勞者を賞す

（從慶應二丙寅年正月至明治三年）（江戸京都來狀扣）

以別紙申達候

右者去年五月上野戰爭之節相働且滯陣中所々警衛等骨折候段被遊御滿足旨

白石讓之助

一御紋附御上下一具

右者關東出張中時體探索等心懸厚三番丁步兵沸騰之節差入心配いたし且物騷之砌御國許ニ茂往復前後格別骨折候付被下置旨

益田勇

一右同一具

右者小倉戰爭之節赤坂鳥越ニ應援として罷越差入及苦戰陣拂之節茂諸事行屆候付被下置旨

鈴木甚藏

右之通被仰付旨去ル六日御書付相渡申候則御請書一通差進申候

右之趣爲可申達如是御座候以上

十二月十一日

大參事衆中　飯田熊之助

權大參事衆中　佐々木大參事

十二月八日本藩原佃大學校御用掛を命せらる

（京都並東京鶴崎長崎返達御用狀扣）

其藩原佃儀大學校御用掛被　仰付候間此旨相達候也

十一月八日　　留守判官

熊本藩知事殿

〔仝　書〕

（十二月十二日宗村加兵衛より大參事樋大參事當の内）

一原佃儀大學校御用掛被　仰付候儀ニ付御書付一通久世從二位様ゟ御渡

但佃儀得生業之心得を以相勤候様大學校より御達ニ相成申候

十二月八日我藩兵員屆書式及ひ隊伍編制法等を定む

〔明治二年　觸　狀　控〕

一十二月八日左之通

祿高ニ應し兵員被差出候様との儀ハ一統ニ御布告ニ相成候通ニ付別紙文案之通一支配限一紙ニ取調當年中軍備局ニ被差出候様

一右兵員ハ譜代之家來迄ニ而地筒并一季抱被差加候儀ハ難叶候

一小隊編制之御規則左之通

一隊長　一人
一副長　一人
一指揮士　二人
一小銃手伍長　四人
一小銃手　四十八人
一鞄喇叭手　二人

右之通ニ候得共一家より小銃手四十人以上被指出候分ハ一隊ニ被定其主人之指揮ニ被仰付筈ニ候扨又餘計之兵員被差出候而々モ其數ニ應し幾隊ニ而も家來之内被立置役員銃手之名附共別途軍備局ニ被相達候様

一一家之兵員一小隊ニ不滿分ハ數家取集隊を被編立筈候間於手前相對申談一隊ニ組合被申儀不苦候尤隊長指揮士ハ追而可被仰付候得共其餘之役々ハ兵員之内ニ被立置是又別途軍備局ニ被相達候様

一兵員相當之外各嗜次第多人數被抱置定員外ニ被差出候儀ハ不苦候

一右兵員ハ御本方兵隊同様出張者勿論兩京御警衛等ニ被召仕筈候間炮器軍服并胴亂腰付丈ケ之彈藥者主人々々より被相辨候様尤道路之入費出張中之賄方ハ官府ゟ被渡下筈候

一右兵員於練兵場教練之都合ゟ追而可申達候

右之通可及達旨候條左様可有御心得候以上

十二月八日　　少參事

祿何百何拾俵　　知行取或中小姓給人段共　何之何某

一兵員何人何之何某　　右同　何才

内　何之何

現兵　何才某

合何拾何人
　　殘何人兵賦を以差出申候以上
十一月

十二月九日各藩に保管謹慎せしめられたる人名等を申告すへしとの旨達せらる

〔明治三年從東京西京之下廻〕
（十二月九日弾官傳達所にて山下權少史口達月番三藩公用人より我藩外數藩へ廻達）
口達
當時各藩に御預に相成居候人名并謹慎被仰付置候者共御用之筋有之候間至急取調觸頭に取束來ル十二日迄差出可申事
十二月九日　　熊本藩
　　兵部省

十二月十二日御留守警衛中の勤勞に對し我藩兵に酒饌を賜はる

〔明治二年王政日新錄〕（熊本縣廳所藏）
其藩兵隊　御留守警衛差免今般歸邑申付候就而者長々勤勞茂有之候に付酒肴下賜候事
已巳十二月（十二日）

一錢百六十貫文	熊本藩
酒貳合代三百五十文	四百人
鰯壹枚代五十文	

但壹人に付四百文宛也

十二月十二日横井平四郎の刺客を京都の獄に投せらる

〔公文錄横井刺客處刑始末〕（内閣文庫所藏）
先達て横井平四郎を殺害に及ヒ候者トモ於京都入牢可申付候事
已十二月十二日　　刑部省

十二月十四日島津忠義東京より海路大坂に至り是日上京直に大坂へ返る

〔京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕
右者東京より蒸氣船に而御着坂去ル十四日御上京近衛樣迄御入郎日御下坂に相成候由
右之段外使より聞取申出候以上
十二月十七日　　鹿兒島藩知事樣
　　太政宮
　　宗村加兵衛

十二月十五日阿蘇大宮司阿蘇惟治彈正臺より重ねて召喚せらる

〔男爵阿蘇家文書〕
肥後國阿蘇大宮司
彈正臺御用之儀候條早々上東京可有之者也
十二月十五日　　神祇官
追而參着之上者當官エ可屆出事

十二月十七日本藩宮川小源太土木權正に任し仝山田平兵衛土木少佑に任せらる

〔明治二年王政日新録〕（熊本縣藝所藏）

一左之通被　仰付候由山田平兵衛ゟ申來

宮川小源太

任土木權正

右

宣下候事

十二月　太政官

山田平兵衛

右者十二月十七日土木少佑蒙宣下候段相達候事

十二月十七日本藩磯邊虎之助飛龍丸船長を命せらる

〔明治三年従東京西京之下廻〕

私儀今十七日於兵部省別紙寫之通飛龍丸船長被　仰付難有仕合奉存候此段宜敷被成御達可被下候以上

十二月十七日　磯邊虎之助

飯田熊之助殿　磯邊虎之助

飛龍丸船長申付候事　兵部省

十二月

十二月十八日大學校、開成所及ひ醫學校等の名稱を改めらる

〔明治三年従東京西京之下廻〕

十二月十八日三藩ゟ廻狀を以差廻來候御書付寫

自今大學校ヲ大學と改稱開成所ヲ大學南校醫學校ヲ大學東校ト可稱事

十二月　太政官

（三藩とは月番水戸高知忍の三藩のことなり）

十二月十八日維新有功者に對する賞典綵下付の件につき示達せらる

〔明治三年従東京西京之下廻〕

（十二月十八日三藩ゟ廻狀を以差廻來候御書付寫の内）

御一新ニ付有功之輩總テ　御賞典之儀ハ出格之事ニ付全分御渡方可有之勿論之處當年者氣候不順米穀不熟殆皆無ニ屬スル處モ有之御歳入別而寡ク來年會計之目途不相立場ニ立到候ニ付甚以御不本意之至ニ候得共千石以上之分ハ當年三分之一殘り三分之二ハ來午年七月十二月ト都合三ケ度ニ下シ賜千石以下之分ハ如定則當年半高被下殘半高ハ來午七月ニ下賜候間得其意大藏省へ可申出候事

但來午年ヨリハ千石以上以下ハ年々十二月半高翌七月半高御渡可相成候條此段相達候事

十二月　太政官

十二月十九日先きに集内式部等横井平四郎刺客の助命幽塾を建議す此日集議判官照幡列之助より刺客死刑延期せらるゝ旨を通達す

〔日本史籍協會編集内信善遺編附録〕

勤王家集内式部傳

建言

謹按スルニ刑罰ハ　列聖之同シク軫念シ玉ヒシ所青史ニ昭々タリ今復何ゾ贅センヤ今ヤ御復古ノ始政ニ當リ天下人心ノ服否最モ茲ニアリ今年正月五日京師寺町ノ事ハ維新以來ノ事旬日ヲ不出シテ四方ニ喧傳セリ彼刺客六名ノ内三名ノ罪科（一人ハ斃レ二人ハ脱網三人ハ就縛）今日ニ至リ群議異同未已ト雖ニ惟ルニ此御處分ノ當否ハ實ニ　聖德ニ關係ス

明治二年

然ルヲ某等緘默セハ平生忠愛ノ誠ニ負ク故ニ冒万死論別如左中略
彼刺客等素ヨリ不學無知ノ者ナレハ　朝憲ヲ犯スノ罪タルヲ忘レ報國ノ事ハ此姦ヲ除キ　朝廷ヲ蠱惑セサラシムルノ外ナシト一途ニ心得ショリ右ノ暴動ニ及ヒシト見ヘタリ其志ハ憐ムヘシト雖モ豈罪ナシトセンヤ某等虚心以テ之ヲ斷センニ六名中五名ノ者ハ決行ノ儘直ニ刑官ニ就キ其處分ヲ待ツノ心ナク潛匿シテ　朝家ノ紛擾ヲ致シ剩ヘ許多ノ連坐ヲ生セシハ卑怯ナリ且殺身報國ノ士道ニ背ク又他三名ノ者ノ如キハ數日ニシテ靦然就縛是レ罪ノ大ナルモノナリ然ルニ下獄ノ後一名ノモノ自ラ首謀ノ實ヲ吐キ嚴刑ニ就カント請ヒシヨシ是レ尚士氣ノ在ルアリヤヽ稱スルニ足ル故ニ餘二名ノ捕獲ヲ待チ一同割腹ヲ命セラルヽコト至當ナラン雖然横井徵庸中在廷ノ人其姦ヲ不辨蘇洵ノ眼力ニ乏シカリシハ朝家ノ御爲メ不幸無此上濫舉ノ責恐ラクハ歸スル所アラン且維新以來殊ニ寛大至仁ノ　叡慮ニヨリテ逆人ト云フトモ死スル者ナシ況ンヤ忠愛ノ赤子ナレハ(中略)彼三名ノ者死一等ヲ減シテ永ク筑藩ニ幽蟄ヲ命セラルヘク餘二名ノ者既ニ死セハ已ムモシ倫生他日被捕ンカマタ何レノ藩ニカ永蟄ヲ命セラルヘシ彼徒ニアリテハ屠腹永蟄何ソ撰ハン但
朝廷ノ至仁至公ヲ天下ニ明示セラレンコト今日在省ノ諸君子豈ニ之ヲ勗メサルヘケンヤ某等不勝懇願切望之至恐々謹白

巢内式部　吉見禎介　和田肇
三輪田綱一郎　伊藤良馬　丸山作樂
中川潛叟　疋田源二郎等

其後の消息
過日建言伺出之所歎願の情委細ニ廟堂ニ上達貫徹致候由待詔院照幡氏より被申聞候事
尚又十九日照幡氏より横井斬姦之三名
朝廷思召被爲在候ニ付死罪之儀御延引被仰出候旨御達有之候事

十二月十九日本藩鶴崎兵隊指揮士を任命す

〔明治二年轉職進階帳〕

覺

市務局少參事ヨ
熊人養方之弟　木村弦雄

右者鶴崎兵隊指揮士之場被仰付勤中三人扶持被下置出府之節之軍備局ヨ罷出諸事申談候樣被仰付候條此段可被申渡候以上

十二月十九日　塚本彌右衛門

〔木村弦雄履歴書〕

明治二年十二月鶴崎有終館常備隊ノ指揮士申附ラル

〔鶴崎毛利家文書〕

口達　毛利到

其元儀成美館訓導當分被仰付之
畢テ

吉海準助
松岡多兵衛
涛島策馬

右者兵隊指揮士被仰付座席重士十二隊之口ニ被附置軍備局少參事觸被召加鶴崎詰として被差越旨及達候條左樣相心得御郡代ヨ茂可被知せ置候以上

十二月廿二日　奉行

奥村軍記殿　熊本藩

御番代之參謀ヲモイタシ候樣被仰付
以上
十二月(明治二年)

十二月廿日徳川光圀徳川齊昭に從一位を贈り蒲生君平高山彦九郎の志操氣節を褒して閭門に旌

明治二年

表し其子孫を祿せらる

〔防長回天史第六編下〕

（明治二年冬期ノ大勢抄略）

此月（十二月）二十日贈從二位德川光圀及ビ德川齊昭ニ從一位ヲ贈リ常磐社ノ號ヲ贈ヒテ水戸ニ合祀セシメ蒲生秀實（君平）高山正之（彦九郎）ノ志操氣節ヲ褒シテ里門ニ旌表セシメ其後裔ニ祿ス

〔明治三年ヨリ探索書控〕

（二月晦日青木彦兵衛ゟ差出候書付の内）

蒲生君平

草莽一介之身ヲ以テ綱紀ノ衰弛ヲ慨シ名分之紊壞ヲ憤ス然レトモ時之不可ナルカヲ著述ニ專ニシテ以テ朝廷ヲ尊崇シ世教ヲ補裨ス其風ヲ御追賞被爲在依之里門ニ旌表シ子孫へ三人扶持下賜候事

右宇都宮藩へ於其藩扶持取計候樣被仰出候事

十二月廿日兵部大輔大村益次郎を害せし兇徒を處刑せむとするに際し彈正臺より之に異議を唱へ遂に中止せらる

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄探索報告〕

金輪五郎　二十九才　長州藩

過ル廿日於粟田口仕置場刎首ニ被處筈之人名出役いたし候御出入万次郎ゟ聞取書左之通

久保田藩

同藩　信次郎　二十五才

同藩　太田瑞穂　二十二才

久保田藩　五十嵐伊織　二十九才

元軍曹　伊藤源助　二十八才

信州伊奈郡名古熊村　金一郎　三十一才

〆六人

右者同日明六ツ時牢屋敷引出蹴上ケ弓屋前ニ而彈臺巡察使早馬ニ而駈付ケ警固方役長ニ刑罪延引被仰出候

本文巡察使早打ニ而駈付ケ警固長官に及談判候ハ刑津ハ死活ニ係り尤重大之儀ニ有之ケ樣之事ニ關係いたしてこそ彈正臺タル處ニ候處前以通議茂無之當朝ニ至り一ト通之付合ニ而御所置有之儀何分解シ兼申候其上横井平四郎を及殺害候族ハ今以助命罷在公明之御刑法ニ候ハヽ順序を遂テ御所處有之度依而今日之刑罪是非々々被差延候樣强而申出候內

岡島甚三郎
宇野縫之助
熊吉
富吉
卯之助

段々演說ニ及候由

右五人之者ハ人を殺害いたし候賊又ハ押入强盜之類之由

本文六人之者ゟ大村兵部大輔斬害致し候者計り延引之筈之處何歟兩三度も懸合之上一統延引ニ相成候由根ゟ何ゟ起り候歟相分り不申候下役之風聞ニ而ゟ東京ゟ早打を以申來候共又ハ或藩士彈臺ゟ罷出助命之義迫而願出候より局中異論起り候而如斯之及次第候共申區々之風說ニ而聚と突留不申候以上

十二月廿三日　外使共

彈臺之御役々を初有志之徒も追々ニ駈付若承引無之ニおゐては孰茂盡死力差留可申旨申募候ニ付長官甚當惑ニ而直樣刑部省ニ伺ニ相成夫ゟして彈臺刑省之爭論と相成遂ニ及落日其儘餘賊とも死罪相延候由右之濫觴ハ有志之徒死刑之事承及彈臺ニ駈込頻と命を乞彈臺も同意ニ而右擧動ニ立至り候由彈臺附屬之内ゟ宗村加兵衛ニ密話いたし候事

十二月廿四日本藩公廨の名稱を改め坐班式官俸等級等を規定し藩中に達す

〔御國東京往來狀扣〕

御役間御役名改革並坐班式官俸等級等今度別紙之通被定御役高御役料之被廢外ニ各職相應之勤料被下置筈候尤依勤功被下置候御足高之是迄之通被附置旨被　仰出候條可被奉得其意候以上

十二月廿四日

本文坐班式等ハ正月廿八日之條下諸扣可見合

〔明治二年集　錄〕

覺

(新)公用司	(舊)公用方	奉行所
待客司	御客屋	御郡方御米銀方
使役司	役割所	御蔵
工作司	御所事所	産物方
修築司	御掃除方	櫨方
雜税司	小物成方	御算用方
雜銀司	小物成御銀所	小間物所
米銀司	御郡方御米銀方	御銀所
倉廩司	御蔵	御貯物所 御新方 合併
生産司	産物方	
採蠟司	櫨方	
精算司	御算用方	
雜貨司	小間物所	
貨幣司	御銀所	
給料司	御貯物所 御新方 合併	

武庫司	御天守方	
練兵場	演武場	
獄司	御穿鑿所	
牧司	御厩	

右之通諸間名目被改候事

學校士席御役人

坐班式

一等官	權大參事	御客屋支配役
松井家	一等官免席	役割支配役
米田佐々木兩家	組外	産物方元締
松井家嫡子	一等官二代目	
大參事	組外同列	
米田佐々木兩家嫡子	三等官	
一等官同列	二等官免席	
二等官	上等官免席	
諸局主宰小笠原七郎溝口三伍八一等官同列	上着坐	
重士大隊長	持坐	
番士總隊長	上着席同列	
留守總長	一等官嫡子	

右役々錄事ゟ被改候七等官以下茂同斷之事

以上

明治二年

大砲摠隊長	
小銃大隊長	
中着坐	
一門二男末子弟	
松井家二男末子弟	
米田佐々木兩家二男末子弟	
佐敷番士長	
重士隊長	
番士隊長	
留守隊長	
二等官二代目	
一等官三代目	

上着坐免席
中着坐同列
比着坐
舊祿三千石以上持坐
同列持坐
八代番士長
大司儀
中小姓隊長
少參事
家　令
內家着坐
中着坐免席
持　坐
一等官二男末子弟
四等官
一等小銃隊長
權少參事
公用人
一等小銃隊長同列
家　扶
監　察
二等小銃隊長
同　列
留守中小姓司令
別手銃隊長
大砲隊長
三等小銃隊長
同　列
少司儀
同　列
重士隊指揮士
大砲隊副長
小銃隊副長
大組附
持　坐
上着坐二代目
中着坐二代目
比着坐二代目

持　坐
川尻市令
留守徒士司令
留守大組附
三等官嫡子
二等官二男末子弟
大　從
新屋形大從
內家四等官同列
番士隊組脇
留守隊組脇
八代番士組脇
八代番士監
佐敷番士組脇
學　監
川尻鶴崎兵隊長
工作司長
郡　監
牢獄司長
郡　宰
記宰幹事
會計局主計
二丸屋形內傳
內　傳
新屋形內傳
隅屋形內傳
重士大隊幹事
衛卒長
時習館訓導
武庫司長
馬牧司長
四等官同列
連枝附大從
五等官
少　從
新屋形少從
諸市令
醫師司令
侍　讀
醫學提舉
侍　醫
同　列
時習館訓導
五等官醫師
同　列
記宰幹事
會計局主計
諸務少從
新屋形諸務少從
內家五等官
茶　道
修築司長
郡監試補
諸監察
小銃大隊幹事
儀衛士
重士上班
時習館句讀師 習書師
諸師範兵學 砲術 調役
練兵場監押
糺問士
奉行所錄事
騎射檢見
練兵場倡役
重士首坐
大砲隊指揮士
小銃隊指揮士
重士隊伍長
時習館各齋長
重　士
奉行所錄事
雜稅司米銀司錄事
吟味役
郡中吟味役
大司儀附屬錄事
內　官

少參事觸九等官
少參事觸五等官准席
番士隊
留守隊
留守隊准席
留守隊長之支配
司　馭
八代番士
佐敷番士
連技附五等官
六等官
中小姓組脇
少　從
新屋形少從
諸務少從
新屋形諸務少從
侍　讀
醫學提舉
侍　醫
時習館訓導
六等官醫師
同　列
諸監察
儀衛士
內家六等官
茶　道
重士上班　五等官之通
重士首坐　右同
重　士
組附中小姓
組附中小姓列
奉行所錄事
雜梲司米銀司錄事
吟味役
郡中吟味役
生產司錄事
大司儀附屬錄事
六等內官

少參事觸六等官同
同准席
司　馭
連枝附六等官
留守中小姓組脇
留守中小姓上班
留守中小姓
留守中小姓准席
家祿當前之扶持ヲ受ル十四歲以下之者
四等官之嫡子并三等官ノ二男末子弟
五等官ノ嫡子并四等官ノ二男末子弟
六等官ノ嫡子并五等官ノ二男末子弟
六等官之二男末子弟
留守隊員外
留守隊員外准席
留守隊員外准格
醫師之子
茶道之子
留守中小姓同列

留守中小姓同列准席
留守隊員外之嫡子
留守六等官准格
右之通官等役名被改七等官以下之是迄之通被仰付置候尤根取之錄事物書之筆生ゟ被改其呼役名ニ御字相省可申事以上
十一月

官俸等級		
一七百五十俵	減兵員八人	但家祿九百四十俵取以上八官俸百俵ニ付二人充ノ割合ニテ減十五人以下准之
一五百俵	減兵員五人	大參事
一四百五十俵	減兵員四人	諸局主宰 重士大隊長
一四百俵	減兵員三人	番士總隊長
一三百五十俵	減兵員三人	留守總長
		權大參事
		公議人
		大砲總隊長
		小銃大隊長
		佐敷番士長
一三百俵	減兵員三人	海軍長官
		重士隊長
		番士隊長
一二百五十俵	減兵員二人	留守隊長
		八代番士長
		大司儀
		小參事
		家令
		二丸邸長
一二百俵	減兵員一人	一等小銃隊長
		權少參事
		公用人
		留守中小姓司令
一百五十俵	減兵員一人	留守徒士司令
		家扶
		監察
		二等小銃隊長

七等官
目見醫師ヨリ獨禮以上
八等官
步小姓以下ヨリ一領一疋以上
九等官
別手足輕以下苗字帶刀以上
留守中小姓同列准席

一百十俵　海軍船將
別手銃隊長
大砲隊長
三等小銃隊長
少司儀
會計局監
時習館助教
練兵場監
大從
侍醫主匕
茶道司長
工作司長
郡監
郡宰

右之外四等官ニテ官俸無之小知給賜ル分ハ略之

一九十六俵　醫師司令
記室幹事

右之通被定候處家祿之儀若官俸ゟ越高ニ相成候者別ニ官俸ハ不被下置勤料迄被下置兵員之官俸之丈々ニ應被減之餘分之規則之通差出可申候

但家祿養兵料を合せ候而も猶官俸之高ニ備兼候之右不足丈之御足俵被下置候筈

右之通候事

以上

十二月

官俸勤料表

官俸七百五十俵　勤料二百俵　大參事

官俸五百俵　勤料二百俵　諸局主宰

同　百五十俵　重士大隊長

官俸四百五十俵　勤料百俵　番士總隊長

官俸四百俵　勤料八十俵　留守隊長

官俸三百五十俵　勤料八十俵　權大參事

勤料無之　公議人

勤料七十俵　大砲總隊長

同　七十俵　小銃大隊長

同　五十俵　佐敷番士長

官俸三百俵　勤料五十俵　海軍長官

同　五十俵　重士隊長

同　四十俵　番士隊長

同　四十俵　留守隊長

官俸二百五十俵　勤料四十俵　八代番士長

同　四十俵　大司儀

同　五十俵　少參事

同　五十俵　家令

同　四十俵　二丸邸長

官俸二百俵　勤料二十俵　一等小銃隊長

同　四十俵　權少參事

同　無之　公用人

同　十五俵　留守中小姓司令

明治二年

同　十五俵　留守徒士司令

官俸百五十俵　勤料二十五俵　家扶

同　二十俵　監察

同　二十俵　二等小銃隊長

同　二十五俵　海軍船將

官俸百十俵　勤料二十俵　別手銃隊長

同　二十俵　大砲隊長

同　二十俵　三等小銃隊長

同　十五俵　少司儀

同　三十五俵　會計局監

同　三十五俵　時習館助教

同　三十俵　練兵場監

同　二十俵　大從

同　十五俵　侍醫主匕

同　十五俵　茶道司長

同　三十俵　工作司長

同　四十俵　郡監

同　三十五俵　諸郡宰
同　三十七俵　萃北郡宰
同　六十俵　鶴崎郡宰

官俸無之少知給被下置而々

勤料二十俵　重士隊指揮士
同　十五俵　大砲小銃隊副長
同　十五俵　番士隊組脇
同　十五俵　八代佐敷組脇
同　三十俵　學監
同　四十俵　鞫獄司長
同　十五俵　厩牧司長
同　十五俵　内傳
同　十五俵　重士大隊幹事
同　十五俵　衛卒長
同　二十俵　時習館訓導國學訓導小學訓導共

官俸九十六俵

勤料十五俵　醫師司令
同　三十五俵　記室幹事

右之外官俸無之面々ハ勤料共略之

十二月某日本藩中下大夫士等の稱號を廢し都て士族及ひ卒と稱し且つ祿制を改め知行を公收し廩米を以て給與する旨を諭達す

〔明治二年集錄〕

先般各藩大義名分之紊壞ヲ正シ海外諸國之形勢ヲ察シ以テ其封土ヲ奉還ス依テ大ニ公論衆議ヲ被爲盡府藩縣一途之政令ニ歸シ天下ト共ニ綱紀ヲ更張被遊度御主意ニ付更ニ知藩事ニ被任階而家祿之制被爲定藩々ニ於而茂維新之御政體ニ基キ追々改正可致就而者中下大夫士以下之稱被廢都而士族及卒ト稱祿制被相定候爾後各其地方官ニ於テ可爲貫屬旨被仰出候條篤ト御主意ヲ奉體シ銘々分ヲ守其職ヲ可盡事

但知行一同上地被仰付都而廩米ヲ賜候事

一大夫士以下之面々今般家祿御定相成候付而者其家來共三代以上相恩ノ者ハ相應之御扶助可爲下候間姓名並從前之祿扶持米等取調早々可申出事

但舊主ニ於テ扶持致シ候儀者可爲勝手事

規則

祿制二十一等ニ分テ士族ハ十八等ニ止候事

但士族ノ元高十三石ニ滿ズ卒元高八石ニ滿ザル者ハ是迄通之事

一元祿ハ現今被宛行候高ヲ以テ定候事

一舊來同心之輩ハ卒ヒ可彌事

一祿制ハ總テ現石高ヲ可稱事

一祿制當年之是迄之通來春方可稱事

一祿ハ都而廩米ヘニテ賜候間其觸頭ニテ取紛大藏省ニ可申出事

祿制

	現米
一元祿万石未滿九千石迄	二百五十石
一同　九千石未滿八千石迄	二百二十五石
一同　八千石未滿七千石迄	二百石
一同　七千石未滿六千石迄	百七十五石
一同　六千石未滿五千石迄	百五十石
一同　五千石未滿四千石迄	百三拾五石
一同　四千石未滿三千石迄	百二十石
一同　三千石未滿二千石迄	百五石
一同　二千石未滿千五百石迄	九十石
一同　千五百石未滿千石迄	七十五石
一同　千石未滿八百石迄	六十五石
一同　八百石未滿六百石迄	五十五石
一同　六百石未滿四百石迄	四十五石
一同　四百石未滿三百石迄	三十五石
一同　三百石未滿二百石迄	二十八石
一同　二百石未滿百五十石迄	二十二石
一同　百五十石未滿百石迄	十六石
一同　百石未滿八十石迄	十三石
一同　八十石未滿六十石迄	十一石
一同　六十石未滿四十石迄	九石
一同　四十石未滿三十石迄	八石

一同　三十石以下是迄之通

但免二ッ五分四捨五入之法ヲ以斗ニ切上可申事

以上

十二月廿七日本藩兵十月分の食料を支給せらる

〔京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

今廿七日兵部省會計司より御呼出ニ付公用方詰之内より罷出候處被差出置候兵隊四百人に十月朔日より廿九日迄壹人一日永百廿文宛を以金千三百九拾貳兩之爲替手形鳥居少佐を以御渡ニ相成候間直ニ會計局に相納申候以上

十二月廿七日　　公用方

十二月廿七日本藩制度改革につき廳方を廢す依りて當役宮川小源太の職を免し其多年の勤勞を賞す

〔御國東京往來狀扣〕

別紙を以申入候

宮川小源太

其方儀今度御廳方被廢候付當御役被遊御免數年出精相勤候付目錄之通被下置旨被仰出之

御紋附紬御綿入一　（付札）今迄之御給扶持ハ上リ候

右之通例之趣を以可被申渡候以上

十二月廿七日　　權大參事　大參事　宗村加兵衛殿

（從東京西京之下劄に、右は明治三年正月廿三日西京にて當人に書付を渡したる旨見えたり）

十二月廿七日上野吉井藩知事吉井信謹及ひ河内狹山藩知事北條氏恭依願免官の旨を達せらる

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄探索報告〕

明治二年十二月廿七日御達之由松原彦彌太書取

一万石上野吉井　　吉井藩知事

一万石河内狹山　　北條狹山藩知事

依願藩知事被免候由

〔明治三年ヨリ探索書控〕

（正月廿七日附在東京毛利莫探索書の内）

先般版籍奉還被聞召知藩事被仰付候處辭表差出候得共不被爲及御沙汰候ニ付一旦歸藩藩中示合皇國一途同軌之御政體ヲ奉體シ重而出京再應辭退及言上候段神妙被思召候依之知藩事被免別紙之通家祿下賜東京在住被仰付候事

十二月　　太政官　北條從五位

内書所參入被仰付候事

十二月　　太政官　北條從五位

今般家祿被相定候ニ付而ハ相當之家令家扶家從以下召仕等殘置其餘從來召抱置候士卒之儀ハ地方官貫屬ニ被仰付候間姓名並是迄宛行候給祿等取調可申出候事

但家令以下殘置候人員姓名も可屆出候事

十二月　　太政官　北條從五位

従來支配地正租雜税共現石十分之一爲家祿下賜候事　太政官

十二月　狹山藩士族並卒

狹山藩被廢候ニ付地方官貫屬被仰付候事　太政官

十二月

〔防長回天史第六編下〕

（明治二年冬期ノ大勢抄略）

此日（十二月廿六日）廷議信謹氏恭ノ上請ヲ嘉納シ吉井藩ヲ廢シテ岩鼻縣ニ狹山藩ヲ廢シテ堺縣ニ併セ其士族卒ヲ二縣ニ隷屬シ從來支配地ノ租税現高十分一ヲ家祿トシテ二人ニ給シ東京ニ住セシム

十二月廿七日田安慶賴一橋茂榮の版籍奉還を許して內番詰を命し家臣は地方官の管屬に歸せしめらる

〔明治元年辰正月ヨリ十二月迄一新錄探索報告〕

（明治二年十二月廿七日御達之由松原彥彌太書取の內）

今般家祿被相定候ニ付而ハ相當之家令家扶家從以下召仕候人員殘置其餘從來召抱置候士卒之儀ハ地方官貫屬ニ被仰付候事　田安一橋

但家令以下殘置候人員姓名可屆出事

十二月

〔近世史料編纂綱例〕

廿六日（十二月）一橋茂榮田安慶賴版籍ヲ奉還ス

〔明治三年ヨリ探索書控〕

（正月廿七日附在東京毛利莫探索書の內）

一橋從二位吉井從四位田安從二位も知事御斷ニ相成北條氏之通り被仰付候よしニ御座候

〔海舟日誌〕

（明治三庚午正月二日の內）

清水家名被立下旨

田安一橋內番詰被仰付十分一、藏米にて被下家來は地方官支配相成候由昨朝早にて申來る（靜岡へ）

十二月廿八日當分の間集議院を閉ち議員に休暇を賜ふ

〔明治三年從來京西京之下廻〕

十二月廿八日集議院ニ左之通

當分重大之議事無之ニ付閉院被　仰出候來春開院之節ハ前以御沙汰可有之事

但議員一同一ト先御暇下賜候事　大政官

十二月

十二月廿八日西國筋の諸藩に異宗徒の有無を調査して長崎縣へ申告すへき旨を達せらる

〔東京ゟ之御用狀扣〕

（井澤、鎌田、飯田より）

以別紙申達候今廿八日三條殿下ニ公用人御呼出ニ付崎村常雄罷出候處西國筋諸藩公用人一同被差出別紙御書付之趣御直ニ被仰渡重大之事件ニ付彌以淺露ニ無之至密ニ取扱候樣との儀も御沙汰被爲在右御書付御渡有之即座奉畏候段常雄御請書差上候由ニ而持參相達候付指進申候條言上之上其御心得を以可被有御取計ひ奉存候此段爲可申達如斯御座候以上

猶々本行之通ニ付勿論御布告ニ可相成筋ニ之有御座間敷相伺候間此段も爲念申達候以上

熊本藩

太政官

十二月廿八日

今般異宗門之徒御取締相成候ニ付而ハ支配中異宗徒有無嚴密取調長崎縣へ可申出事

十二月

太政官

十二月廿八日大學中助教生駒新太郎職務を免せらる

〔明治三年 從東京西京之下廻〕

生駒中助教

學制御改革ニ付是迄職務差免候事

十二月　大學

生駒中助教

勤仕中勉勵ニ付正月分官祿被下候事

十二月　大學

右之外差而御注進筋も無御座候餘ゝ來陽ニ讓置申候以上

十二月廿八日　龍口

西京樣

坂梨樣

熊本樣

十二月廿九日奥羽地方の凶荒により歳入不足し國帑窮乏を告くるを以て各官省府藩縣非常の節約を行ひ冗費を省くへしとの旨を諭達せらる

〔明治三年 從東京西京之下廻〕

己十二月廿九日月番ゟ廻狀を以差廻來候御書付寫

昨年兵馬紛擾之際御用途御多端ニ付楮幣御施行一旦之急被爲凌候得共右楮幣之高ゝ全ク國債ニ相成當年ヨリハ國債可相償筈之處豊料諸道不實奥羽諸國殆皆無ニ屬シ當節歳入總計ニ而百萬石餘之御不足ニ相成候付非常之節儉被仰出候外ゝ無之場合ニ立到リ候間諸官省並府藩縣ニ於テモ猶更節儉を主トシ可成丈ケ冗費ヲ省キ御用途萬分之一ヲモ補益候樣篤斗相心得可申事

十二月

太政官

十二月廿九日京都兵部省廢止の旨を達せらる

〔東京ゟ之御用狀扣〕

正月十日　同廿日着

宗村より　大參事衆當

以別紙相達申候京都兵部省被廢候儀ニ付留守官より之御書付寫一通添書共進覽仕候（下略）

〔明治三年 從東京西京之下廻〕

己十二月廿九日月番ゟ廻狀を以差廻來候御書付寫

今般京都兵部省被廢止候此旨相達候事

十二月

太政官

十二月廿九日本藩大小參事の人名を京都留守官に申報す

〔東京ゟ之御用狀扣〕

留守官
御傳達所に
於東京御屆申上候　勅命奏任判任之姓名御屆可仕旨御
達之通奉畏左之通御座候

大參事
松井新次郎
佐々木與太郎
米田虎之助
藪　一

權大參事
鎌田軍之助
住江甚兵衛

井澤傳次
松崎傳助
奥村軍記

少參事
井口呈助
藪　作右衛門
池邊吉十郎
澤村才喜
村上求太郎

以上
十二月廿九日　熊本藩
宗村嘉兵衛

十二月廿九日故兵部大輔大村益次郎の刺客團伸次郎等處刑せらる

〔明治三年 從東京西京之下廻〕

十二月廿九日聞取書左之通

大村兵部大輔及斬害候激徒六人去ル廿日於栗田口御仕置被　仰付筈候處何歟故障有之由ニ而被差延置候處改而同廿九日於同所斬罪梟首ニ被所候罪狀書左之通

元山口藩兒玉若狹家來ニ而脫走
團伸次郎事
信行
伸次郎

此者事同志八人申合去ル九月四日夜大村兵部大輔旅宿に亂入兵部大輔へ死ニ至ルゟき程の疵を負せ逃去し候段御登庸之重職を猥りニ斬殺之企いたし　朝憲を憚さるゟゑしかた加之其節右旅宿に來客並同家來等殺害ゟおよひ候次第重科ニよつて梟首セゟむるもの也

己十二月　京都府

元山口藩毛利筑前家來太田豐熊兄ニ而脫走太田光次郎變名太田瑞穗事　光次郎

右同文

元軍曹
伊藤源助事　源助

右同文之末重科難逃剩其場ゟ逃去終ニ捕縛セらるゟ吟味之上白狀ニおよひしハ全士道を茂失ひし所行ニよつて身分を下し梟首セしむるものや

越後國兵居之隊之中五十嵐伊織變名漏東習作事　伊織

右源助同文

元久保田藩濱谷内膳家來金輪五郎變名佐藤武雄事　五郎

右同斷

元齋藤謙助家來ニ而脫走生所伊奈郡名古村金左衛門悴
岡島金一郎事　金一郎

右仲次郎と同文

右斬首都合六人也

參州產
宮和田進事　進

右之者終ニ山口藩ニ捕縛せらゑ存命ニ候ハ、同罪可申附處屠腹いたし掛ケ存命無覺束右藩ニ而斬首いたし候ニ付死骸取捨候もの也

山口藩神代直人事

直　人

右同斷

京都府ニ而

長谷様（京都府知事信篤）

松田大參事（道之）

十二月廿九日山口藩知事毛利廣封藩狀を陳へて上京の猶豫を乞ひ且つ來春上京の際鹿兒島ハ寄港し同藩知事と親しく時務を談し皇國の爲めに謀議するを許されむことを請ふ

〔明治三年ヨリ探索書控〕

公用司ゟ廻來　長谷川六右衛門書取　明治三年

私儀所勞ニ付去ル三日　御沙汰之趣早速申越今日拜聽難有仕合奉存候押而も可奉願候。應勅諭之處豫メ奉申上候通支配地に浪人躰之者入込郷村等へ及亂妨又之放火等之所業も時々有之甚苦勞罷在候。夫々警防取締向等嚴敷申付置候處見込通候樣ハ置候。無覺束再三願立候件々奉恐入候得とも來三月迄之御猶豫被成下候樣奉願候尤二大隊之儀ハ兼而附屬出府之積申付。候間不取敢奉存候。宜敷御執奏奉願候以上

十二月廿九日　在所出

山口藩知事

牧村（權大參事牛九郎正直）

外ニ彈正臺ニ而二人

右之面々此節之一件ニ付不來之次第有之由ニ而當分謹慎被　仰付候由之事

右之外京地ハ一躰御靜謐ニ而差當言上之筋ハ寸毫茂無御座候以上

正月十日　西京

坂梨様　正月十七日夕着

熊本様　正月廿日着

辨官御中

私儀來春暖和之節廻之通支配處發途仕候。兼而鹿兒島知事儀に連年天下朝廷之御爲盡力周旋罷在候旨厚キ奉蒙御依頼候ニ付同人。へ立寄申談乍不及朝廷万分一之御補闕ニも相成候樣致且藩政之可否ヲ討論仕皇國同軌。御政體厚迄奉仕候樣奉願上度御許容可被成下候以上

十二月廿九日　在所出

辨官御中

正月十七日右に御付紙

願之通聞食候事

山口藩知事

十二月晦日曩に桂宮警衛を免せられたる細川利永肥後高瀨に歸着す

〔密書輯錄〕

自著子爵細川利永履歷大略

一明治二年十一月十三日右御警衛被免海陸ヲ經テ十二月晦日歸邑

十二月某日癸丑以來國事に殉死せし者並に其妻子等明細取調へ提出すへき旨を更に府藩縣に令達せらる

〔明治三年從東京西京之下廻〕

月番ゟ廻狀を以差廻來候ロ達書寫

谷守外記ロ達を以

先般厚　思食を以癸丑以來國事ニ斃候者並其妻子等於府藩縣取調可申出旨被　仰出候處　御趣意ヲ奉體セス等閑ニ捨

置候向キ又ハ取調粗略ニテ不分明之廉モ有之候付明細早々取調候樣御達之事

十二月

十二月某日酒田縣知事津田山三郎本官を免せられ更らに同縣大參事に任せらる

〔津田家記〕

津田信弘履歴書

一明治二年八月任所ニ赴キ同十二月本官ヲ免セラレ酒田縣大參事ニ任セラレ同時ニ辨官ヨリ左ノ通リ達セラル

其御縣儀ハ昨年紛擾之餘近藩之形勢人民之情狀彼此御評議之旨有之此度大原正四位知縣事被仰付御自分更ニ大參事被仰付候間御趣意抦御奉體御勉勵可有之此段別而申入候也

十二月某日諸藩にて嘗て舊幕府の許可を受け製造せし楮幣の數を調査し明年二月を期して申告せしめ又一新後府藩縣にて新製せし楮幣の通用を停止せらる

〔明治二年集　錄〕

先般御布告有之候通追而新貨幣御鑄造御國内金銀貨幣御改正昨年御施行之楮幣ハ追而御引替可相成候付於諸藩舊幕府方許可ヲ受從前制造之楮幣以來之數ヲ增益致候儀嚴禁被仰出候間是迄制造之惣高取調來午二月中迄ニ大藏省ニ可屆出候且御一新後府藩縣ニ於テ楮幣製之向ゑ以來通用停止被仰出候間此段相達候事

但製造無之府藩縣ハ其趣早く同省ニ可屆出候事

十二月

十二月某日旅費規則中東海道其他諸街道繼人足賃金見積額を改定せらる

〔明治三年ヨリ探索書控〕

太　政　官

旅費規則中東海道其外諸街道繼人足東海道從東京西京迄三兩貳分之見込ヲ以拂方可有之旨相達置候ヱ共事實不相當ニ付外道中筋脇往來等之外ニ巨細取調出來候迄人足見積當分左之通相定候間爲心得相達候也

人足壹人ニ付金三兩壹分

奥州海道從東京白川迄金壹兩壹分

甲州街道從東京甲州迄金三兩三朱

脇道往來永二百三拾文

十二月某日本藩先きに提出せし藩政改革調書に關する太政官の推問に對し更に詳細なる調書を進達す

〔諸務變革調〕

口上書取

此節當藩改革之書付御達仕置候處猶委細取調御達可仕旨御指圖之趣奉畏左ニ一書を以御答申上候

一藩士已下定祿之儀者別紙表面之規則を以省減いたし候得共於御當地從前人別之知行高割小前帳無之依而省減高何程と申儀分兼申候間此儀者急飛を以申遣追而御達可申上候

一藩士兵卒農商並社人僧侶之戸口左之通

一參拾六萬千貳拾四人　男

內

八千五拾人	藩士	參萬七千貳百拾九人	兵卒
八千貳百五拾九人	從前陪臣	千七百人	兩末家藩士兵卒
貳拾七萬八千八百四拾六人	農	壹萬八千七百三拾八人	商
八百六拾五人	社人	參千百六拾七人	僧侶
六百八拾五人	盲人	參千四百九拾五人	穢多

明治二年